

海冬レイシ  るるお 

機巧少女は

マシンドール

Unbreakable Machine-Doll

傷つかない

Facing
"Lady
Justice"

8

MF文庫



海冬レイジ  るるお

 8  **機巧少女**
マシンドール
Facing "Genuine Legends"
傷つかない
Unbreakable Machine-Doll



女子四人とマスコットたちが
仲良く食事をしているのは、
見た目にも華やかで、
秋の寒々しい光景が、
そこだけ春めいて見えた。

『雷真……あの中に
飛び込むなんて……
『全員の女だろ』
なんて……』





夜の自主鍛錬を終えた後、
寮に戻った雷貞を
待ち受けていたのは――

『お帰りなさい雷貞――
じゃなくて、旦那さま』

『お帰りをお待ちして
ありました、旦那さま』

テリトリイ
「この円はオレの支配領域。」

入った時点で、
貴様の負けだ」

「う、数の勝負なら、
私も負けない！」

「……わたしは先に
音を上げるわけには
参りませんね」

あきつめちや
ダメよー！

「……どうしますか
雷真？」

「あきつめちやには悪気が

叩きのめすー！」



MF文庫J

マッシュルーム

機巧少女は傷つかない 8

Facing "Lady Justice"

海冬レイジ

口絵・本文イラスト●るろお

編集●庄司智

contents

Prologue	罪過の自覚#1
Chapter 1	乙女の宣戦布告
Chapter 2	溺れぬように
Chapter 3	胃袋争奪戦
Chapter 4	我欲の聖塔 <small>ジブツツタ</small>
Chapter 5	饗宴
Chapter 6	封すること能わず
Chapter 7	正義を謳う神姫
Epilogue	罪過の自覚#2

Prologue 罪過の自覚 # 1

「今日という今日は、夜々ややの堪忍袋かんにんぶくろも爆裂しました」

夜々は洞窟どうくつのような眼めをして、呪わしげにつぶやいた。

「夜々という善き妻よきがありながら、お楽しみの相手をとつかえひっかえ……！」

「妙な言い方するな！ 魔術の訓練だろ!?」

雷真らいしんはあわてて否定した。弾みで集中が乱れ、木偶人形でくがばたりと倒れる。

二人がいるのは〈ヴァルブルギス王立機巧学院ロイヤルアカデミー〉の敷地内——野戦演習場の一角。

雷真の周囲には、飾り気のない木偶人形が十数体も転がっている。

「どう見ても、とつかえひっかえです！」

「違う！ 壊れた木偶を捨てて、新しいのに取り替えてるだけだ！」

「使い捨てなんて鬼畜の所業です！ そもそも雷真のお人形は夜々なのに——っ！」

「バカだな、それを言ったら、俺おれは小紫こむらさきやいろりを使ったことも——」

いや、これは失言だ！

恐る恐る夜々の顔色をうかがう。だが、夜々はそこには腹を立てず、

「姉さまや小紫はいいんです。そこは最初から覚悟ができています。姉妹どんぶりも想定

の範囲内なんです……」

「……おまえの言動は俺おれの想定をはるかに超えてるんだが？」

「夜々ややが許せないのは、どこの馬の骨とも知れない女狐めぎつねで……！」
「いっいっい。」

「木偶に男も女もないだろ！」

「私語を慎め！ うつけども！」

どかーんつ、と爆発音が響き、大量の土砂が吹き上がった。

雷真らいしんと夜々が土砂もろともにはね上げられる。空中で猫のように反転し、それぞれ着地する

と、目の前に一人の女性が立っていた。

民族衣装ふうのドレスをまとい、強烈な魔力をまき散らす美貌びぼうの剣士。

魔王グリゼルダ。学院の教授であり、雷真が師事する人物だ。

グリゼルダは頬ほおをひくつかせ、白銀はくぎんに輝く剣を雷真に突きつけた。

「つくづくいい度胸だな……私の授業中にいやらしい会話を……！」

「いやらしくないよな!? 大体、生徒は俺だけじゃねーか！」

雷真はあきれ顔であたりを見回した。だだっ広い土びろのグラウンドに、ほかの学生の姿はない。

雷真と夜々、そしてグリゼルダだけだ。

「つい昨日まで出席者が五〇人いたとか、とても信じられねえ……」

「まったく、近頃ちかごろの学生は根性がない。明日にも戦場で死ぬぞ！」

「学生を戦場に送るな！ そのスパルタがやりすぎなんだよ！」

グリゼルダが課したのは、木偶を使った〈模擬戦闘〉だった。

木偶は〈イブの心臓〉を内蔵していない。つまり、〈意志〉がない。木偶を動かすのは学院生であつても簡単なことではなく——グリゼルダを相手に実戦同様の戦闘訓練を行うなど、狂気の沙汰さたと言つていい。

そんなわけで、わずか二回目にして、参加者は雷真だけになってしまった。

「秀才連中が言ってたぜ。あんなの単位が取れるわけない——ってよ」

「誤解だ。私は参加者全員にAを進呈するつもりだし、そうなるよう面倒を見る」

「……本気かよ？」

「課題がクリアできるまで指導してやるさ。寝る暇も与えずにな！」

「それをやめろ！ だから参加者が逃げたんじゃねーか！」

「黙れ！ いつまでも休んでいるな！」

再び剣が一闪。土が吹き飛んで、雷真と木偶が宙を舞う。

雷真は空中で体勢を立て直し、新しい木偶に魔力を飛ばした。

グリゼルダもまた、木偶の一体に魔力を飛ばし、応戦する。

ぶつかり合う木偶と木偶。だが、同じ木偶を使っても、力の強さは段違いだ。あっさりボディを碎かれ、雷真の木偶が吹っ飛ばされた。

「くっそ……もう一本！」

「当然だ。こい！」

夜々がすねた様子で見守る中、いつ果てるともない模擬戦闘を繰り返す。

雷真はバテバテになりながら、昼食を摂るのも忘れて訓練を続けた。

雷真がグリゼルダのしごきに耐えている頃——

「何よあいつ！ 信じられない！ 何て身勝手なの！」

輝く金髪の美少女シャルが、憤然として中央食堂に入ってきた。

彼女の肩の上で、仔竜こりゆうが渋い声を出す。

「落ち着け、シャル。雷真と昼食をともにできず、残念なのはわかるが」

「ちち違うわよ!? 残念とかじゃなくて……今までだって、待ち合わせてたとか、待ってたとかじゃないしね? たまたま一緒だっただけじゃない」

「では、彼の何に腹を立てているのだ?」

「わ、私はただ、その……そう、食事の大切さを訴えたいの。本気で復讐ふくしゅうしたいなら、常に最高のパフォーマンスを発揮できるよう体調管理をすべきだわ」

「——まあ、おおむね言い得て妙だ」

雷真が現れないので、シャルは久しぶりで、一人きりのランチタイムになりそうだった。この広い食堂で連れがいないというのは、何とも落ち着かない。雷真と知り合うまでは、それが当たり前だったというのに。

トレイにバスタとチキンの皿を取って、空いた席あにおさまる。

何となく食欲がわかず、小さくため息をついたとき、

「も……もし!」

と、変に古風な呼びかけが聞こえた。

顔を上げると、東洋人の乙女が立っている。

一瞬、夜々かと思った。背格好が同じくらいで、黒髪だ。夜々と同じくキモノ姿だが、こちらにはあでやかな桜色で、紫むらさきのハカマを合わせていた。

乙女は小動物みたいに縮こまり、そつとシャルの対面を示した。

「こ、ここは空いてますでしょうか……？」

「ええ、どうぞ」

空席が見つからず、うろろしていたらしい。何とも要領が悪い。

「貴女は（十三人）のひとり、タイフリンセス《魔姫》ヒノワね？」

「まあ、光栄です。わたくしをご存知だなんて。ええと、わたくしの記憶違いでなければ、貴

女はテレックス《暴竜》——あつ、すみません！」

「いいわよ、テレックス《暴竜》で。私はシャルロット・プリュー」

「ご丁寧ありがとうございます。お噂はかねがね」

「どうせ悪い噂でしょ？」

「い、いえ……そのようなことは……っ」

図星を指されてまごつく乙女。初々しい反応が可愛らしい。

「どうぞよろしく願います。シャルロットさま」

椅子を引き、丁寧に腰を折る。首を差し出すような、深いお辞儀だ。

その礼儀正しさに、シャルは好感を持った。

「見たところ、食堂を使うのは初めて？」

「はい……これまでは、ずっと離れを使っておりましたので……」

恥じ入って、うつむく。「離れ」とは学院長公邸の別宅で、学内に数棟あり、特に有力な家系の者が寮代わりに使う。専用のシェフがつくほどの厚待遇だ。

「ですが、今学期から女子寮に移ることになり……勝手にわからず難儀しております」

「それは大変ね。グリフォン女子寮でしょ？ 私でよければ、何でも言って」

「まあ、お優しい方……」

地獄に仏を見たように、乙女は目を潤ませた。反応が大げさだ。

「あのっ、ではその……よろしければ、お……お友達になっただけませんか？」

不安そうな上目遣い。ずぎゅーん、とシャルの心臓が撃ち抜かれた。

（何この子、可愛い！ 日本人ってこんな子もいるの？）

夜々のふてぶてしい態度とは大違いだ。——もつとも、夜々がシャルにふてぶてしいのは、

シャルを恋敵こいがたきと見なしているせいなのだが。

シャルは満面に笑みをたたえ、がつしりと大和撫子やまとなでこの手を握った。

「もちろんよ！ お友達になりましょう！」

太陽が西に傾き、学院の外壁に沈もうとしている。

「……くそ！ 全っ然、相手にならねえ！」

雷真は汗だくになって、演習場に転がっていた。

「まだ……こんなもんかよ、俺は！」

「そう悲観するな。今日の訓練は大いに意味があった」

突き立てた剣に寄りかかり、グリゼルダが汗をぬぐった。ブラウスがべったり胸に張りついて、やわらかなふくらみが透けて見える。

あわてて視線をそらす雷真。視線の先にはどす黒い妖氣を漂わせる夜々がいて、雷真はもつとあわてて視線を戻した。

「意味って何だよ？　つか、この訓練は何を鍛えてるんだ？」

「じきにわかる。そして、自信を持って。瞬間的に出せる力は貴様の方が上だ」

「……マジかよ？　木偶がぶつかったとき、露骨に力負けしてたぞ？」

「貴様は〈秘術〉——コウヨクジンを使わなかっただろう」

「そう連発できねえよ。あつと言う間にバテちまう」

「だろうな。貴様と私では魔力の絶対量が違う。魔力というものは、鍛えれば鍛えるほど伸びていく。年季がものを言うんだよ。貴様、魔術を始めて何年だ？」

「真面目にやり始めてから、三年くらいだな」

「私は一六年やつている。簡単には追いつけまい。我がウェストン家もまた、代々魔術師の家系。生まれついでのも才でも、貴様に大きくひけは取らん」

雷真はそつとこぶしを握り、囁みしめるようにつぶやいた。

「あいつは俺と同じ一族の出で……一七年やつてる」

沈み込む雷真を心配したのか、ふと、グリゼルダがこんなことを言った。

「貴様、剣を使わぬのはなぜだ？」

「……何のことだ？」

「とほけるな。私の目はごまかせん。……覚えているか、夏のことを。貴様はイブシロンの剣をモップでたやすく押さえ込んだ」

痛々しく眉をゆがめ、しかし冷静な声で、グリゼルダは続けた。

「私の剣をかわすときも、正確に太刀筋を見切り、次の動作を読んでいる。素人の感覚ではない。貴様には剣の覚えがあるはずだ。それも、ブロードソードやクレイモアのような蛮剣ではなく、剣客好みのサーベルかエストック……」

「……カタナの覚えが、ある」

「カタナ——極東の奇剣だな。片手で扱える大きさながら、その威力はツーハンデッドの大剣にも劣らず、切れ味は鎧を断ち切るほどだとか」

赤羽の家を飛び出して、雷真が居候していたのは、剣術道場だ。

師範から手ほどきを受けたのも主に剣術。徒手空拳の技は副次的な、あくまでも『刀を失った場合』のサバイバル技術にすぎない。

「そのぶんでは、かなり使えるのだらう？　なぜ、武装しない？」

「……俺はもう剣士じゃない。人形使いだ」

「そのふたつは共存できるだろう。特に実戦では」

その好例が目の前にいる。グリゼルダは剣士としても一流だ。

雷真は頑として答えない。そんな雷真を、夜々がつらそうに見つめている。

グリゼルダは怪訝そうにしたが、それ以上は追及せず、

「……ともあれ、今日の鍛錬は終了だ。夜会に備えて、もう上がれ」

そう言っ、演習場を出て行く。入れ替わりで史学部の助手がやってきて、木偶の後片付けを始めた。雷真も立ち上がり、努めて明るく夜々に言った。

「確かにバテバテだしな。そろそろ、上がるか」

「はい。雷^{らいしん}真^{まこと}はいつもいつも、根^{こん}を詰めすぎです」

「いや、俺^{おれ}はまだまだ努力^{どりょく}が足りねえよ」

「あら、まだやってたの？ 熱心^{ねっしん}ね、感心^{かんしん}感心^{かんしん}！」

突然、聞き覚えのある美声^{みせい}が割り込んできた。

シャルが林の入り口に立っている。にこにこ、にこにこ笑顔の垂れ流し状態だ。

やけに機嫌^{きげん}がいい。それはもう、不気味なほどに……。

「……どうした、シャル。浮かれてるな？」

「ふふん♡ 貴方^{あなた}に友達^{ともだち}を紹介しようと思つて、わざわざきてあげたのよ」

「友達？」

「そうよ！ フレイも私のことを友達^{ともだち}って言つてくれたし、新しく友達^{ともだち}を作ることだってできるのよ。もう「ぼっち」なんて言わせないわ！」

「誰^{だれ}も言つてねえだろ。ところで、詐欺^{さぎ}にかかったんじゃねえよな？」

「何で詐欺^{さぎ}なの!? その発想^{はつしやう}がバカにしてるっていうのよ！」

怒り出す。が、すぐに機嫌^{きげん}を直して、にっこり笑った。

「すつごく可愛^{かわい}い子^こよ。誰^{だれ}だと思^{おも}う？」

「さあ……? 学生^{がくせい}なんて、夜会^{やかい}のトップランカーくらいしか知らねえしな」

「じゃあ、ヒントね。貴方^{あなた}と同じ国の出身^{しゅしん}よ」

「俺^{おれ}と同じ？」

よっぽど嬉しいのか、シャルは頬を上気させている。対照的に、雷真は自分でもそれとわかるほど、はつきり青ざめた。まさか……。

「あーもう愚図ね。いいわ、せいぜい見て驚きなさい！」

シャルは背後を振り返り、誰かに手招きした。

「じゃーん！ ヒノワよ！」

シャルの声に合わせて、木陰から乙女が顔を出す。もじもじと恥ずかしそうな表情が、雷真を見た瞬間、凍りついたように強張った。

それは雷真も同じだ。目をそらすわけにもいかず、お互い気まずく見つめ合う。

「……え？ 何、この空気？」

シャルが夜々を見る。夜々は「わかりません」というふうにかぶりを振った。

——そう、この二人は知らないのだ。

学院に籍を置く以上、こんな日がくるかもしれないとは思っていた。だが、彼女は日本に帰ったと聞いていた。それがまさか、こんな形で再会しようとは……。

「よ……よう、日輪。久しぶりだな——」

乙女は弾かれたようにきびすを返し、一目散に走り去った。

「あ、おい待てよ！ 日輪！ 待てて！」

へばった体に鞭打って、追いかける。だが、一〇メートルと行かないうちに、木陰から太い腕が飛び出してきて、雷真の横っ面を殴り飛ばした。

野生動物なみの反射神経を持つ雷真でも、さすがにこれは避けられなかった。

「……ってーな、誰だ！ いきなり何しやがる！」

しかし、抗議の声はそれで打ち止め。後の言葉が続かない。

雷真の眼前には、二人の男子学生が立っていた。

一人は体格がよく、どこことなく金剛力士像を思わせる。

もうひとりとは少女のように線が細く、困ったように笑っていた。

「昂……六連！」

「おひさしー、雷真はん」

線の細い方——六連がひらひらと手を振って挨拶した。

一方、体格のいい方——昂は親の仇を見るような目で雷真をにらんでいた。

「昂！ てめえ！ いきなり殴りやがって、何のつもりだよ！」

「こっちの台詞やド阿呆！ シバかれた理由、ほんまにわからんか!？」

怒鳴り返されて、鼻白む。

「おまえがお嬢に何したか、胸に手エ当ててよう考えやボケ！」

昂は「べっ」と唾を吐き、日輪が走り去った方に向き直った。

「行くえ、六連！ そいつ見とるとけったくそ悪うなる！」

ずんずんと大股で去って行く。六連は雷真に顔を寄せ、耳打ちした。

「堪忍なあ、雷真はん。昂のアレはジェラシーや」

「何しとる！ 六連！」

「ほいはーい。ほなあ、雷真はん。近いうち、またお会いしまひょー」

去って行く二人を、夜々もシャルも呆然として見送った。

「……何よ、どういうこと？ あいつら、誰？」

「あの二人は日輪の護衛だ」

「護衛ですって？ じゃあ、貴方を殴った理由は——まさか、貴方……私のヒノワにもう手を出したの!？」

「違う！ 何でそっちに飛躍する!？」

「言い訳なんかしないでいいわ。貴方のことなら、よくわかってるわ。甘い言葉でその気にさせて、さんざん弄んで、ゴミみたいに捨てたのよね？」

「ちっともわかってねえよな!? 俺がいつ、誰にそんなことをした!？」

「夜々にしましたーっ！ うわーん！」

「してないだろ!? 過去を捏造するな！」

「そうよ、きっとボロボロにして捨てたのよ！ そうじゃなきゃ……女の子があんな悲しそうな顔はしないわよ……」

雷真は言葉を失くし、打たれた頬を押さえた。

確かに、日輪は泣き出しそうな顔をしていた。シャルの言う通り、日輪の心はボロボロなのかもしれないし——事実、雷真は日輪を捨てようとしたのだ。

雷真の沈黙を肯定と受け取って、シャルの顔から表情が消えた。

「許せない……女の敵……準備しなさい、シグムント……!」

「ちよ……待てよ？ シグムントもやめてくれよ？」

「シャルロットさん。雷真におかしな真似はしないでください」
夜々ややが鋭く言う。助け舟たすけふね——のわけはなかった。

「雷真には、夜々がしつかりお灸きゅうを据えますから♡」

雷真は心の中で天を仰いだ。

オルガとの〈婚約騒動〉がようやく終わったと思ったら——
どうやら、本当の〈婚約騒動〉が待ち構えていたらしい。

Chapter 1 乙女の宣戦布告

1

グリフォン女子寮の一室で、日輪は羽毛布団をかぶり、亀のようになっていた。その様子を、二人の男子学生——昴と六連が困り顔で眺めている。

「ええ加減にせえ、お嬢。いつまでもメソメソすな」

「うっ、うっ、放っておいてください！ わたくしなぞ、どうなつてもよいのです！」
やけっぱちの言葉。ぴきっ、と昴のひたいに血管が浮き出した。

「ド阿呆！ 何うじうじしとんのや！」

「昴、落ち着き！。ここ女子寮ですよ」

止めようとすると六連を振り払い、昴は布団をはぎ取った。

泣き濡れた日輪の顔は可哀相なくらいぐしよぐしよで、昴もさすがに怯んだが——それは一瞬のことだ。昴はすぐに顔を引き締め、厳しく叱った。

「おまえはいずれ、いざなぎ一門を背負って立つ人間やろが！ 当主がそんなヘタレやと、下のモンがついてこんわ！」

「だって……わたくし……もうどうすればいいか……っ」

「阿呆！ 地位だろうが名誉だろうが人間だろうが、欲しいモンは力尽くで手に入れたらええ！

それがいざなぎ流や！」

その言葉は日輪ひのわの胸を打ったようだ。日輪は涙をぬぐい、顔を上げた。

「そう……ですね。わたくしはいざなぎ一門の陰陽師おんやうじ。式と占うらなを操る者として、己おのれの恋愛くらい、成就させて見せます！」

ぐっ、とこぶしを握る。そして、にこっと可愛らしく微笑んだ。

「ありがとう、昴すびら。貴方あなたのおかげで力がわいてきました」

「れ、礼なんぞいらんわ阿呆。あと、言うた以上はきっちりせえよ！」

「あははー。昴、ゆでダコみたいですよ」

「やっかまし六連むつら！ ほっとけ！」

からかう六連の胸を突き、ドアを乱暴に開ける。ドアの外にはものすごい形相けいようそうの寮監が立っていて、全身に怒りのマグマをたぎらせていた。

「女子寮は男子禁制だと……言わなかったかしら……!?」

「ごごごご、と床が揺れる。昴と六連はそろって腰を九〇度に折った。

「す、すみませんでした！」

逃げるように女子寮を飛び出し、ラファエル男子寮へと向かう。

道すがら、六連は思い出したように笑った。

「阿呆やなあ、たきつけるようなこと言うて。あきらめさした方がええやん」

「……そらまあ、俺おれが雷真らいしんは気に食わんけど」

「そうやのうて——昴はいざなぎの名門から（賀茂家）の嫡流ちやくりゆう。天下の夜会やかいに出はるだけの力もある

る。家柄も実力も一流や」

「はあ？ 夜会ならおまえかて出るし、家格かてそう変わるんやろ」

「僕やのうて雷真はんの話です。赤羽一門は滅亡、雷真はんを婿に取る旨みは半減しとります。

それに、うちの一門には反対派もぎょーさんいたはる。汚らしー戦争屋の赤羽と、帝の血を引く土門では到底釣り合わん言うてな——」

「はつきり言え！ 何が言いたい！」

「お嬢が雷真はんをあきらめはったら、昴が土門家のお婿はんやで？」

昴は言葉に詰まった。げんこつを握りしめ、足もとをにらむ。

「……そうかもわからん。せやけど、俺は嫌なんや。お嬢が悲しむとこは見たない。それに——とりあえず、うじうじしとる奴は腹立つ！」

六連は笑い出した。

「あほらし！ けど、昴らしわ。ほんま、お嬢にべったり惚れたはるなあ」

「そそそ、それとこれとはちゃうやろ！ しばくぞコラ！」

照れ隠しに怒鳴り散らし、ずんずんと先に行く昴。六連は苦笑して、

「けど、あんな張り切らはって、お嬢は何しはる気イやろな——て、昴っ！」

グリフォン女子寮を振り向く——その表情が引きつった。

「何や。どうした？」

同じく振り向いた途端、昴のあごが外れた。

「……この辺は、俺らの式が哨戒しとった……あんなもん……いつの間に」

潇洒なグリフォン女子寮。夕陽が照らす、白い外壁に。

鮮血で書き殴ったような、赤いメッセージが浮き出していた。

「（魔姫）」とその一味は夜会から去れ。棄権か、然らずんば死」

血文字は二人を嘲笑うかのように、すうっと風に溶けるように消えた。

2

その夜、小紫はびょんと外壁を跳び越えて、密かに学院に侵入した。

樹の枝に飛び移り、きよろきよろと首を回す。

雷真はすぐに見つかった。風呂上がりらしく、さっぱりした顔で座禅を組んでいる。

呼吸法と精神統一による訓練だ。魔力の底上げをはかっているらしい。

雷真の邪魔をしないよう、じっと息を殺していると――

「どうした、小紫」

最初から気付いていたらしい。雷真が振り向きもせずと言った。

観念して枝から飛び降りる。小紫を見るなり、雷真は心配そうな顔をした。

「このところ元気がないな。地下の空洞で、ロキと何かあったのか？」

鋭い。小紫はためらいつつ、言ってしまいたい気持ちもあって、口を開いた。

「あのね、雷真……………やっぱり何でもない！」

「ロキのやつ、フェニックスってのを倒したんだってな」

いきなり核心を突かれ、小紫はびくっと伸び上がった。

「聞いたぜ。伝説級の化け物で、炎が効かない自動人形だつて。そいつをケルビムで叩き斬つたつてことは、何かすごい技を使つたんだろ？」

そう、その話をしたいのだ。したいのだが……。

「言いにくいなら、言わなくていいさ」

「……でも、私が教えてあげたら、雷真は楽に勝てるかもしれないよ？」

「あいつとは五分の勝負がしたいんだ。五分でぶつかって、勝ってみせるよ」

雷真は見透かしたような目をして、優しく言った。

「おまえ、そのことで悩んでたんだろ？」

雷真に言ってしまった方がいいのか。それは正しい行為なのか。ロキが〈敵〉ならば悩みはしない。だが、ロキは雷真と命を預け合う間柄で、先の戦いでは小紫とも共闘した。雷真の肩を持つてしまつていいものか——小紫を悩ませていた問題だった。

小紫はふふっと笑って、

「雷真も気が回るようになったねー。それとも、私のことが気になっちゃってる？」

「はは、何言つてんだ」

「……もう、少しはキョドつてくれないとつままない！ まあ、でもしょうがないかー。雷真のまわりには、可愛い子がいっぱいいるもんねー」

「なっ、何言つてんだ！」

「あはっ、キョドった！」

小紫は悪戯いたずらっぽく微笑ほほえんで、雷真に流し目を送った。

「目移りばかりしていると、ひとりもつかまえられるいよ？」

「……何のことだよ？」

「それとも、みんなモノにしちゃう？」

「冗談やめろ！ 俺おれのまわりには、危険な野獣がやたらといるんだ！」

雷真は小紫の口を押さえ込み、おっかなびっくり、あたりをうかがった。

その瞬間、ひょおおおおつ、と強烈な冷気が吹き込んできた。

「雷真……小紫を襲って何してるんですか？」

「そうよ！ そんな小さな子を抱きすくめて……この変態！」

案あんの定じよう、と言うか何と言うか、夜々ややとシャルが駆けてくるところだった。

小紫はシャルに無邪気な笑顔を向け、屈託くつたくのない声で言った。

「ちっちゃくないよ。私の方がお姉さんより大きいよ♡」

「どっ、どこ見て言ってるのよー！」

「ま、負けないでくださいシャルロットさん！ 今のは小紫のジャブです！」

ジャブどころか強烈なボディブローだ。シャルは悶絶もんぜつしかけている。

既に雷真を糾弾する雰囲気ではない。雷真は緊張を解いて二人にたずねた。

「で、おまえらどうしたんだ？」

「あ……シャルロットさんが、雷真に相談したいことがあるって」

雷真はピンときたらしい。気まずそうに視線をそらし、つぶやく。

「日輪……どうだった？」

小紫のジヤブをもらったとき以上に、シャルはつらそうな顔をした。

「わからないわ。(護衛)の男子たちが何か話してたみたいけど……ノックをしても、全然返事がないの。……私のせい、よね？ 私が貴方に引き合わせたから……」

「シャルよ、それは考えすぎだ」

見かねたように、シグムントが慰めを言った。

「君が浮かれて彼女の気持ちを傷つけたのだとしても、君が学院の嫌われ者で、友情に飢えていたことを知れば、彼女も同情し、許してくれるだろう」

「ありがと……でもトドメ刺してるわよっ」

シャルはしょんぼりと背中を丸めて、弱々しい声で言った。

「せっかく友達になれたのに……嫌われちゃってたら、どうしよう……？」

「大丈夫だ。日輪はあの通り世間知らずで、まわりが見えなくなることも多いが——そんな逆恨みをするような奴じゃない。今頃はようやく冷静になって、おまえの厚意を無下にしたんじゃないかと不安になってる。だから、おまえは寮に戻——」

優しく笑いかけようとした、その笑顔が引きつる。

シャルの眼に、もう涙はなかった。代わりに、ひどく冷たい光がある。

「……どうして、そんなに詳しいわけ？」

「え？ あ、いや、それは……」

「さっき演習場で、『親が決めたただけの名目上の婚約者だ』って言ったわよね？ それがどう

して、彼女のパーソナリティまで知ってるの？」

「……すまん、今のは適当に言ったんだ。口から出まかせだ」



「嘘です」

夜々が余計な口を挟む。こちらにも真つ暗な眼をしている。

「今、雷真らいしんったらすごく優しい眼をしてました」

「詳しく聞かせてもらおうかしら」

「いっそ体に訊くのもアリですね」

「やめろ！ 何で結託してんだ！ 小紫こむらさき、助けてくれ！」

「あはは！ じゃーね、雷真！」

小紫は身軽に頭上の枝へと飛び移った。

雷真に意味深長な視線を送り、くすつと笑う。

ほらねー？ ふらふらしてるから、そうなるんだよ！

3

翌日も雷真はグリゼルダの授業に参加した。

既に時間割は形骸けいがいと化し、空いている演習場を勝手に占拠して、ひたすら木偶でくで実践を行うだけの〈個人授業〉となっている。

夕刻までぶつ通しで訓練を受け、シャワーを浴びてから、夜会の会場へ向かう。

コロセウムに続く林道で、シャルと日輪ひのわが並んで歩いているのを見かけた。どうやら、仲直りは問題なくできたらしい。シャルもまぶしい笑顔を見せている。

「よかったですね。シャルロットさん、楽しそうです」

夜々が微笑む。それには、雷真も心から同意した。

コロセウムの舞台には、既にフレイがいた。ガルム夫のラビを連れている。ロキの姿はない。ロキは先日の傷が癒えず、まだ入院中なのだ。

フレイに挨拶しようと手を上げたとき、不意に客席がざわめいた。

「雷真！ あれ！」

夜々が舞台の外を示す。入場ゲートを通じて、誰かが入ってくる。

執行部の白コートを羽織り、蜂蜜色の金髪をなびかせる乙女——オルガだ。

「あれって、アリスさんの変装……じゃないですよね？」

「ああ。アリスはとくに学院から姿を消した」

先日の〈お茶会〉を最後に、アリスは「さよなら」も言わず、置き手紙さえ残さずに、シンと二人で学院から姿を消した。ずいぶん唐突な別れだが、それがかえって雷真を安心させた。

別れも言わずに去ったということは、その必要がないということ——つまり、それほど間を置かず、戻ってくるつもりだろう。

アリスでないとすれば、当然、本物のオルガだ。

舞台上上がるや否や、オルガは朗々たる声を響かせた。

「執行部の諸君、客席の紳士淑女に告げる。私ことオルガ・サラディーンは〈第三位〉の地位を捨て、〈第三五位〉にまで降格したい」

一瞬の静寂——直後、どよめきが起こった。

「おい、学生総代。一体、どういうことだよ？」

「君が口出しするのはお門違いだ。〈第三位〉の意向は〈第百位〉のそれに優先する」

フレイがくいくいつと雷真のそでをつかみ、こそこそつとささやいた。

「う。たぶん、下位組を、止めるつもり」

——なるほど。雷真とロキ、そしてフレイの三人を「単独で」止められるような実力者は、まだしばらく舞台上に現れない。代わりに止めてやるつもりか。

「……夜会やかいは国家間の利害や、賭博とばくもからむ国際競技って話だ。執行部は八方から突き上げを食ってるんだろうな」

若干の同情を覚えながら、雷真はオルガに忠告した。

「面白い試みだが、俺たちおれがあんたを倒せば、それまでの話だぜ？」

「その通りだな。君たちにそれができるなら、の話だ」

オルガは艶然えんぜんと微笑ほほえんでいた。虚勢でも威嚇でもなく、余裕の笑みだ。

再び雷真に背を向け、執行部の審判を振り向く。

「さて、異論がなければ、私が降格する許可をもらいたい——」

「お待ちください！ その役目、わたくしに譲ってくださいませ！」

突如、凜りんとして涼やかな声おんこばさが響いた。

女椅おんないばさをふわりとひるがえし、声の主——日輪ひのわが舞台上上がってくる。

観客席から直じかに飛んできたらしい。黒い翼のようなものがブーツから生え、日輪の体を浮かせていた。

雪が舞い降りるような、軽やかな飛翔^{ひしょう}。着地と同時に翼は消える。日輪はオルガの前に歩み出て、まずは丁寧^{ていねい}に腰を折り、次いで堂々と述べた。

「わたくしは〈第八位〉——学生総代さまのご意向を覆すことはできません。が、譲っていただけぬのであれば、力に訴えてでも言い分を通します」

あの学生総代を相手に、臆^{おく}したふうもなく言い切る。夜々^{やや}も、フレイも、そして雷真も、思わず見惚れてしまうほどの凛々^{りんりゃ}しさだった。

オルガはじつと、見定めるように日輪を見つめた。

「私に敵対しようというのか、プリンセス？」

「そうは申しません。先日の協定にはわたくしも参加いたします。ただ今、降格する権利を譲っていたきたいのです」

「彼らと単身で対峙^{たいじ}して、生き残る自信があるのかな？」

「ございます」

はつきりと言う。これまた、惚れ惚れ^{ほほ}するような言いざまだった。

日輪^{ひのわ}はきびすを返し、とことここちらに近付いてきた。

夜々^{やや}が雷真^{らいしん}にしがみつき、警戒心をむき出しにする。日輪は「むっ」という顔をしたが、とりあえず夜々を無視して、まっすぐ雷真を見上げた。

「今宵^{こよひ}、日輪は雷真さまに勝負を挑みます！」

「お……おう」

「ひ、ひ、日輪が勝ったら、学生総代とのご婚約は破談^{はだん}にしてくださいませ！」

しん、と客席が静まり返った。

誰も突っ込まない。なので、仕方なく、雷真が自分で言った。

「その話なら、とつくに破談になってるんだが？」

「え……………えっ!？」

日輪は大いにうろたえた。何となく、あわてた兎を思わせる。

「わ、わたくししたら、とんだ早とちりを……は、恥ずかしい……っ」

赤くなつた顔を両手で覆い、動かなくなってしまう。

実に可憐だ。雷真はくらつとよろめきそうになつて――

一瞬後、強烈な寒気で我に返る。夜々が暗黒星雲のような眼を向けていた。

「何を見惚れてるんですか、雷真……?」

「見惚れてねえ! 腕をつかむな! 折れる!」

このままでは話が進まないと思つたのか、オルガが再び口を開く。

「では、やはり私が降格でいいのかな？」

「だ、だめです! で、では、では、日輪が勝つたら――」

日輪はいっぱいいっぱいになって、声の限りに叫んだ。

「日輪を雷真さまの妻にしてくださいませ!」

静まり返るコロセウム。

ややあつて、めきつ、と夜々の足もとで床が砕けた。

魔術の照明が煌々と照らす夜会会場。客席の最上段、屋根の設けられた〈特別席〉で、執行部議長セドリツク・グランビルがくつろいでいた。

「まったく、きょうびの学生は覇気がないな」

上品な口元を皮肉げにゆがめ、毒づくように言う。

品のいい顔立ちはいかにも〈良家のお坊ちゃま〉ふうだが、座り方は場末のごろつきのように粗野だ。テーブルに足を投げ出し、ふんぞり返っている。



「俺が学生なら、同盟なんざ持ち掛けな。ひと言こう言うね。『俺の駒になれ』」

「滅多なことをおつしやらないでくださいよ、殿下」

困ったような声音で、かたわらの美青年が釘を刺す。

ゼカロス兄弟の〈弟〉だ。オルガの片腕として動いている。

ゼカロス弟の言葉を聞いて、セドリックは苦笑いした。

「それはこっちの台詞だぜ。そして、尊称には『陛下』を使うのが正解だ」

「これは失礼、口がすべりました。未来の国王陛下」

ちろ、と舌を出す。わざとらしい。だが、セドリックは叱るでもなく、

「覇氣がない——とは言え、オルガは優秀だな。人望もあるし、何よりイイ女だ」

「僕らも同じ意見ですよ。ねえ、兄さん？」

ゼカロス弟が反対側を振り向く。となりの席に彼の兄が座っていた。

「……知らん。だが、オルガは強い。陛下が思う以上に、だ」

「そいつは楽しみだ。で、弟くんよ。オルガのもとには何人集まりそうだ？」

「そうですね……。オルガさんは『円卓戦争』の発案者ではあるのですが、人数集めにはそれほど積極的じゃないんですよ。今のところは、僕らと、例の小さなお嬢さん、そして陛下——セドリック議長閣下だけですね」

「なるほど。知恵の回る女だ」

「……どういことですか？」

「発案者が積極的に人数集めをすれば、観客連中のウケが悪くなるだろ。狡知は魔術師の必須

適性だが、学生には純真さも求められる。そもそも、（手袋持ち）は魔王の座を争う敵同士——人数が増えれば増えるほど統率が取れない」

「寝首をかかれる怖れがある……？」

「少なくとも、警戒が必要になるな。今の人数なら十分目が届くし、いざとなればひとりで押さえ込める……その自信があるんだろう」

「だとしたら、これ以上の増員はないかも知れませんね」

舞台上に視線をやる。ちようど、オルガが降格宣言をしたところだった。

「できれば今夜、（下から二番目）だけでも片付けてくれればいいんですが。アスラさんやマグナスさんとぶつかるとき、彼は邪魔ですからね」

「そうはいかない。俺のライシンは最後まで残るさ。おまえたちも危ないぜ」

「……そう言えば、まだ僕らの力量をお見せしてませんでしたね。今後の任務遂行に響いては困りますし、先に僕らの腕前を披露しましょうか？」

「いや、いい。俺はおまえたちの力を疑ってない」

軽く言う。ゼカルロス兄弟は困惑したように顔を見合わせた。

「ババアどもが得意満面で推薦してきた人材だ。おまえたちの力は余裕で俺を上回ってるだろうぜ。——何だ？ 意外そんな顔をしてるな？」

「いえ……陛下はその、少し傲慢な方だとうかがっていたもので」

「傲慢も傲慢さ。だが、俺が目指すのは帝王の座だ。魔術の才で負けたところで、悔しいとも思わんね」

ゼカルロス兄弟——とりわけ兄の方が、警戒するように身を強張らせる。自らを「陛下」と呼ばせるこの男、一見したところは、自己愛の強い暗愚な男に見える。だが、ひよつとしたら、思いのほか「大きな」人物かもしれない。

「で、ババアどもはいつ——イザナギのプリンセスを始末しろって？」

始末。その殺伐とした響きに、ゼカルロス兄弟から表情が消えた。

「薔薇の方々は『近々に』とだけ。方法も陛下にお任せしますと」

「簡単に言ってくれるね。そう簡単な話じゃないだろう？」

「学院の外で暗殺するのがベストでは？ 護衛はわずかに二人と聞いています」

「イザナギ流は一騎当千、二人もいれば二個大隊だ。ましてプリンセスご本人がケタ外れの魔術師と聞く。正面からやればこっちが危うい」

「それならなおのこと学院では手が出せませんよ。警備や学院長の目があります」

「実にまっとうなご意見だ」

にやり、と笑う。セドリックの視線は客席の一角に向けられていた。

視線の先には二人の男子学生がいる。どちらも日本人だ。二人は舞台上の乙女——日輪の身を案じるように、じつと舞台を眺めている。

「陛下？ あの二人がどうかしましたか？」

「知ってるか？ 人間を破滅させるのは憎悪じゃないんだ」

「……は？ いえ……では、何が？」

「愛だよ」

セドリック——否、いな（叛逆の王子）エドマンドは。

「ババアどもに伝える。プリンセスは後日、夜会やかいの舞台でお亡くなりになる」
そう宣言し、笑いながら席を立った。

5

わたくしが勝ったら、日輪ひしんを雷真さまの妻にしてくださいませ——

日輪の衝撃的な挑戦に、当の雷真が何と答えるのか。

フレイやオルガはもちろん、観客席までが注目する中、返答の聲が響いた。

「お断りいたします！」

「こら夜々やや！ 何でおまえが断るんだ！」

「正当な権利です！ 妻としての！」

「つ、妻……!?」

くらり、と日輪がよろめく。夜々は追い打ちのように叫んだ。

「そうです！ 雷真の妻は夜々なんですーっ！」

「やめろ夜々！ 話をややこしくするな！」

あわてる雷真を見て、観客席から失笑が漏れた。

「雷真さま！ そ、そ、その子が妻というのは本当のですか!?」

「いや嘘だうそ。こいつは相棒であって妻じゃない」

「そう、相棒です！ 肉棒を介して愛し合う仲なんです！ ベッドの上でからまる連理の枝なんですーっ！」

とんでもない爆弾発言だ。どっと観客席が沸いた。

「いや、でまかせだからな!? 信じるなよ日輪！」

「はい♡」

こてつ、と夜々がコケる。一方、日輪はほうつと息をついて、胸をなで下ろした。

「安心しました。雷真さまが、その子と何でもないとかわかって」

「ちょ……どうしてそんな簡単に信じられるんですか~~~~~!?」

「わたくしは雷真さまの妻になる女、良人おつとを信じるのは妻として当然のこと。雷真さまがはっきり違うとおっしゃるのなら、日輪ひのわは信じます」

じりつ、と夜々ややは後ずさりした。

どうやら、日輪が強敵だと悟ったらしい。

そう、日輪のこのまっすぐな——ある意味『天然』なところが難物なのだ。

「し、信じるのは貴女あなたの勝手ですけど、夜々は雷真と一緒にのお布団ふとんで寝てますし？」

「嘘うそです」

「ま、毎晩お背中を流してますし!？」

「嘘うそです」

「う、嘘じゃないですー!」

「ああ——なるほど、わかりました」

「や、やっとわかってくれたんですね！」

「貴女が雷真さまに横恋慕していらっしゃることは！」

「よ……横恋慕……!?」

日輪は頬を紅潮させ、ためらうような視線を雷真に寄越した。

数秒の逡巡。それから、「ひしっ」と雷真の腕にしがみついた。

雷真は仰天した。日輪が人前でこんな行動に出るとは。夜々への対抗意識がそうさせたのか、

日輪はぎゅーっと雷真の腕を抱きしめ、必死な調子で叫んだ。

「日輪は子どもの頃から雷真さま一筋なんです！ 後から出てきて、雷真さまを盗らないでく

ださいませ！ この泥棒猫！」

がーん、と音が聞こえそうなくらいの衝撃を受けて、夜々は硬直した。

普段は夜々が言っているような台詞を、そっくり他人に言われてしまった。

(……何か、ややこしいことになってきたな)

一体、どうしたものか。

救いを求めてあたりを見回す。フレイはハラハラした様子でこちらを眺めていた。彼女は雷真より年上だが、正直アテにならない。オルガは困惑したようになりゆきを見守っているだけで、何か言ってくれそうな気配はない。

ほかに誰か頼りになるのは——と、観客席の方に目をやって、ぎょっとした。

観客席の一角に暗雲のようなものが垂れ込めている。そのどす黒い雲の下で、シャルとグリゼルダがこちらをガン見していた。

「……ははは」

雷真は笑った。ほかに、どうしていいかわからなかったから。

「ふふ……うふふ……なあんだ……簡単なことでした……♡」

突然、夜々が言った。

ぜんまい仕掛けの人形みたいにカクカクした動きで顔を上げる。

「勝てば、雷真のお嫁さんになれるんですよね？ その勝負、受けて立ちます！」

「駄目だ！ 勝手に受けるな！」

「雷真は引っ込んでください！ いざ尋常に勝負——する前に、日輪さんの自動人形が見当

たりませんね。まさか、自動人形なしで夜々に勝てるんですか？」

「ご心配なく。わたくしの戦力なら——いくらでも」

日輪の手が閃き、着物の袖口から紙の束を取り出した。

それは短冊型の紙片、魔術式を書き込んだ〈呪符〉の束だ。

日輪が腕を振る。呪符はナイフのように正確に飛び、舞台に突き立った。

日輪の動きは止まらない。その場でくるとターンして、ブーツのつま先で円を描く。いざ

なぎ流の歩法——確か〈反閨〉とかいう技だ。

たちまち魔法円が生じ、カッと光芒が飛び散った。円の中心で日輪は次々と印を組む。ひと

つ組むごとに魔力が高まり、呪符から黒い妖気が立ちのほり始めた。

「千妖万邪ことごとく走るべし——急々如律令。きたりま征！」

日輪の言葉と同時に、呪符が黒い炎を噴き上げる。次の瞬間、黒い炎に包まれた猿……のよう

なものが十数体、日輪を護るよう出現していた。

客席にどよめきが起こる。機巧魔術全盛のこの時代に、旧式の召喚術だ！
猿の妖気は凄まじい。度肝を抜かれ、さすがの夜々も腰が退けた。

「こ……これは……!?」

「魂籠め呪法——いざなぎ流の奥義だ。本来は木偶とか、魔具の器に〈神〉を降ろす技なんだが、日輪くらいになると、あんな紙切れ一枚で呼び出せる」

「じゃあ、これが話に聞く——〈式神〉!?」

初めて見たのだろう。夜々の瞳の奥には、本能的な恐怖があった。

フレイのガルド犬が低くうなる。どうやら、式神の危険性を察知したらしい。

魂籠めされた式神は、全身を『魔力で』構築された擬似生命、精霊と同じ魔法生物だ。全身が魔力のカタマリなのだから、魔力親和性は桁違いに高い。その上、禁忌人形なみの自律性を持つ。これだけの数を従えても、日輪にはまだまだ余裕があった。

日輪は呪符を指に挟み、ぴしと隙のない構えを決めた。

「さあ、お覚悟召されませ！ 土門日輪、参りま——」

「待った！ 戦う前に言うておくが、さっきの賭けはなしだ」

日輪はきょとんととして、二、三度まばたきをした。

そして、涙目になって怒り出した。

「今さら怖じ気づかれたのですか、雷真さまっ？」

「わかってくれ。おまえのためでもある」

「……わたくしが負けるとおっしゃるのですか？」

「そうは言わない。だが、このまま戦うと、俺が失格になりそうだ」

「……え？ どういう意味です？」

「夜々は絶対、おまえを直接狙うから」

「女狐女狐女狐呪殺女狐女狐女狐絞殺女狐女狐女狐女狐轢殺女狐……」

ぶつぶつと呪いの言葉を繰り返す夜々。瞳には明確な殺意が宿っている。その異様さにより、よく気付き、日輪はびくつと首を縮めた。

術者に対する攻撃はご法度だ。やりすぎれば失格になる。

「だから、賭けはなしだ。それでもいいなら、ちゃんと相手になる」

「そんな……」

「夜々もいいな？ 日輪に怪我させたら、寮から追い出すからな？」

「そんな！ 女狐を生かしておけたなんて、ひどいです雷真！」

「殺そうとする方が非道だ！」

叱られて、夜々はじんわり涙ぐんだ。日輪は日輪で心が折れてしまったらしい。ひくつとし

やくり上げたかと思うと――

二人は同時に泣き出して、それぞれ逆方向に走り去った。

あとには、呆気にとられたような観衆とオルガ、そしてフレイが残る。

そのオルガも、出鼻をくじかれて興が殺がれたらしい。降格の権利は日輪に譲ったのか、あるいは単に面倒になったのか、早々に舞台を降りて行く。

「やれやれ……とりあえず、今日のところは事なきを得たか」

雷真は安堵の息をついた。だが、もちろん、そんな場合ではなかった。

すたつ、と背後に誰かが着地する。殺気を感じて振り向くと――

「えーと……お師匠さま？　ここは夜会の舞台だぞ？」

「なぜ少女が二人も泣いていたのか、理由を聞かせてもらいたくてな」

その背後から、うんしょ、と手すりを乗り越えて、シヤルも舞台上がってくる。

「私も訊きたいわ。どうして私のヒノワが泣いていたのか」

「いや……二人とも……とりあえず落ち着けよ？　常識を持とうな？　落ち着けて……話せ

ばわか――やめろおとおおお！」

この夜、夜会の試合は行われなかった。

だが、大半の観客は満足して帰宅したという。

何せ、ラスターカノンとフラガラッハの威力を、たっぷり見物できたのだから。

6

リヴァプール市街、学院からほど近い一角に、庭つきの屋敷が建っている。

夜更け、客など訪れるはずもない時間帯に、この屋敷の呼び鈴が鳴った。

銀髪の乙女型自動人形――いろいろが、ランタンを手にして、玄関口に現れる。

「どちらさまで……夜々!?」

来訪者の顔を見て、いろりはランタンを取り落としそうになった。

「愚か者！ おまえは雷真殿らいしんの登録人形、学院を抜け出すなどもつてのほかだ！」

「大丈夫です……途中まで、小紫こむらさきと一緒にしたから……」

「何と！ 小紫め、また寢床を抜け出して……！」

きつく叱しからなければならぬ。いろりは急いで小紫を探しに行こうとして、夜々の様子がおかしいことに気付いた。

「……どうした、夜々。元気がないな？」

小紫も可愛かわいいが、夜々も可愛い妹だ。いろりはたちまち不安になった。

「ともかく上がれ。ここは冷える——主あるじ、夜々が戻りました。主！」

落ち込んだ表情の妹を連れ、二階の広間へ向かう。

硝子しよしは窓際に腰掛けて、紫煙をくゆらせていた。

「悪い子ね、夜々。一体、何事？」

「硝子……うわーん！」



夜々は硝子の腰にしがみつき、わんわんと泣きじゃくった。

「あら、甘えん坊……まるで実家に出戻ったみたいね。家出の原因は何かしら？」

硝子は優しく、夜々の小さな頭を撫でてやった。

「まあ、お茶くらい飲んで行きなさい。でも、泊まるのはだめよ？」

硝子がいろりに目配せする。いろりは主の意図を理解し、急いで別室に移った。ただちに緑茶を煮出し、急須を持って広間に戻る。

ちよつと泣いてすっきりしたのか、夜々はもう落ち着きを取り戻していた。

ソファにちょこんと座って、いろりのお茶を待っている。

夜々が泣き出したときは何事かと思ったが、それほど差し迫った問題ではないらしい。いろりはほつとして、温めた湯飲みに茶を注ぎ始めた。

急に緊張がゆるんだせいか、少々、ぼんやりしてしまう。急須から出たお茶が、湯飲みの許容量を越えて、だばだばとあふれた。

「いろり」

硝子が見かねて声をかける。

「……………」だばだば。

「いろり！」

「は、はい！ 何でしょう主！」

「いい加減、テーブルにお茶を飲ませるのはやめて頂戴」

「あっ！ も、申し訳ありません！ とんだ粗相を……………！」

あわてて布巾ふきんを取ってきて、テーブルを拭くふ。

夜々がぐすつと鼻を鳴らし、疑うような目を姉に向けた。

「どうしたんですか姉さま。……まあ、理由は大体想像つきますけど」

「いや、秋のせい……かな。あれほどきらびやかだった世界が、急に味気ない——まるで水墨すいぼく画がのように色あせた世界に見えて」

「雷真らいしんとオルガさんの婚約なら、とつくに解消されましたよ」

「何と！ それはまこと——」

いろりははつとして、わざとらしく咳払いせきばらいをした。

「なな何を申すのだ夜々。こここのうつけが。こここの私がそのようなことでいちいち気を散らしているわけがあるまい？」

ふわつと艶あでやかな微笑を浮かべ、窓の外、ライトアップされた紅葉を見やる。

「気がつけばもう秋も深い……。見ろ、まるで燃えるような紅葉だ。ああ、世界はこんなにも鮮やかに色づいて——」

ぶつ、と硝子が噴き出したので、いろりは紅葉のように赤くなった。

「笑わないでください主！ 私は別に、何の他意もなく——！」

硝子はますます面白がり、しきりに肩を揺すっている。

これ以上はヤブヘビだ。いろりは再び咳払いせきばらいをして、話の矛先を夜々ややに戻した。

「それで、夜々。お前の方は何を落ち込んでいるのだ？」

夜々はしょぼりとして、膝ひざの上でこぶしを握った。

「実は今日、雷真らいしんの許婚いいますけさんが現れて……」

「婚約は解消されたと申したではないか」

「違うんです！ 今度のお相手は、日本人のお姫さまなんです！」

「日本人——」

「ずっと前からの約束らしくて……雷真も憎からず想おもつてゐたいで。しかも、そのひと……夜々に……『泥棒猫どろぼうねこ』って言ったんです~~~~~！」

顔を覆つて泣き出す夜々。いろりは困惑して、主の方をうかがった。

硝子しろうはうなずき、さらりと答えた。

「それはたぶん、いざなぎのお姫さまね」

「日輪ひのわさま——？ ですが、日輪さまは日本に戻られたはずでは？ いざなぎ当主の方針で、

留学は修了を待たずに中断されたと聞いています」

日輪は二人の従者ともども、夜会やかいの出場資格を棒に振り、帰国したはずだ。

「私もそう聞いているけれど。何か行き違いがあつたのかも知れないわね」

「何はともあれ、主。日本の方ならば、何かあつても国際問題にはなりませんね？」

「……何をしでかすつもりなの？」

「し、しでかすなんて心外です。ですが、たとえば、降ってきた電ひびきが直撃したり、突然の吹雪ふぶきで遭難されたとしても、それは天災ではありませんか？」

「いざなぎ流の次期やから（お館）さまに、おまえひとりで勝てるつもり？」

「……いざなぎさまは、かつて赤羽あかばね一門と覇を競つた名門。西日本を中心に絶対的な権勢を誇

る、傀儡師の最大派閥だとか」

「そうよ。乱破まがいの道を歩んだ赤羽一門とは違う。平安の貴族社会に根を下ろし、今なお華族として日の本に君臨している。歴史の勝者は間違いないぞなぎなぎ一門の方だわ。そのいざなぎさまを、おまえ一人でどうしようと言うの？」

「そ、それは……せめて氷漬こおりずけにっ」

「愚かなことを。華族に盾突けば、日本に帰れなくなるわよ？」

「く……っ」

硝子は軍上層部にも顔が利く——が、立場上は一介の人形師に過ぎない。

一方、あちらは政府要人を思うがままに動かせる。格の違いは明らかだった。

「婚約者……ね。女あしらいの下手な坊やのこと、さぞや苦慮くろしていることでしょう」

硝子は愉快そうに笑った。一方、夜々はしくしくと泣き出した。

「笑いごとじゃないです……」

「そうです主！ 万が一、雷真殿らいしんが本当にご結婚されたら——」

「……何で姉さまが心配するんですか？」

「ち、ちちちがつ……私は何も！」

ふいっとそっぽを向くいろり。夜々は納得せず、疑惑の眼差しまなざしを姉に向けている。そんな姉

妹の様子を眺め、硝子はふんわり目を細めた。

「でも……確かにちよつと、気になるわね」

「はっ!? まさか、硝子も……!?」

「……何の話をしているの」

硝子は眉をひそめ、煙管の吸い口をくわえた。

「いざなぎさまには今年、ひどい凶兆が見えたと聞くわ。坊やが祟りを受けなければいいけれど……って言っても、どうせ無理なんでしょうけどね」

あきらめ顔で煙を吐く。

硝子が吐き出した煙は、不吉の前触れのように、ゆらゆらと頼りなく漂った。

Chapter 2 溺れぬように

1

「せええい！」

裂帛れつぱくの気合とともに、雷真は師の間合いに踏み込んだ。

「わきが甘いですよ」

師の声は背後に聞こえた。風を切って木刀がくる！

身を反らし、回避しようとする。だが、未熟な体は思い通りに動いてくれない。何とか木刀をかわした瞬間、みぞ落ちに鈍い痛みが走った。

……蹴けられたのだ。息が詰まり、雷真のかかどが床から離れる。そうして重心が浮いた一瞬に、天地がくると逆転した。

板の間に投げ落とされる。一応は受け身を試みたものの、衝撃で涙がにじんだ。

そんなふうに分が痛めつけられる光景を、雷真はほんやり見下ろしていた。

（これは昔の俺おれ……か？ 四年……いや、五年は前だな）

自分と『師範』の稽古けいこを、もう一人の自分が眺めている。

どうやら、夢を見ているらしい。

「受け身を失敗した上に、刀を手放してしまつて、どうしようって言うんです？」

くすつと品よく笑つて、師範は雷真らいしんをのぞき込んだ。

いつも笑っているような、〈引き目〉が特徴の男だ。武芸者と言うより、和歌を吟じている方が似合いそうな女顔だが、こう見えて凄腕すこうでの武芸者だ。

打ち倒された雷真は、ぜえぜえと荒い息をついている。返事ができない。

師範は屋外を見やり、太陽が傾いているのを確認すると、

「では、今日はここまでとしましょう。道場の雑巾ぞうきんがけをしておくように」

へろへろの雷真を見限つて、稽古場けいこばを出て行つた。

へばっている雷真の頭上を、すーっと水桶みずおけが横切つた。

雷真は痛みも忘れ、空飛ぶ水桶を目で追う。水桶は縁側に向こうまで飛び、

「こつぴどくやられたな、雷真」

「天兄てんにい！」

優しく微笑ほほえむ兄——赤羽天全あかばねてんぜんの手に収まつた。

兄は自作の人形を三体も引き連れ、涼しげな着流し姿で立っていた。

「元氣そうで何よりだ。掃除は俺も手伝おう。その後で、飯でも付き合え」

話しながら魔力を練る。息をするように自然な動作だ。兄の魔力が伝わり、三体の人形は生きてるように動き始めた。

水桶に水を張り、たおやかに雑巾をしほり、掃除を始める。

オートマトン
自動人形のように見えるが、これはただの木偶だ。自律していないし、思考能力もない。それなのに、そこらの自動人形よりも人間らしく見える。

やはり、兄は格が違う。違いすぎる。

だが、悔しいと思うより先に、誇らしく思う自分がいた。赤羽の家を離れ、父や親戚の目がないところでは、雷真は素直に兄を尊敬できる。

四人がかりなら作業は速い。掃除はあつと言う間に終わった。

掃除が終わると、雷真は庭の井戸水で汗を流し、新しい着物に着替え、師範に外出する旨を伝えてから、兄と夕方の街に繰り出した。

繁華街の賑わいを楽しみながら、二人で川べりを散歩する。

会話は他愛もないものだった。夏は暑いから嫌だとか、人形の歯車が錆びつくだとか、そんな話だ。そんなことを、兄弟は笑いながら語り合った。

やがて、兄は料亭ふうの蕎麦屋に雷真を案内した。

「何にする？」

「俺はざる！ 大盛りで！」

「天ざるをふたつ。ひとつは大盛りで」

兄が仲居に注文を告げる。雷真はまばたきした。

「え？ いや、天見、俺は——」

「育ち盛りだろう。夏バテに気をつけねばな。——安心しろ、俺のおごりだ」

「……ありがとう！」

十割の蕎麦は滋味豊かで、食事のあいだ中、雷真は「美味い！」を連発した。食後の満たされた空気の中、蕎麦湯を飲みながら、兄にたずねる。

「撫子、どうしてる？」

「……さみしがつている。俺ではどうにもならない」

兄はじつと雷真を見て、見透かしたように微笑んだ。

「おまえたち、ケンカをしたんだろう？」

「……天兄は何でもお見通しだな。ちよつと……ね。家を出るときに」

「早めに仲直りしろよ」

「わかつてるさ」

「いいや、おまえは何もわかつてない」

思いのほか厳しい言葉。驚く雷真の前で、兄は口調をやわらげ、「いいか、雷真。こじらせた風邪はタチが悪い。時の流れは、大切なものを簡単に奪っていく。失くしてしまえば、二度と取り戻せない。後悔しても後の祭りだ」

そのときの雷真には、兄の言葉はまったく理解できなかった。

……いや、理解できたつもりになっていた。そんなの当たり前だ、そんなことは知っている——そんなふうに軽く考えていたのだ。

だが、今の雷真にはわかつている。失うということ。その痛み。その重さが。

兄はこのとき、何を伝えようとしていたのだろうか？

どうして、道を誤ったのだろうか？

「撫子と仲直りしろ。なるべく早くだ」

「……ああ、わかった。近いうち、一度家に戻るよ」

「いやに素直だな？ 天ぶら蕎麦の功德か？」

くしゃくしゃと雷真の頭を撫でてくれる。

そうだ——兄貴が、やっていたんだ、これは。

このくすぐったい感じが嬉しくて——だから俺も撫子にやっていた。

夜が更ける前に、二人は店を出た。

別れ際、雷真は兄の背中に呼びかけた。

「天兄。撫子のこと、頼むよ。あいつを守ってやってくれ」

「——わかった。約束だ」

兄弟は互いの肩を叩き、固く約束を交わした。

2

狂おしい感情に胸を蹂躪され、雷真は飛び起きた。

（くそつたれ……。最低の夢を見ちまった……）

憎悪と動揺に翻弄されながら、魔術師としての自分が冷静な思考を働かせる。

あのとき——兄は紅翼陣も使わずに、どうやって木偶を操っていたのだろうか？

三つの体に掃除のような精密な動作をさせる。それも完全な並列処理で。ただの念動では、

超一流の魔術師でも「手が足りない」と思うのだが……？

「おはようございます雷真」

夜々が水差しを片手に、ちょこちょこと寄ってくる。

昨夜は不機嫌だったが、今朝の夜々はいつも通りだ。雷真は少しほっとして、

「ああ、おはよう。今朝も早いな」

「元氣ないですね？ 嫌な夢でも見たんですか？」

「おまえにいたぶられる夢をな。おかげで腹が減った。朝飯を食いに行こ——」

そこまで言いかけたとき、ごく自然に、こんな言葉が口をついて出た。

「あー、蕎麦が食いてえな……」

口に出してみると、それはまさに本音だった。

せきを切ったように、切ない気持ちが入み上げてくる。蕎麦が食いたい。無性に。これがホームシックというやつか。俺にはもう、帰る家などないのに……。

「いいですね、おそば。おすもいしいです」

夜々も和食が恋しいのか、悲しげな声で同意した。

「そう言えば雷真、おそばが好きでしたね」

「ああ。特に天ぶら蕎麦が——あ、いや、天ぶらはいいや……」

脳裏に浮かんだ兄の笑顔を即座にかき消す。

「とにかく和食が恋しいぜ。特に蕎麦！ 蕎麦が食いてえ！ ざるもかけも！」

「ならば、わたくしにお任せください、雷真さま！」

ばーんっ、とクロゼットの扉が開き、中から誰かがそう言った。

雷真も、夜々も、言葉に詰まる。

クロゼットの中に、日輪がちょこんと正座していた。

「……何やってんだ、日輪」

「委細、心得ております。盗み聞きをしておりましたから」

「華族の姫君がそんな真似をするな！」

「ですが、相手を知るにはこうするのが一番だと、シャルロットさまが——」

「あいとも元は伯爵令嬢のくせに……っつか、『お任せください』って何だ？」

日輪はきりつと眉を引き締め、こぶしを握って宣言した。

「この日輪、雷真さまの妻として、お蕎麦くらい取り寄せてご覧に入れます！」

「いや、大変だろ。ここは英国だぞ？」

「ご心配なく。いざとなれば英国を侵略してでも流通ルートを確保しますゆえ」

「やめろ！ それに、おまえだって夜会があるだろ。忙しいのに無理するな」

「雷真さま、お優しい——♡」

きゅーんっ、と日輪の胸が鳴り、瞳の奥にハート形のハイライトが入る。

「この女狐……！ 夜々の前で雷真にときめくなんて~~~~~っ」

夜々の髪が逆立ち、どす黒いオーラがあふれ出す。対照的に、日輪はほんのり薄桃色のオーラをまき散らしながら、いそいそと部屋を出て行くとした。

「では雷真さま、どうか楽しみにお待ちくださいませ！」

「だ、だめです！ 雷真には食べさせません！」

夜々があわててストップをかける。それから、雷真に向かって訴えた。

「この女狐は夜会で戦う敵です！ フレイさんみたいに毒を入れてくるに違いありません。だから、雷真は夜々の用意したものを食べてください！」

「はあ？ おまえが用意するって……どうやって？」

「お蕎麦くらい夜々が取り寄せます！ 国王陛下を人質にしてでも！」

「やめろ！ 何で武力に訴えたがるんだおまえら！」

「それは面白いですね。では、勝負いたしましょう！」

日輪が夜々に指を突きつける。たちまち二人のあいだに火花が散った。

雷真はげんなりした。何かまた、妙な方向に行き始めたぞ……？

日輪はじつと雷真を見上げ、熱っぽい口調で言った。

「昨日、雷真さまがおっしゃったことをわたくしなりに考えたんです。要は、命の危険がなければ、勝負してもいいということ！」

「……その前に、話し合いでケリをつけないか？」

「双方の利害が対立している以上、争いはさけられません。かくなるときには、強き者、勝者の言い分こそがまかり通る——それがいざなぎ流です」

「山賊みてえな連中だな！」

日輪はきつ、と夜々をにらみつけた。

「どちらのお蕎麦が雷真さまを満足させられるか、勝負です！ 受けますか？」

「もっ、もちろん受けますーっ！」

ケンカ中の猫を引き離すような気分で、雷真は二人のあいだに割って入った。

「待て待て。盛り上がってるとこ悪いが、蕎麦粉をどうするんだよ？」

「そういうことでしたら、硝子しろうこが持ち込んだものを融通いたしましょう」

「そりゃ助かる——つて、いろり!？」

いつの間に現れたのか。開け放たれたドアの前に、いろりが澄まし顔で立っていた。

夜々ヤヤは何かを察した様子で、がくがくと震え始めた。

「まさか、姉さま……偵察に……!？」

「ちち違うぞ夜々。そそそれは下衆げすの勘ぐりというものだ。わわ私はただ、雷真殿の周辺に怪

しい者がいないか、あくまで警護の一環として」

「警護？ 偵察？ 何だそりや……つつか、どこから忍びこんだよ？」

「雷真殿、そのような些事さじは置いておきまして」

「些事か!? 保安上の問題だぞ! たった今警護がどうか言ったよな!？」

「その蕎麦勝負、このいろりも是非せひに参加いたしたく!」

「姉さまーっ! またしゃしゃり出てきて~~~~~っ!」

「そういうことなら私だつて!」「う! 私も!」

またも、別の声がかかる。しかも、今度は二人分だ。

いろりの背後、ドアの陰に隠れて、シャルとフレイが立っていた。

雷真はその場で回れ右をして、ベッドに突っ伏した。

「どうなってんだこの寮は!? 重空間にでもつながつているのか!?」

本気で怖い。自分が知らないところで、何かおかしいことが起こっている!

シャルは憤然として腕組みをした。

「飢えた野獣が私のヒノワに手をつけないか、友達として付き添っただけよ。アドバイスした手前もあるしね。そうしたらフレイが——」

「う……二人を見つけて……ついてきた」

たゆんつ、と胸を揺らしてうなずく。

「飢えたライシンが、悪さしないように……見張ってた」

「あんたまで俺おれを飢えてる前提で語るのやめろ!」

「う。とにかく、私も参加したい! お料理勝負!」

珍しく自己主張している。雷真はがりがりと頭をかき、

「……つつても、シャルもフレイも、蕎麦なんて知らないだろ?」

「し、知らないけどどうにかするわよ。要はジャパニーズバスタでしょ? 腐ったダイズを突っ込めばそれっぽくなるんじゃない?」

「う。私には秘策がある。舌を騙だまして、『ソバ』だと思い込ませればいい。もしくは、脳を騙だまして、何もわからなくらい——」

「やっぱ駄目だ! 殺す気か!」

叫んだ瞬間、どんつ、と壁が叩たたかれた。

隣室の学生が『うるさい』とアピールしたようだ。となりには毎度迷惑をかけている。――

そう言えば、となりにには誰が寄宿しているのだろうか？ かれこれ半年近くも寮にいて、一度も挨拶したことがない。

となりに申し訳なく思いながら、雷真は声を潜めて言った。

「人数が増えたら收拾がつかない。今回は夜々と日輪の勝負だ。いりもいいな？」

「で、ですが——！」

「まあ待て。おまえが交ざったら勝負にならない」

硝子の屋敷で家事の一切を取り仕切っているのがいりだ。当然、料理の腕前もかなりのもの。うどんや蕎麦を打つのも上手い。

「つーわけで夜々と日輪の一本勝負。題目は天ぶら蕎麦で、日取りは三日後だ。わかったら、着替えるから出てけ！」

適当に言い放ち、少女たちを追い出す。勝負を認めてしまうことにはなるが、この部屋で言い争いを続けられるよりはずっとマシだ。

不満そうな少女たちが出て行くと、雷真は口を押さえ、青ざめた。

「……何なんだ、この状況」

夜々と日輪が張り合うのはわかる。だが、シャルやフレイまでからんでくるとは。

自分たちには〈夜会〉がある。色恋沙汰にうつつを抜かしている暇はない——はずなのだが。日輪のストレートな結婚願望が、ほかの少女に悪影響を与えたか……。

夜会終了までこんな日々が続くのかと思うと、そら恐ろしくなる。

嘆息しながら立ち上がったとき、ベッドの上に黒い影を見つけた。

「……何だ？　ねずみ？」

式神だ。ねずみはべこりとお辞儀をすると、ぼんつ、と音を立てて消えてしまった。後には〈依り代〉らしき紙切れが残る。

何やら書きつけてある。雷真は手に取って、開いて見た。

『雷真さまへ。不躰ながら、大切なお話があります。本日の授業が終わりましたら、夜会の前に、どうか中央食堂までお越しくださいませ。日輪』

どうやらそれは、日輪からの呼び出しだった。

3

「昼飯を食ってこい」

演習場での訓練中、グリゼルダがそんな命令をした。

雷真の魔力が減退し、バテ始めたのを見抜いたようだ。

「ただし、食いすぎるなよ。――吐くぞ」

「わかってるよ。昔よくやった」

雷真は素直に従うことにして、夜々を連れて食堂に向かった。

庭園に差し掛かったあたりで、夜々が「あ……」と小さく声を上げた。

「ん？　どうかしたか？」

「なっ、何でもないです！　早く行きましょう早く！」

背伸びして視線をさえぎろうとする。実にあからさまだ。

夜々をどかすと、落ち葉舞う庭園の中央、日当たりのいい場所に、華やかな一団が見えた。美少女が四人、シートを広げてランチをとっている。

シャルと日輪^{ひのわ}、フレイとアンリもいる。シグムントがチキンの皮を引つ張り、ガルム犬は〈おすわり〉して待機中。ガルム犬が動くたび、日輪の肩が目に見えて強張^{こわば}るが——実は犬が苦手なのだ——それでも楽しげに笑っている。

女子四人とマスコットたちが仲良く食事をしているのは、見た目にも華やかで、秋の寒々しい光景が、そこだけ春めいて見えた。

「なんか、いいな。ああいうの」

「雷真……あの中に飛び込もうなんて……」「全員俺^{おれ}の女だ！」なんて……っ」

「いつ言った!? そんなことは考えてない!」

「やかましい! 痴話喧嘩^{ちわげんか}も大概^{たいがい}にせえ!」

いきなり怒声が飛んできて、雷真と夜々は同時に振り向いた。

男子二人が枯れた花壇に座り、ミートパイをかじっている。

昴^{もつと}と六連^{むつる}だった。二人の周囲には黒いねずみやら小鳥やらが群れている。式神^{しきがみ}をあたりに放

つてのぞき中——のわけはない。日輪の身辺を警護しているのだ。

それにしても数が多い。よほど嚴重に警備しているらしい。

「お疲れー、雷真はん」

六連が人なつっこい笑顔を向けてくる。にへら、と口元をゆるめ、

「ええなあ、また夜々ちゃんと一緒ですかあ。夜々ちゃん、可愛らしなあ」

「そ、そんな……♡」

可愛らしいと言われて喜ぶ夜々。珍しくはにかなり顔を伏せる。

「大変やね、雷真はんつたらもの凄おスケコマシで」

「そうなんです。本当に」

「ほな、僕と組まへん？ 僕なら夜々ちゃん一筋で、ちょー大事にするし♡」

「ちょー組みません♡」

がくつ、とコケる六連。夜々のガードは鉄壁だった。

雷真は少し迷ったが、昴のとなりに腰を下ろした。

「あさ、昴……おまえにちょっと、訊きたいことがあるんだ」

「呼び捨てにすな、なれなれしい。……まあ、聞いただけ聞いたるわ」

「日輪さ、一度は日本に帰ったんだろ。それが何で、学院に戻ってきたんだ？」

「こんの………ド阿呆があああああ！」

どげしつと問答無用で蹴飛ばされ、雷真は花壇から転がり落ちた。

「おまえが英国きたゆうから、とんぼ返りしたんやろ！ ほんつつつまムカつくわ！」

「昴、落ち着きー。言いたいことは順追うて言うたらええ」

チツ、と舌打ちする昴。しかし、少しは反省したらしい。

再び花壇に腰を下ろすと、昴はほそほそと話し始めた。

「赤羽一門のことは聞いとる。宗家の跡継ぎが大事件を起こして、行方をくらませた——ゆう

話は。それは、その……災難やったな。このたびは、とんだことで」

律儀に居住まいを正し、見舞いを述べる。四角い態度が彼らしい。

「赤羽一門があんななんなつて日本で一番つらかつたんはおまえや。そら間違いない。けどな、二番目につらかつたんはお嬢やで！」

昴はきりきりと目を吊り上げ、雷真をにらみつけた。

「おまえが突然おらんようになって、お嬢がただけ心配した思おてん！ 連絡のひとつも寄越さんと、二年も雲隠れしよつてからに！」

ひと言ひと言が雷真の胸に刺さる。

その気になれば、いつでも目輪に連絡することはできた。だが、しなかった。

心のどこかで、『丁度いい機会』だと思っていた……。

「……けどよ、赤羽一門はなくなつちまつたんだぞ？ つぶれた家のドラ息子、しかも俺みたいなおちこぼれ、あの婆さんが婿に欲しがるわけねーだろ」

「ようわかつとるやないか。けど、お嬢の気持ちはどうなる？」

答えられない。黙り込む雷真にあきれたのか、昴は吐き捨てるように言った。

「お嬢が最初に留学を決めたんはな、赤羽天全の居場所をつかんだからや」

「——!?」

「それらしい奴がおるゆう情報を得て、外務省が探らせとつたそうや。しばらくして裏も取れた。おまえが生きとるなら、必ず仇のもとに現れる——お嬢はそこまで思い詰めて、学院に留学したんやぞ」

夜々が青ざめ、両手で口を覆う。

雷真もまた、完全に血の気が引いていた。では、日輪は雷真のために……？

「それが去年のことですわ」

二人の気持ちをほぐすように、六連がやわらかく微笑んだ。

「ところが春先、雷真はんの居場所がわかりましてん。稀代の人形師、花柳斎先生のとこにいたはる……てね。そしたらお嬢、どうしても会いたい言わはってなあ、まだ二回生やのに、卒業あきらめて日本帰るーゆうて」

そのときのことを思い出したのか、くすつと含み笑いをする。

「急いで帰国してみたら、今度は雷真はんが英国行かはったてなあ。あはは、二人して、ただけすれ違おてますの」

「笑い事ちゃうわ！ そのせいでお嬢、お館さまとひどい大喧嘩を……！」

「——日輪が？ あの不動明王みたいな婆さんと？」

雷真は耳を疑った。日輪はずっと、祖母には絶対服従だったはずだ。

「知っとるやろ、おまえも。お館さまは言うたこと曲げる奴が一番好かんのや」

昂の腕に力がこもり、食べかけのミートパイがぐしゃりとつぶれる。

「お嬢は二度も言葉曲げた。魔王なる言うて出てきたのに、途中で帰国。大人しゅう嫁に行く

言うて帰国したのに、また英国行き……」

「最終的に、勘当同然で英国きはりましてん」

「何もかんもおまえのせいや！ 今朝かて、お嬢に変な——」

「昂！」

予想外に強い声で六連が止める。昂もあわてて口をつぐんだ。

……一体、何を言いかけたのだろう？

昂は冷ややかに雷真を見つめ、試すような口ぶりになって言った。

「こつちくる途中、お嬢がどんなんやったか、わかるか？」

「そりゃ、落ち込んで……たよな？」

「阿呆、逆や。もうすぐおまえに会えるー言うて、夜も寝られん。今日会えるかー、明日会えるかーで、なんべんもなんべんも訊いてきて……はた目にも浮かれとったわ。それがいざ学院

についてみたら……おまえ、学生総代と婚約したやと？」

「違う！ それには事情が——」

「おまえが何言うても説得力ないわ！ きれいどこぎよーさん侍^{はべ}らして、お嬢の気持ちも知らんと、とつかえひつかえイチャコラしよって……ほんまにおまえ……ほんま……うらやましいんじやポケエエエ！」

「嫌な本音出やがったー！」

昂はまたも雷真を蹴^め飛ばし、胸ぐらをつかんで引き起こした。

「おまえは一体、何べん日輪泣かせば氣イ済むんや！」

そう言った昂の目尻^{めじり}には、わずかに涙がにじんでいた。

「今度、あいつ泣かしよったら……俺^{おれ}が、おまえを絞めるえ！」
痛いくらいに、昂の感情がぶつかってくる。

「……悪かった」

それしか、言えない。そつと昴の腕を振りほどき、立ち上がる。

雷真は逃げるように顔を背け、庭園の外へと歩き出した。

「あ、雷真！ 待ってください！」

夜々が追いかけてくる。夜々は何か言おうとしたが、結局、何も言わなかった。

夜々もショックを受けている。だが、雷真には夜々を気遣ってやる余裕もない。

これまで雷真は多くの少女たちを救ってきた。だが、それは大暴れした結果にすぎない。これまでと同じやり方で、日輪の悩みを解消してやることはできない。

一体、俺は——日輪に何をしてやれると言うのだろうか？

4

グリゼルダとの鍛錬が終わり、夜会が始まるまでの空き時間に——

雷真は「手洗いに行く」と嘘を言って、夜々と別れた。こっそり窓から寮を抜け出し、ひとりで「約束の場所」へと向かう。

中央食堂には明かりがついている。ガラス張りの壁から光がこぼれ、黄金色のイチヨウを鮮やかに照らし出していた。

そのイチヨウの下に、ぽつんと日輪が立っている。指先が冷たいらしく、イチヨウを見上げながら、しきりに息を吐きかけていた。

「悪い。待たせたか」

「いいえ！ つい今しがた参りました！」

……嘘つけ。おまえ、そんなに冷えてるじゃねえか。

日輪はうつむき、意味もなく両手でマフラーをもんでいる。

雷真を意識しているらしい。そっちに意識されると、こっちまで意識してしまう。

——非常に気まずい。

昴に聞いた話が胸を圧迫している。日輪の「話」とやらも気になるが、まずは謝るべきだろう。だが……何を、どうやって謝ればいい？

立ち尽くす雷真の耳を、ふと、日輪のやわらかな声がくすぐった。

「……よかったです。雷真さまと、オルガさまが、何でもなくって」

控えめに微笑む姿がいじらしい。雷真はほかにどうすることもできず、頭を下げた。

「……悪かった」

日輪はくすぐすと嬉しそうに笑った。

「言い訳をなさらないのですね。『事情があったんだ』と」

「話せば長くなるし……おまえを不安がらせたことは、言い訳できない」

「実はシャルロットさまに聞いて、委細存じております」

雷真は閉口した。シャルのやつ、意外とおしゃべりだな……。

「お友達を助けるためだったのに、『悪かった』だなんて……雷真さまのそんなところを、日輪はお慕い申しております」

はつきりと好意を告げる。言ってしまったから恥ずかしくなったのか、日輪は背を向け、両手で顔を覆ってしまった。

「……違うんだ。「悪かった」ってのはそのことだけじゃない。おまえは俺おれなんかのために、地球の反対側にまできてくれた。それなのに、俺やつって奴てめえは自分のことしか考えないで、好き勝手して……だから」

雷真は日輪に向き直り、細い肩にぐっと両手をかけた。

「心配かけて悪かった。気苦労も迷惑もかけた。先に言っておくが、俺はおまえとの約束を忘れてない。無論、勝手に約束を破るようなこともしていない」

日輪は確かめるように、すぎるように雷真を見上げた。

「では、わたくしのことを忘れたわけでは……？」

「おまえのことを忘れた日は、一日だってない」

夜々ややの誘惑を拒み通せたのも、日輪のことが気にかかっていたからだ。……皮肉にも、夜々ややが毎晩迫ってくるおかげで、日輪ひのわの存在を忘れる暇もなかったわけだが。



日輪の白い肌が、かーっと火照った。
ふらりとよろめき、倒れそうになる。

「日輪は……もう、死んでしまいそうです……！」

「何だって？ どっか悪いのか？」

「いいえ……でも……はい」

日輪は本当に具合が悪いのかもしれない。のぼせたような顔、潤んだ瞳で、じっと雷真を見つめている。明らかに熱もある。脈も速いし、呼吸も苦しげだ。

どうしたとか、そんな日輪を見ているうちに、雷真もまた呼吸がつかなくなってきた。胸が苦しくなり、くすぐったいような、甘い感情が込み上げてくる。

——そう、甘い。

だから、振り切る。この感情に溺れていては、覚悟が鈍る。

自分はこれから人間を殺そうというのだ。血を分けた兄を殺し、この手を血に染めようというのだ。そんな俺が、こんな優しい感情に浸っていていいはずがない。それは日輪を不幸にする。日輪にまで、返り血を浴びせてしまう。

雷真は日輪から手を離し、甘い空気を引き裂くように言った。

「話ってのは何だ」

日輪は未練そうにしたが、気丈に感情を立て直し、口を開いた。

「本日お呼び立ていたしましたのは、睦み合うためではございません——あつ、もちろん日輪はいつでも受け入れ態勢が整っておりますけれど！」

「……何のためなんだ？」

「〈十三人〉^{ラウンズ}に動きがあります」

不意打ちのような言葉。雷真は息をのみ、視線で続きをうながす。

「昨日、オルガさまとわたくしのやり取りをご覧になりましたよね？」

「ああ、ずっと気になっていた。連中、何を考えてる？」

「〈円卓戦争〉です」

そして、日輪は〈十三人〉^{ラウンズ}の目論見^{もくろみ}を語り始めた。

5

理学部の最上階。自分の研究室で、キンバリーは新聞を読んでいた。

「はい先生。お茶をどうぞ」

メイドのアンリが淹^いれたての紅茶を持ってくる。

「ほう、いい香りだ。また腕^{うで}を上げたな、アンリエット」

「ありがとうございます。嬉しいですよ」

にこつと微笑^{はなえ}む。元伯爵家令嬢^{はくしやう}ながら、メイド仕事にも不満を言わない。気立てもいいし、

器量^{きりやう}もいい。よくできた娘だ、とキンバリーは思った。

「ふむ、確^{たしか}にかぐわしいな。いいところに来たようだ」

開けっ放しのドアから、〈迷宮の〉魔王グリゼルダが顔をのぞかせた。

フェミニンなドレスは少女のようだが、身にまとう凄^すみは歴戦の勇士のそれだ。彼女の背後には、白い装甲の機械天使が二体、忠実な部下のように控えている。

「すっかり君になついているようだな。君は昔から、女と人形にはモテる」

「その意見には賛同しないぞ。だが、二体を貸してくれたことには礼を言う」

「入りましたえ、ゼルダ。アンリ、彼女にもお茶を」

「はい。——どうぞ、ウェストン先生」

アンリの給仕を受けつつ、テーブルでお茶を飲む。

「先日の報告は聞いたよ。ならし運転——にしてはハードな運用だったが、望外の収獲もあった。あの学院長を相手に戦闘経験を積ませてくれるとはね」

「こいつらがいなければ、私は学院長に殺されていただろう」

グリゼルダは紅茶のカップを置き、やわらかな視線を二体に送った。

「世話になったな、おまえたち。あるべき主^{あるじ}のもとに戻れ」



二体は戸惑った様子で顔を見合わせた。

しばらくして、意を決したように、剣の人形が進み出た。

「我ら姉妹、相応しき使い手に使われとうございます」

「……何を言っている。キンバリー女史は一流の魔術師だ」

「超一流だ、ゼルダ。とは言え、彼女たちの言い分も理解できる。君は魔王だし、剣技にも長けている。一方、私は銃器や機械いじりの方が得意でね。〈剣〉と〈盾〉の人形たちがどちらに使われたいか——考えるまでもないだろう？」

「しかし、こいつらは魔術師協会の所有物だろう？ 貴女の立場も——」

「だから、私が協会にかけあって、君に貸与できるよう取り計らおう」

グリゼルダは眉をひそめ、はっきり警戒の色を見せた。

「……善意ではないな？」

「善意だとも。君ほどの魔術師に吊り合う名器を調達するのは大変だ。その点、この二体は伝説級の自動人形にもひけをとるまい？」

「だが、それでは……私は魔術師協会の言いなりに……」

「なあ、二人とも。ゼルダに仕えたいだろう？」

二体の機械天使はここぞとばかり、グリゼルダにまわりついた。

「是非に！」「わたくしたちをお側に置いてください！」

熱っぽく迫られて、グリゼルダははた目にもわかるほど弱り果てた。

「……女史よ。すべて貴女の策ではないだろうか？」

「まさか。君の人徳がなせるわざだよ」

「マスター！　どうかお側に！」

「ああもう、わかったよ！　おまえたちは当面、私に従え！」

「ありがたき幸せにございます！」

二体が仲良くハーモニ。ちょこんと優雅に腰を折る。それから、剣の人形がうやうやしく頭を垂れ、叙任を待つ騎士のような姿勢を取った。

「では、マスター。我ら姉妹に、相応しき呼び名をいただけませんか？」

「いや……私がつける筋合いか？　私はかりそめの主人にすぎんだぞ？」

「いいじゃないか、ゼルダ。つけてやったらどうだ？」

「……既成事実を積み重ねるつもりじゃないだろうな？」

グリゼルダはますます警戒を強める。一方で、なついてくる二体が可愛いと思う気持ちもあるのだろう。ちょっと頬をゆるめて、二体の名前を口にした。

「では剣よ、おまえはディガンマ。盾よ、おまえはステイグマだ」

「麗しき名にございます、マスター。ディガンマはマスターとともに」

「ステイグマもマスターとともに」

「ほう、ディガンマにステイグマか。存外ロマンチストだな、君は」

キンバリーが笑みをこぼす。アンリが不思議そうに寄ってきて、

「ロマンチスト？　どういいういわれなんですか？」

「どちらも失われたギリシア文字でね、順番で言えばイプシロンの次に相当する――」

「よせ！ そんな話はいいだろう！」

頬を染め、ふてくされたようにそつばを向くグリゼルダ。そんな彼女を、キンバリーは年の離れた妹を見るような気持ちで見つめた。

「ところで、君の弟子はどうだね？ 君の指導でマグナスに勝てそうか？」

「いや、不可能だ」

「……やけにはつきり言うんだな。〈下から二番目〉も相当に力をつけただろう？ 私の見た

ところでは、あいつの技量は歴代〈十三人〉の水準を超えている」

「だが、マグナスには及ぶまい」

断言する。その点に関しては、キンバリーにも異論はない。

「もともとバカ弟子には莫大な魔力があった。瞬間的な出力もまた、例の秘術で限界まで強化されている。だが、それはあちらも同じなのだろう？」

マグナスは雷真の兄——だとすれば、一族の秘術を同じように受け継いでいる。

「対決までの一か月で、魔力の総量を劇的に引き上げることができまい。出力に関しては秘術によって既に互角。あとは……」

「なるほど、それであの訓練か」

「ああ。だが、そのステータスはやはりマグナスが上だ。まして、戦闘経験も、魔術の腕前も、知識も、戦術の幅も、すべてあちらが上手ときている」

「〈下から二番目〉はこれまでも、自分を上回る敵を退けてきただろう？」

「……チェスにおいて、下手が上手に勝つことはまれにある」

グリゼルダは視線を落とし、カップを揺らしながらつぶやいた。

「序盤のうちに奇策で決定的な打撃を加え、そのリードをたもったまま、中盤終盤を逃げきれればいい。だが、今のあいづでは、スコードロンに決定的打撃を加えることができない。超一流の魔術師は防御もまた超一流だからだ」

一定レベルを超えた魔術師は、特別な魔術回路がなくても、下位の魔術攻撃を寄せつけない。学院長の魔術防壁が好例だ。あの技はキンバリーも得意としている。

「バカ弟子の自動人形オートマドンは強力だ。しかし、スコードロンを一撃で破壊するのは不可能——であれば、戦いはどうしても長引く。長引けば、上手は失点を取り返していく。わずかなリードなど、簡単に取り返されてしまう」

「道理だな。逆に、総合力では負けていても、相手を一撃必殺できる技があれば——」

「戦術次第で勝ち目はある……と思う」

そう、必殺のスキルさえあれば。

それは相手に対する牽制けんせい、威嚇いこくとしても機能する。相手の選択肢を狭め、緊張を強い、一瞬間の隙すきを突いて戦局を引っくり返すことも可能だ。

だが、夜々ややの（金剛力こんこうりき）は単純な魔術だ。度重なる戦いで、雷真らいしんの手の内もバレている。夜々の一撃を止める手段はいくつも用意されているはず……。

もっと圧倒的な、雷真にしかできない、何かが欲しい。

だが、どうすればそれが得られるのか、グリゼルダにはわからない。

苦悩するグリゼルダに、キンバリーは珍しく優しい声音こゑで言った。

「ゼルダ。君は若い」

「……知っているが、それが何だ？」

「女もとうが立ってくるとな、用心深くなり、何かと気を回すものさ」

「……貴女あなたのことを言っているのか？」

優しい気持ちは瞬時に砕け散り、思わず、ふところのダガーに手が伸びた。

「君は今すぐ私と殺し合いがしたいのか？」

「待て待て！ 今のは貴女が言い出したことだろう！」

「花柳斎かりやうさい殿が既に手を打っている、という話だ」

「カリューサイ……バカ弟子の実質的（上司）とやらで、命の恩人で、あいつの自動人形オートマドンを作ったという、凄腕すこうでの人形師か」

「君は安心して、今まで通りあいつをしごいてやればいい。君にできないことは花柳斎殿が——
——そして彼がやってくれるだろう」

「彼……？」

キンバリーはグリゼルダの理解を待たず、意地悪く笑って、あごをしゃくった。

「ぼちぼち夜会やかいが始まる頃だ。弟子の雄姿を見てきたまえ」

「あ……ああ。行くぞ、デイガンマ、ステイグマ」

嬉しうれそうについて行く二体を、キンバリーはにやにやしながら見送った。

日輪と別れた雷真は、急いで寮に取って返した。

手洗いに行った……にしては時間がかかりすぎたはずだが、夜々は雷真の嘘を追及してこなかった。すまないとは思ったが、説明せずに夜学生会場へと向かう。

入場ゲートの暗い通路で、真珠色の髪の男子学生が待っていた。

機械人形をかたわらに従え、壁にもたれて立っている。

「ロキ——おまえは怪我人だろ。のこのこ出てくるな」

「黙れ。オレは謙虚で寛大だが、どうにも許せないものが三つある。他人にあれこれ指図されること、他人に侮られること、そして他人に気を回されることだ」

「大した謙虚さだな！ わがまま放題ってことだろ！」

だが、わかつている。ロキはわがままや自惚れで出張ってきたわけではない。

昨日、オルガが降格しようとした——

その話を聞いて、フレイの身を案じたのだろう。もしオルガが本気で雷真たちをつぶしにきたのだとしたら、おそらく、真っ先にフレイが狙われる。

何にせよ、ロキが現れたのは好都合だ。

「ロキ、ちよつと耳貸せ」

雷真はロキに顔を寄せ、先ほど日輪から聞いた話を伝えた。

「オルガが〈十三人〉を召集した……？ それは本当のことか？」

「ああ。日輪はその〈円卓会議〉とやらに出席したそうだ」

「だが、オレは呼ばれてないぞ？」

「呼ぶわけにはいかんさ。何せ、君とシャルロットはライシンの側だから」

いきなり声がかかる。逆光になって顔が見えないが、その背格好、醸し出す迫力、優雅な立ち居振る舞いを見間違うはずもなかった。

オルガがゲートの入り口に立っている。

「やはりきたか、〈剣帝〉^{けんてい}。そして」

視線は雷真たちを突き抜け、その向こう——会場の方に突き刺さった。

「〈魔軍を統べる黒曜姫〉^{メイタマをトウベるクロウキョウ} ヒノワ・ドモン」

既に会場入りしていたようだ。ハカマ姿の日輪が、凛々しく表情を引き締め、オルガをまっすぐ見据えていた。

夜々^{やや}があからさまに敵意を見せ、ぎゅーつと雷真の腰にしがみつく。

雷真は夜々を引きはがしながら、オルガに向かって笑いかけた。

「こっちが手を出さない限り、あんたも攻撃してこないんだってな？」

「残念だよ、プリンセス。彼にバラしてしまったのか」

「わたくしは雷真さまの妻。良人に秘密を持つことなど、とてもできません」

「違います！~~~~~！ 雷真の妻は夜々です！~~~~~！」

「空気読め、夜々。そこは問題じゃない」

「何をおっしゃるのです雷真さま！ そこは重要な問題です！」

「日輪まで何だ!?」

あきれ果てるロキの横で、オルガが苦笑混じりに話を戻す。

「それで、どうする？ 私の目的は君たちを足止めすること——この先、夜会がフェアに行われるようにね。趣旨は伝わっているだろうが、〈十三人〉それぞれが独自に軍を組織して、覇を競おうというものだ」

「何がフェアだよ。要は俺たちを排除するのが狙いだろ」

人望や社交性の観点から言って、秀才たちの方が有利に決まっている。ロキはあの通り無愛想だし、良家の子女が雷真に味方してくれるとも思えない。

「どうとらえようと君の勝手さ。私から手を出すつもりはないが——どうする？」

「もちろん——」「無論——」

雷真とロキは同時に息を吸い、そして同時に言い放った。

「あんたを倒す！」

「面白い」

オルガが目を細め、右手を虚空に差し伸べる。

魔力を集中し、何らかの魔術を使う。いかなる魔術だったのか、オルガの周囲に閃光が飛び散り、虚空から赤い影が飛び出してきた。

ぱさりと翼をはためかせ、影はオルガの腕にとまる。

紅蓮の炎のような、赤いうろこがざらりと光る。

雷真も、夜々も、ロキさえも瞠目した。オルガの腕にとまったのは——

「シグムント……!?」

うろこの輝きこそ違うが、それはシグムントと同じ姿をしていた。

7

夜会やかいの舞台に再びオルガが現れたとき、シャルはシグムントと一緒に客席にいた。屋台で買ったドーナツを分け合いながら、夜会を観戦するつもりだったのだが……。

「〈魔剣クラム〉——シグムント、あれって貴方あなたの同型機よねっ？」

シグムントも驚いたようだ。ほろり、とドーナツの欠片かけらを口から落とす。

オルガの腕で翼を休めている仔竜こりゆう——色は違うが、シグムントそっくりの形状だ。

オルガは常のごとく穏やかに微笑み、対戦者一同に言った。

「覚悟が決まった者から、かかってくるがいい」

雷真と夜々、フレイとロキ、そして姉弟の自動人形オートマトンを順に眺める。

雷真の表情は固い。夜々も普段より緊張しているようだ。

「何を臆おそしている。戦意がないなら引っ込んでいろ」

ロキが雷真を押しつけ、ケルビムを連れて前に出た。

「行くぞ、ケルビム。串刺しにしろ」

「う、私たちも。ラビ！」

姉弟の息はびったりだった。ケルビムが短剣を飛ばすと同時、フレイも〈音の砲弾〉で攻撃した。姉弟のあいだには一〇メートル以上の距離がある。射線は〈十字砲火〉気味にクロスし

ていて、回避するのが難しい。

だが、オルガはとつくに対応していた。

「ラスターシエル」

仔竜が吐き出す光は帯状に広がり——散布された機雷のように、無数の光点がオルガの周囲に展開した。

ケルビムの短剣と音の砲弾が光の帯に突っ込み、強烈な閃光が生じた。

閃光がおさまってみると、オルガも仔竜も、まったくの無傷だった。

「あんな使い方……一体、どうやって……!?」

ラビとケルビムが再び攻撃を仕掛ける。ラビが中央から大出力で押す一方、ケルビムはオルガの側面から、迂回するよう^{うかい}に短剣で狙^{ねら}った。

オルガは何もしない。それなのに、光の粒が勝手に動き、オルガを護^{まも}った。

「自律してる！ あれは念動……じゃない……わよね？」

「——いかん！ 下がれ！」

シャルの頭上でシグムントが叫ぶ。いつの間にか、夜々^{やや}がオルガの真後ろ^{まうし}に回り、飛びかかろうとしていた。

シグムントの警告は、たぶん届かなかった。だが、雷真^{らいしん}が危険を察したようだ。魔力の糸——紅翼陣^{こうよくじん}の糸を飛ばし、夜々を無理やり引き戻す。

直後、夜々が狙っていたあたりに光点が殺到した。

あのまま突っ込んでいたら、夜々の命はなかっただろう。

（また勝手に動いた……一体、どうやってるの……!?）

魔剣のタネは体内で精製する（滅元素）。それを加速して撃ち出す……のが基本となる。自律しているはずがないし、念動で操るとしても、あの数は無理だ。

絶句するシャルとは対照的に、ギャラリーは大喜びで喝采を送った。

「う……攻撃手段が……ない……!」

フレイが青ざめた顔でつぶやく。射撃は完全に無効。接近することもできない。

「どうした、ロキ。そしてライシン。さっきの威勢はどこに行った?」

オルガが嫌みのない笑顔を向ける。ロキも雷真も無言で視線を返しただけで、ぴたりと動きを止めてしまった。

「こないのか? 一度戦いを始めた以上、私も専守防衛ではないぞ?」

オルガは右腕を掲げ、仔竜を目の高さに持ち上げた。

「ラスターファイル!」

仔竜の口から閃光が飛ぶ。……ラスターカノンではない。光線は大きくうねり、トカゲの舌のように変形して、一瞬で夜々に迫った。

夜々は宙返りして身をかかわした——が、オルガの狙いは夜々ではなかった。

光は鎖のようからまり、ラビの体にまとわりついた。

「ラビ!? だめ! 動いちゃだめ! おすわり!」

フレイに命じられるまま、ラビはぎこちなく（おすわり）する。

オルガがちよっと（光の鎖）を締めれば、ラビの首はたやすく落ちるだろう。

「そろそろ、私の力は理解してもらえたかな。では、少し大人しくしていてくれ」

オルガは三人に背を向け、舞台中央に進み出た。

「お集まりの紳士淑女にご挨拶申し上げる。私は学生総代オルガ・サラディーン」
よく通る声で、演説のように語り始める。

「既にご承知の通り、夜会はこの三名——第百位、九九位、九八位が怒涛の快進撃を見せています。彼らの躍進は誰に非難されるべきものでもなく、むしろ称えられるべき偉業と言えますが、三対一では挑戦者に不利と言わざるを得ない」

場内が静まり返る。オルガが何を言い出したのか、興味津々だ。

「まして〈剣帝〉は〈十三人〉に名を連ねる強者。〈下から二番目〉も過去に〈十三人〉を退けたほどの腕前です。学業に励み、努力の末に夜会参加を決めた者が、実力を示せぬまま彼らに完封されるのではあまりに不憫。そこで——」

息を切って間を取り、やがて力強く宣言する。

「本日より、〈十三人〉有志が夜会の進行に介入させていただく！」

どん、と一歩踏み出す。その迫力に、会場がびくりと震えた。

「我らは順次〈自主降格〉し、後続の参加者を支援します。ですが、どうか誤解なきよう。我らはやはり敵同士——いずれそれぞれに同志を募り、〈諸侯〉として〈戦争〉をお見せいたす所存。〈手袋持ち〉諸君、信ずるに足る将につけ！ 我こそはと思う者は、自ら将の名乗りをあげよ！」

堂々たる声が会場を揺さぶり、熱気を呼ぶのを、シャルは肌で感じた。

「お集まりの皆さまには恐縮ですが、しばし夜会の進行が止まることをご承知願いたい。また、今宵の私はここで舞台を降りますが、それは決して怠惰や八百長ではなく、単身で彼らに勝つのが難しいからだと申し上げておく。……以上、皆さまのご清聴に感謝します。後日の再戦をお楽しみに」

言うだけ言うと、オルガはさつときびすを返し、舞台を降りて行った。

場内は蜂の巣を突ついたような騒ぎになった。見物の名士たちは口々に憶測を交わし、新聞記者やブックメーカーの調査員が、血相を変えてオルガを追う。

やがて、オルガの魔術が効果を失い、ラビの拘束はあっさり解けた。

ラビに王手をかけていたのに、殺さずに去る。オルガの意図はわからないが、助かったのは事実だ。フレイはラビにしがみついて、泣き出してしまった。

「……どうした、シャル。顔色が優れんようだ」

シグムントが帽子から身を乗り出し、逆さまにシャルをのぞき込む。

シャルは答えることもできず、ただ羞恥に頬を染めていた。

同じ魔剣使いだからわかる。彼我の実力差が、大きく離れていることが。

シャルの未熟な技を見聞きして、オルガはどう思っていたのだろうか？

「……出ましょう、シグムント」

「うむ。異存はないが……」

シャルは暗い顔をして、とほとほと観客席を後にする。その帽子の上で、シグムントもまた暗い顔をしていた。

シャルには聞こえないくらいの小さな声で、ぼつりとつぶやく。

「我らはもともと別世界の同じもの。魔剣と魔剣がぶつかれば、どちらか一方が必ず折れる。

……それがわかっていて、夜会に参加するのだな、トール」

そのつぶやきに応える声はない。

Chapter 3 胃袋争奪戦

1

オルガ参戦の翌日に〈女帝〉ソーネチカが、その翌日には夜会第二位〈三千世界天子〉アスラが自主降格した。

無論、舞台上にはオルガもいた。雷真とロキは状況次第で攻撃するつもりだった……のだが、誰にも隙はなく、にらみ合っているうちに夜会は終わった。

と言っても、あちらに隙がない理由は、雷真だけが原因ではないようだ。

オルガ、ソーネチカ、アスラは、互いに牽制し合うように一定の距離を保っていた。

（なるほど……日輪が言った通りなら、連中の同盟は所詮、不戦協定——）

雷真たちの手から挑戦者を護るのが目的だ。舞台上に〈手袋持ち〉の数が増え、オルガの言う「フェア」な状況が生まれるまでの時間稼ぎにすぎない。

誰かが隙を見れば、即座に蹴落とす——そういう覚悟でやっている。

ここはもう血で血を洗う〈戦場〉なのだ。

果たして、この〈戦争〉を勝ち抜き、マグナスに挑戦する者は誰なのか。

見た目の停滞とは裏腹に、舞台には胃が痛くなるような緊張感が満ちていた。

そして、ついに迎えた蕎麦勝負の日。

「洒落にならん……いつの間に、こんな……！」

薄暗いテントの中に、昴の重い声が響いた。

ぐつぐつと鍋が煮えている。出汁とてんぶら油のいい匂いに混じって、テントの中には血なまぐさい臭気が漂っていた。

昴の目の前には、食い散らかされた天ぶらの残骸と。

犬の生首が転がっていた。

ただの首ではない。筒状の爆発物をくわえている。

六連の消火が間に合っていないければ、テントが吹き飛ばされていた。

「判断を誤るな。次はおまえの首が転がる」

地面に浮き出た血文字が、いつも通り、かき消えるように見えなくなる。

血の気の失せた顔で、六連がうめいた。

「僕ら、ずっとここにいて……ギリギリまで気いつかんかったですかね……？」

「……これではつきりしたな。少なくとも相手には、俺らの五感はもちろん、式の感覚をだまからかすほどの術がある。……なみの魔術師やない。今はまだ嫌がらせ程度やけど、本気になられたら……どうしようもないわ」

エプロンを脱ぎ捨て、昴はテントを出て行こうとする。六連はあわてて、

「ちょ、昂……どこ行かはるのん？」

「このままにはしとけんやろ。とりあえず、雷真の阿呆に——」

「言うたらあかん！」

日輪が制止する。日輪は割ぼう着のすそをきゅつと握り、震える声で言った。

「……雷真さまには大事な夜会があります。ご心配をおかけしたくありません」

「せやかて、お嬢……」

「大丈夫……今日は、お蕎麦だけで勝負する」

「そんなん言うてる場合か!? おまえ、命狙われとんのやぞ!?」

「もうあきまへん、お嬢」

いつになく真剣な口調で六連が言う。昂も日輪も驚いて振り向いた。

「お嬢に何かあったら、お館さまに顔向けできひん。もう日本帰らはった方が——」

「嫌や！ せっかく雷真さまと会えたのに……日輪は絶対、帰りません！」

頑なに主張する。昂はイラッとした。

「何ダダこねとんのや！ おまえの命より大事なもんがあるかいな！」

「あります！ 雷真さまの夜会です！」

ぴしやりと言いつ切る。昂も六連も、そろって鼻白んだ。

「赤羽天全は恐るべき敵……わたくしの力がきつと必要になります。だから——」

「——あかん！ あいつがきよる！ はよ隠せ！」

テントの外、見張りの式神が気配を察した。

日輪は素早く式神を召喚した。がま口のような式神が現れ、充滿していた臭気もろとも、犬の生首、天ぶらの残骸、そして天ぶら油を丸呑みにする。

テント内の瘴気が祓われ、たちまち空気が浄化された。

しばらくして、入り口の布がめくられ、雷真が顔を出した。

「お待ちしておりました！ 雷真さま！」

日輪が嬉しそうに駆け寄って行く。昂は内心で嘆息した。二年ぶりに想い人に会えたのだ。危ないから日本に帰ろうと言って、すんなり帰るはずもない。

雷真の後ろにはブリュー姉妹の姿もあった。

「ライシンってば、ムカつくくらい有頂天ね。私のヒノワを引っ張り回して」

「え!? ライシンさんったら、ヒノワさんを輪〇して有頂天……!?」

「こらアンリ！ 何んでもない勘違いしてんだ！」

突っ込んだ途端、出汁の香りに反応したのか、雷真の腹が「ぐぐうー」と鳴いた。

その音を聞いて、少女たちがぐくすく笑い出した。日輪も微笑んで、

「雷真さまったら、食いしん坊です」

「はは、二日もおあずけ食ったからな……。で、蕎麦はできたのか？」

「もちろんです！ いざなぎ流の名に恥じないものをご用意しました！」

昂は湯から蕎麦を上げ、冷水にさらした。きらりと表面が光り、見た目にも美しい。

糸状の蕎麦切りを見て、シャルが不思議そうな顔をした。

「これ、ニホンの料理なのよね？ この粉、見たことあるような……」

「たぶんガレットの材料だよ、お姉さま」

「お母さまが得意だったやつ？ だったら簡単に手に入ったかもね。でも、スープの匂いが想像してたのと全然違うわ。参加しなくてよかったかも……」

雷真は昴の手元、きらめく蕎麦を眺めて、ごくりと生唾をのんだ。

「蕎麦の方はかなり期待できそうだな。だが、天ぶらは——」

「……すみません。大変申し上げにくいのですが……その」

日輪がうつむく。そんな彼女が気の毒で、昴は身を焼かれるような気がした。

ふと、雷真の眼光が鋭くなった。

さり気なく——しかし鋭く、注意深い視線をテントの中に巡らせる。

（相変わらず聡いやつちゃ……けど、お嬢の手前、悟らせるわけにはいかん）

昴はいつもの不機嫌な調子を取り繕って、横から声をかけた。

「天ぶら？ 天ぶらて何や？ そんなん聞いてへんわ！」

「あ？ そうなの……か？」

日輪は小さな頭を下げ、演技ではなく涙ぐんだ。

「し、失念しておりまして……申し訳ありません……日輪は、妻失格——」

「気にするな。めちやくちや楽しみだぜ！」

「雷真さま……♡」きゅーんっ！

悲しい涙が嬉しい涙に早変わり。昴はやってられない気分で、しかしほっとして、出て行く雷真たちを見送った。

雷真をやりすごすと、六連が弱り果てたような顔を寄せてきた。

「昂……はよ手を打ちませんと……」

「わかつとる。けど……」

昂は奥歯を噛んだ。せめて夜会執行部には相談したいが、日輪は断固として、表沙汰にする気がないようだ。

「ともかく、警備を強化しまひよ。お嬢には内緒で、本国に連絡取ってみます」

「おう、頼む。俺は式の数^{おれ}を倍に増やすわ」

昂はため息を隠して、次の蕎麦切り^{そば}を湯に落とした。

3

（気のせいかな……胸が悪くなるような……嫌な感じがしたんだが）

雷真は首をひねりながら、日輪のテントから出た。

テントの前にはテーブルセットが設置されている。既にフレイが到着していて、雷真の顔を見ると、ガラムたちが『ふあさり』と一斉に尾を振った。

「ようフレイ。夜会があるつてのに、悪いな」

「う。お招きありがとうございます」

「ちよつと待っててくれ。今、夜々の方^{やや}を見てくる」

笑顔でそう言って、となりのテントに移動する。こちらでは、油のはねる軽やかな音が響い

ていた。夜々と手伝いのいろりが、今まさに天ぶらを揚げている。

「雷真……どうして女狐のテントに先に……？」

「そんなことで瞳孔を開くな——つて、おお！ えびに、ナスに、かぼちゃに、しめじ、この魚は……キスか？ よくそろえたもんだ」

誉められて、夜々も気をよくしたらしい。えへんと胸を張った。

「学院を抜け出して、市場で調達してきました！」

「勝手に抜け出すな！ でも、その、ありがとよ」

思わず礼を言ってしまう。そんな雷真を見て、シャルとアンリが噴き出した。

「で、肝心の蕎麦はどうした？」

「え？ これから打ちます……けど？」

明らかに段取りが悪い。今から蕎麦を打ったのでは、天ぶらが冷めてしまうだろう。

絶句する雷真を見て、夜々もしくじりに気付いたようだ。

非難がましい目を姉のいろりに向ける。……が、いろりは素知らぬ顔で、かしわのかけ汁を

煮立てているだけだ。頼まれたことしか手伝わない方針か。

「ちょ、ちょっと待っててくださいい雷真！ すぐに夜々の金剛力で——」

「いや、制限時間いっぱいだ。試食会を始めようぜ」

「そんな！ 制限時間って誰が決めたんですかつ？」

「俺の、腹の虫だよ」

「でも、それじゃ勝負が——」

「大丈夫、実に上手い具合だ。やつばおまえは世界最高の相棒だよ」

夜々はぼーっとして、冷静な思考力を失った。いそいそと天ぶらを皿に盛りつけ、椀に汁を注いで、テーブルセットの方へと運んでいく。

数分後、雷真の目の前には、ほかほかと湯気を立てる天ぶら蕎麦があった。

天ぶら蕎麦——文字通り「夢にまで見た」天ぶら蕎麦だ。

雷真は両手を合わせ、敬虔な気持ちで宣言した。

「いただきます」

夜々と日輪の視線を感じながら、押し頂くように器を持ち、そっと汁を口に含む。

ふわっと鼻の奥に抜ける、フルーツのように爽やかで、芳醇な醤油の風味。

——美味しい。しみじみと、美味しい。

長らく砂漠をさまよって、ようやくオアシスにたどり着いたような、そんな気分だ。

つやつやと光る蕎麦をフォークで巻き、つゆにからめて、口に突っ込む。

ぷつり、という、ほどよい歯ごたえ。つるりと喉を滑り落ちる快感。

蕎麦の苦味や、ほのかな辛さや、甘みや、渋みが、舌の上で跳ね回った。

西洋人の少女たちの手前、豪快に音を立ててすすれないのが残念だが——

「くーっ、美味え！これだよ、これ！」

となりのテーブルで、くすつとシャルが笑った。

「あいつがあんなに美味しそうに何かを食べるところって、初めて見るわ」

「う……複雑。でも、おいしい。おさかな」

同席しているフレイが、さくさくと天ぶらをかじって、感想を述べる。

天ぶら蕎麦は彼女たちの口にも合ったようだ。シグムントも興味を持ったのか、天ぶらをカリカリかじっている。シャルは初めて見る食器に戸惑ったようだが、お椀をコップの一種と判断したらしく、口をつけて飲んだ。

「ん、美味しい！」

意外そうな顔をする。それから、器を透かし見て、うつとりとした。

「きれいな、漆塗り。それに、羽みたいに軽いわ！」

貴族の娘だけあって、シャルは食器に興味を持ったらしい。ここ数日は落ち込んでいたようだが、少し元気が戻ったようで、雷真はほっとした。

日輪と夜々の息詰まる沈黙をもとめせず、雷真はすぐに一人前をたいらげた。

テントのところまで駆けて行き、昴にどんぶりを差し出す。

「美味しいぜ、昴。オカワリくれよ」

「チッ！」

「今、舌打ちしたよな!?」

態度は悪いが、作業は丁寧だ。几帳面を絵に描いたような手つきでよそってくれる。

雷真はテント内をうかがいつつ、それとなく昴を観察した。先ほど感じた違和感、妖気のようなもの——その正体が気にかかっている。

昴は普段通りに見える。日輪が雷真に隠し事をするとは思えないが……?

「なあ、昴。さつき——」

「はよ戻れ。阿呆がうつる」

「いいだろ、話くらい！」

「やかましい！ 大っ体、おまえは昔から好かんのや！」

昂は雷真におたまを突きつけ、この際とばかり、叩きつけるように言った。

「お嬢の前から往ね！ 永久に往ね！」

「わ、わかったよ。夜会が終わったたら、なるべく近付かないようにする」

「そんな……雷真さま……！」がーん！

聞こえていたらしい。見る見る涙ぐむ日輪を見て、昂も雷真もぎくつとなった。

「お、お嬢泣かす奴は死ね！ この世から往ねオラァ！」

「おまえも共犯だろ！ 結局どうしろってんだ！」

「まあまあ昂、そんな青筋立てんと」

つるつると蕎麦をすすりながら、六連がとりなしてくれる。

「僕は結婚に賛成ですよ。雷真はんとお嬢がお子作らはったら、そらもの凄お人形使いが爆誕しますやん。確実に日本最強ですわ」

その言葉を聞いて、今度は夜々が傷ついたような顔をした。ついでに昂も。

「阿呆ぬかせ六連……そんな……そんな未来予想図は……嫌やああああ！」

昂はエプロンを投げ捨て、茹でかけの蕎麦を放置して走り去った。

その大柄な背中を見送り、六連は小さくため息をついた。

「堪忍なあ。昂はお嬢にぞっこんやさかい。ま、叶わぬ恋ゆうやつですわ」

日輪が驚いて口を押さえる。

「まあ、そうだったのですか……昂、可哀相に……！」

「はは……それ、お嬢が言わはりますか」

「わたくしが雷真さまから心変わりするなんて、スサノオノミコトがお菓子作りに目覚めるくらい、あり得ないことですのに」

ケーキ作りに精を出すスサノオを思い浮かべ、雷真は胸を痛めた。

「……マジで気の毒になつてきたな」

ちゅるりん、と蕎麦をすすする。実に美味い……が、先ほどのようには楽しめない。

雷真の胸中に、得体の知れない〈怖れ〉が広がっていた。

腹が満ちるまで蕎麦を食い、雷真の胃袋と魂は大いに満足した。

だが、まだ問題が残っている。これは日輪と夜々の〈勝負〉なのだ。

少女たちの評価は割れた。

シャルは日輪に、フレイは夜々に票を入れたが、アンリは決めかね、投票を棄権した。アンリの性格から言って、たぶん夜々と日輪に遠慮したのだろう。

「さあ、雷真さま、裁定を！」「夜々の勝ちですよ、ね、雷真！」

乙女二人が迫ってくる。雷真は深呼吸して、用意の言葉を語り始めた。

「まず、夜々の天ぶらは最高だった」

夜々が嬉しそうに万歳をする。

「カラッと揚がって、旨みを見事に閉じ込めていた。その旨みがつゆとからんで、たまらねえ美味さなんだ。蕎麦は借り物だったが、かしわの汁も最高に美味かった。鶏の脂が効いてたぜ。舌の根っこがじんわり震えて、旨みでクラクラするほどだった」

得意満面の夜々から視線を外し、沈み込む日輪に顔を向ける。

「そして、日輪の蕎麦も最高だった」

さすがのように顔を上げる日輪。反比例して、夜々の表情が曇り出す。

「ぶっん、と切れる歯ごたえといい、つるりとすべる喉ごしといい。白だしつゆもすげえ美味くて……何っつか、おふくろの蕎麦を思い出したよ。俺のホームシックを計算に入れても、望み得る最高の蕎麦だった」

「つまり、夜々の勝ちですよねっ？」

「世迷言を！ つまり、わたくしの勝ちです！」

張り合う二人を引きはがし、雷真は最終判定を言った。

「つまり、引き分けだ」

「な、納得できません！ お題は確かに『天ぶら』蕎麦でしたが、雷真さまが召し上がりたかつたのはお蕎麦のはず……お蕎麦はわたくしのご用意しましたのに！」

「いやいや、あれは晶が打ったんだろ。あいつ得意だったよな？」

日輪は赤面し、栗鼠みたいに小さくなった。

「す、すみません……幼少のみぎりより、お台所には入れてもらえなくて……」

「日輪はお姫さまだからな。そこは仕方ない」

「雷真！ それじゃ夜々^{やや}は!? なぜ夜々の勝ちじゃないんですか!?」

「勝手に学院を抜け出したし、おまえ、いろりに頼りっぱなしだったんだろ？」

「姉さま……雷真に告げ口なんて……！」

「待て待て。いろりは何も言っていない。だが、俺^{おれ}は二年近くもいろりの手料理を食わせてもらってんだ。いろりの味はすぐにわかるさ」

なだめたつもりだったが、夜々はますます殺気を高め、日輪やシャル、フレイまでもが険しい視線をいろりに送った。一方、いろりは華やいだという感じで、そっと目を伏せ、かすかに微笑^{ほほえ}んでいた。

アレ？ 何か急に空気が悪くなったような……？

正直わけがわからないが、この先が重要なので、雷真は続きを言った。

「何より俺は《天ぶら蕎麦》を食えたことが嬉しい^{うれ}んだ。天ぶらだけでも、蕎麦だけでも、この感動はなかった。だから、ありがとよ、二人とも——そして、みんな」

それでようやく、日輪と夜々も納得したようだ。

二人はちよつと恥ずかしそうにお互いを見つめる。

誇らしさと、嬉しさと。ひよつとしたら仲間意識のようなものを込めて。

いい雰囲気だ。雷真はここぞとばかりに結論を言った。

「というわけで、引き分けだ。よし、これで八方丸く収まったな！」

「収まってません！」

少女二人が同時に叫び、再び険悪な目つきでにらみ合う。

(直前までいい雰囲気だったのに……余計なことを言っちゃったか?)

見れば、シャルはあきれたようにため息をつき、フレイは気の毒そうに、アンリは腫れ物に
触れるような目で雷真を見ていた。要するに——皆の視線が痛い。

「雷真はアテになりません! 日輪さん、夜会が終わったら勝負の続きです!」

「の、望むところです!」

「ふふん、そんなこと言っているんですか? 第二幕のお題は〈夜伽〉ですよ?」

「やめろ!」

たまらず、雷真は夜々にげんこつを落とした。

4

その夜の夜会も、やはり戦闘にはならなかった。

雷真、ロキ、フレイ、そして日輪が戦いを仕掛けることはなかったし——

オルガ、ソーネチカ、アスラが攻撃してくることもなかった。

この夜、オルガの背に隠れるように現れたのは、セドリックだった。

こちらと視線が合った途端、セドリックは意味ありげな微笑を浮かべた。

(あいつ……ただの影武者じゃねえ!)

かなりの使い手だ。戦い慣れしているふうでもある。それに……。

(会ったことがある……どこかで……思い出せない)

ともかく、この日の夜会も平穏無事に終わった。
危険はむしろ、雷真の私生活の方に存在した。

寮に戻った雷真を待ち受けていたのは――

「お帰りなさい雷真――じゃなくて、旦那さま」
だんな

「お帰りをお待ちしておりました、旦那さま」

入り口の床に三つ指ついてこうべを垂れる、襦袢姿じゆばんの夜々と日輪だった。

雷真はよろめき、ごちっと壁に頭をぶつけた。

「何やってんだ、おまえら……?」

「もう観念してください雷真。今日という今日は、肉欲三ツ星フルコースを堪能してもらいます。ちなみに料理長は夜々!」

「ならば、わたくしは支配人を務めます!」

「つぶれろ、そんな店! まさかおまえら、勝負の続きとやらを……!」

「雷真さま。その前に、申しておかねばならないことがあります」

日輪はきりりと顔を引き締め、ひどく真剣な調子で言った。

「日輪はいざなぎ流の奥義を極め、総伝の免状を受けた身です」

「知ってるよ。その若さで、大したもんだ」

「ですが、いざなぎ流いざなぎ（閨房の術）をまだ伝授されておりません」

「そんなのあるのか!」

「ゆえに今宵お見せいたします技は、聞きかじりの拙き技にて……」

日輪はあわてて背後に手を回し、挿絵入りのいかがわしい本を取り出した。

「ご、ご安心ください！ シヤルロットさまから参考資料をいただいております！」

「ちよつとヒノワ！ 私の名前を出さないでって言ったでしょう！」

どかつとクロゼットのドアを蹴ってシヤルが飛び出してくる。

シヤルは「しまった」という顔をしたが、今さらどうしようもない。とりあえず、日輪から

本を取り上げ、取り繕うように言った。

「たまたま、お母さまの蔵書だったのよ。中身は見たこともないわ」

「……その表紙、男同士がからんでるように見えたんだが？」

「も、問題ないわよ。男を本当に喜ばせられるのは男だけって書いてあったもの」

「しっかり読んでるじゃねーか！」

「もうっ、そんなことはどうでもいいんですー！」

夜々が怒って両手を振り上げた。

「今すぐパンツを脱いでください雷真！ 話はそれからです！」

「久々に聞いたなその台詞！ 二度と聞きたくなかったけどな！」

「お説教なら後でいくらでも聞きます！ だから今は大人しく、いきり立つ男子の中心部を静

めさせてください！」

「いきり立ってねえ！ イヤな表現すんな！」

「わたくしだって！ 雷真さまの頑なな部分を見事ほぐしてご覧に入れます！」

先を争うように、腰にまとわりついてくる二人。

雷真は観念して——ごちごち、と二人の頭に拳骨を落とした。

夜々と日輪はそろって頭をおさえ、うずくまった。

そのとき、雷真は日輪の手に絆創膏が貼られているのに気付いた。

「おまえ！ これ……どうしたんだ!?」

日輪が怪我をするなど、普通はあり得ない。幼い頃ならいざ知らず、今は（身固）や式神に

よって護られている。簡単に手傷を負うわけが——

日輪はさっと手を隠して、

「な、何でもありません！ そんなことより、夜伽がだめとおっしゃるなら、せめて日輪もこ

こに泊めてくださいませっ」

涙目で訴える。雷真が絶句していると、日輪は悲しそうに鼻を鳴らし、

「……いけませんか?」

「いいわけないだろ。ちよつとは冷静になれ。ここは男子寮だぞ?」

「だって、泥棒猫とは同居してるのに……!」

雷真は答えに窮した。夜々の手前、自動人形だから、とは言いたくない。

「落ち着いて考えろ。夜々を野宿させるわけにはいかねえだろ?」

「日輪だって、ここを追い出されたら野宿する覚悟です!」

「そんな覚悟を決めるな! ああもう、何でこんなめんどくせーことに……!」

その瞬間、室温が二度も下がったような気がした。

日輪はこの世の終わりのような顔をして、呆然と雷真を見つめていた。

「雷真さま……今……日輪のこと、面倒くさいって……」

「あ！ 違う！ おまえのことじゃない！ その怪我の原因——」

「……ごめんなさい……わたくし、自分のことばかり……雷真さまのお気持ちも考えず……」

……日輪は……日輪は……恥ずかしい……っ」

ぼろり、と涙をこぼしたかと思うと、日輪は両手で顔を覆い、走り去った。

あわてて追いかけようとした雷真を、がしつと誰かの手が引き止める。

振り向くと、夜々が責めるような目でにらんでいた。こんな冷たい視線は、『相棒』の約束

を取り交わして以来、ついぞ向けられた記憶がない。

「今の発言は最低です雷真。男の風上にも置けない下衆野郎です」

「半分はおまえのせいだからな！ っつか、日輪の殊勝な台詞を聞いただろ？ おまえも少し

はあいつを見習え！」

またしても室温が下がる。夜々は目を潤ませ、ふるふるっと肩を震わせた。

「わ、悪い夜々！ その、もうちよつと言ひ方があったよな、俺も——」

「雷真は……馬鹿ですーっ！」

うわーん、と泣いて、窓から外に飛び出して行く。

日輪を追うか、夜々を追うか。どちらとも決めかねて、雷真は座り込んだ。

夜々が無茶をしないか気になるし、日輪の怪我也心配だ。

「どうすりゃいいんだ……誰か……知恵を授けてくれ……」

「貴方^{あなた}がはつきりしないから、あの子たち、苦しんでるんじゃないの？」
顔を上げると、シャルがシグムントを抱きしめて、そっぽを向いていた。

「貴方には感謝してるし、いいところもたくさんあると思うけど——って、そんなの知らないわよ！ 貴方のいいところなんて思いつかないわ！ まあ……そこそこ努力家みたいだし、約束も守るタイプみたいだし、意外と頼りにならなくもないし、他人のために捨て身で頑張れるとか、度胸があるとか——」

「シャルよ、列挙するのはそのくらいにしておけ。話が進まん」

シャルは咳払い^{せきばらい}して気を取り直し、じっと雷真を見た。

「貴方の唯一^との取り柄^えはね、おなかの底から信じられるってことなの。貴方だけは裏切らないって、背中を預けられるって、心から思えるの」

まっすぐな言葉。寒々としていた雷真の胸に、灯^ひがともったような気がした。

だが、シャルは雷真を誉^ほめているのではなく——むしろなじるように言った。

「それなのに、信じられなくなるのよ。女の子のことだけは……貴方を信じていいのか、わからなくなるわ」

「つまり……どっちなんだよ？ 俺^{おれ}は信じられないのか？」

「知らないわよ！ 私が言いたいのはそれだけ！ じゃあね変態！」

怒ったように言い捨てて、ばたばたと部屋を出て行く。

待ってくれ、と言おうとして、できない。普段なら『手を貸してくれ』と言うところだ。日輪^{ひの}の周囲に気を配^{くば}り、護^{まも}ってやってくれと。

だが、言えない。これは雷真と、そして日輪の問題なのだ……。

雷真は座り込んだまま、しばし、シャルが言ってくれた言葉を噛みしめていた。

「ライシン、てめえ……寮則つてもんを舐めてんじゃねえよな……？」

見上げると、今にも爆発しそうな、美形の寮監が立っている。

「女子を入れるなっつってんだろ！ いい加減、退寮にするぞこの野郎！」

「——悪い、説教は後で聞く！」

雷真はあわてて部屋を飛び出した。

5

「お嬢！ 返事せえ、お嬢！」

とどんとどんと、と激しくドアが叩かれる。その騒音を遮断したくて、日輪は羽毛布団を頭からかぶり、ベッドの中に潜り込んだ。

（わたくしは……何て愚かなのでしょうか……！）

心底、自分が嫌になる。雷真さまにも事情があつて、婚約の件を保留にされているはず。それなのに、一方的に気持ちを押しつけてしまうなんて。

ただでさえ、連日の〈脅迫〉で精神が疲弊している。得体の知れない悪意を向けられ、弱りきっていた心が、ぼっくりと折れてしまった。

もう涙が止まらない。日輪は布団に顔を埋め、漏れる嗚咽を噛み殺した。

ふと、厚い布団越しに、控えめなノックの音が入った。

昂^{トビ}ではない。日輪の常人離れした第六感^{センス}は、直感的に相手を察した。

「……ヒノワ？ 入っていい？」

シャルだ。出たものか、一瞬、迷う。

ほんの数日前、同じようにシャルがきてくれたとき、日輪は出ることができなかった。日輪はそのことを後悔したはずだ。今また同じ過ちを繰り返すことは――

したくない。日輪はもともとベッドを抜け出して、ドアを開けた。

「すみません、シャルロットさま……こんな顔で、失礼を……」

「失礼なわけではないじゃない。泣いたっていいわよ。私たち、友達なんだから！」

友達。その単語を口にするとき、シャルの声はちよつぱり弾んだ。

日輪^{ひのわ}の気持ちもまた、ちよつぱり弾み、そしてほぐれた。

「……シャルロットさまは、わたくしにとって、初めてできたお友達です」

「え、そうなの？」

シャルは意外そうにまばたきをした。日輪はうなずき、シャルを招き入れた。

乱れたベッドを整え、並んで座る。

「留学するまで、わたくしは〈学校〉というものに通ったことがありませんでした」

「じゃあ、ずつと家庭教師？ 昔の貴族みたいね」

「はい。従姉妹^{いとこ}や親戚^{しんせき}、身内の子と接する機会はありませんでしたが……皆、他人行儀で。ここに留学しても、一般の学生とおしゃべりすることは禁じられていました」

「超箱入り娘ね。そう言えば、寮に入るのも初めてって言ったわね」

「はい。でも、実家の後援もなくなったことですし——勇気を出しました」

「勇気？」

「わたくしも、雷真さまのように強くなりたいのです」

こしこしと目元をぬぐい、まっすぐ壁をにらむ。

「わたくしはこれまで、お婆さまのおっしゃる通りに生きてきました。一門の掟、家訓、古くからのならわし——そんなものに縛られて。でも今は、お婆さまに齒向かってでも、守り抜きたいものがあります」

「あいつとの結婚ね。でもそれは、親同士が決めたことなんでしょ？」

「はい。わたくしのお父さまもまた、お婆さまの言いなりなんです」

常に苦虫を囁んでいるような父を思い出し、切なく微笑む。

「維新が成つてはや半世紀——日の本を強国に押し上げようというこのご時世に、いざなぎ一門と赤羽一門が対立したままではいけません。赤羽一門にとっては、不遇の時代を終え、数百年ぶりに権力中枢に返り咲く好機となりますし、わたくしたちも、そのう……赤羽の血を得れば、いざなぎ流がさらに強固なものとなりますし」

「血？ 血って——赤ちゃ……」

はっ、と音がして、シヤルと日輪が同時に赤面した。

「で、ですが、それは大人の話です。わたくしはただ、雷真さまの妻になりたいのです。あの方の側に……ずっといたいのです」

シャルは視線を落とし、自分のつま先をじっと見つめた。

それから、にこっと笑って、やけに明るい声で訊いた。

「ねえ！ 子どもの頃のあいつって、どんなだったの？」

「あ、ええと——いえ、その……それはっ」

強烈な記憶が蘇り、日輪はあわてた。どんな顔が熱くなり、恥ずかしい気持ちが入り込んでくる。その変化を見て、シャルはもちろん食いついてきた。

「ちよつと何よ、その反応！ 全部吐いちゃいなさいよ！ 隠し事はなしよ！」
押し切られる形で、日輪はぼつぼつと語り出した。

今から七年ほど前のこと——

その日、天狗山にある土門の屋敷を、赤羽の当主が訪れていた。

結納の儀を取り交わすためだ。両家秘蔵の宝具を納める都合上、大勢の護衛も随行している。

もちろん、一〇歳になったばかりの雷真も。

大人同士の酒宴が始まり、子どもたちは自然と放っておかれた。

日輪は恥ずかしくて、雷真の顔をまともに見ることもできない。結局、柱の陰に隠れてばかりいた。だから、どうしてそんなことになったのか、覚えてないのだが——

側仕えの昴と六連が、雷真を侮るようなことを言っただけ。

きっかけは子ども同士の、他愛もない口喧嘩だ。それがいつしか意地の張り合いになり、力比べにまで発展した。

大人の目が届かない蔵の裏手の裏庭で。

昴が降ろした式神は、〈依り代〉人形ではなく、野犬に憑いてしまった。

裏山から紛れ込んだのか、あるいは誰かが放ったのか、野犬は五、六匹もいた。式神を生物に憑依させるのは難しい。そして、一度憑依してしまえば、制御はさらに困難となる。案の定、

野犬は昴の支配をたやすく脱し、勝手に暴れ始めた。

逃げようとして、日輪は転ぶ。野犬の群れが一斉に振り向き、日輪に狙いを定めた——あの一瞬の心臓が凍るような感覚は、今でも鮮明に覚えている。

うなり声と吠え声が迫る。そのまま肉を食い破られる……ことはなかった。

犬より先に雷真が飛び込んできて、日輪を救い出してくれたのだ。

代わりに雷真が嘔みつかれる。雷真の足から血が噴き出るのを見て、日輪は貧血を起こしかけたが、雷真は少しも怯まず、大声で怒鳴った。

「何とかしろよ、昴！ 六連！ おまえら、いざなぎ流の達人なんだから！」

「阿呆！ で——できひんのや！」

「昴、あかん！ 集中が乱れて……っ」

二人が情けない声を出す。実戦の緊張感の中で、いつもと同じように魔力を高めるのは難しい。まして彼らはまだ子どもで、その上、負傷している。

「じゃあおまえら、せめて日輪を護れ！」

止める間もなかった。雷真は庭木に取り付き、添え木を一本引き抜くと、それを木刀代わりにして、野犬の一匹に斬りかかった。

鋭く一閃。ひたいを割られた野犬は、甲高く鳴いて飛びずさった。

——当たる！ 効いてる！

攻撃が当たるとわかった以上、雷真が怯える必要はなくなった。

雷真は野犬の群れに突っ込み、暴れ回った。

憑依が解けたのが先か、戦意が殺がれたのが先か——やがて野犬は逃げ出した。

雷真は生きていた。だが、暗れ着は破け、腕も脚も、血まみれだ。

日輪はすっかり取り乱し、昂の袖を引っ張った。

「昂、はよう！ はよう、手当てを……っ」

「そうだ昂。日輪を連れてって、手当てしてやれ。コケてすりむいたんだ」

雷真が昂に向かって言う。日輪はびっくりして、続く言葉のみ込んでしまった。

だが、昂には日輪の意図がちゃんと伝わっている。昂は雷真を指差して、

「阿呆、おまえの怪我のことや！ 流血の大惨事やないか！」

雷真は自分の手足を見て、にかつと天真爛漫な笑顔を見せた。

「犬に噛まれた程度だろ。こんな傷、慣れっこだ」

それは年相応の、やんちゃ坊主の笑顔だった。

「何それ！ あいつって、子どもの頃からやんちゃだったのね」

シヤルは笑った。雷真がどんな顔でその台詞を言ったのか、目に浮かぶようだ。

日輪も幸福そうに微笑んで、うなずいた。

「わたくしや昴たちは、その——口幅くちはばつたいののですが、いわゆる（名家）の生まれです。わたくしが怪我でもしようものなら、使用人が職を解かれてしまいます。泥んこになってお外を駆け回るなんて……そんな経験はありませんでした」

「だからこそ、惹ひかれちゃうのね。あいつの無茶むちやっぷりに」

「もちろん、そればかりではありませんが……はい」

「わかるわ。あいつっていつもそう。無茶むちやばかりなのよね」

「——はい」

一瞬、日輪がつらそうに顔をしかめた……ような気がした。シャルは怪訝けげんに思ったが、気付かなかったふりをして、それからさらに一時間、日輪の部屋で談笑した。

日輪の元気が戻ったようなので、足取りも軽く部屋を出る。

間もなく消灯時刻だ。扉を閉めたところで、自然とため息が漏れた。

「……私しって、嫌きらな子こだわ」

「日輪に嫉妬しつとを覚えたか」

やはり、シグムントには筒抜けだった。

「私の知らないあいつを、ヒノワが知ってるんだと思うと……ね」

「気に病むことはない。自然な感情だ。それに、お互いさまだろう？」

「え……どういう意味？」

「君は日輪ひのわが知らない、雷真らいしんの武勇伝をいくつも知っている。君が『わかるわ』と言ったとき、日輪は今の君と同じような顔をしていた」

黙り込むシャルを見て、シグムントは首をひねった。

「それより心配すべきは、日輪と雷真が婚約しているという事実ではないか？」

「別に心配してないわ。あいつは『親が決めた』なんて理由で結婚したりしないもの」

「雷真を信じているのだな」

「なっ、こっ、ばっ——違うわよ！ お昼のチキンが蕎麦殻そばに化けるわよ!？」

蕎麦と言った瞬間、思わず笑いが漏れた。

「今日もいつも通りドタバタしてたけど——楽しかったわね。お蕎麦も意外と美味おいしかったし。

あいつといると退屈しないわ」

廊下を歩きながら、いつしか、シャルはほがらかな気分になっていた。

「この数か月ね、つらいこともいっぱいあって、殺されそうにもなって、客観的に見れば、す

ごくつらい時期だったと思うの。でも——」

普段誰だれにも見せない、素直な微笑ほほえみを浮かべる。

「楽しいことも、嬉しいことも、いっぱいあったわ。だって信じられる？ アンリと再会でき
て、一緒に暮らしてるのよ？ お父さまやお母さまや、お屋敷の人形たちと離れ離れになっ
てから、またこんな日がくるなんて思いもなかった」



シャルは控えめな胸に手を添え、祈るような気持ちで言った。

「こんな毎日が、ずっと続けばいいなっと思うわ」

「それは不可能だ」

シャルは驚いて相棒を見た。シグメントは飄々とした調子で、

「あとひと月もすれば、雷真はマグナスとの戦いに決着をつける。死んでいなければ——つまり戦いに勝ったのなら、彼はおそらく日本に戻る」

「それは、そうかも知れないけど、でも別に会えなくなるわけじゃ……」

「彼がマグナスに挑むということは、君やロキが彼に敗れているということだ。私が破壊されていてもおかしくはない」

「あいつは貴方を殺さないわ！」

「〈魔剣〉を侮るな、シャル」

いつも通り淡々とした言葉が、いつになく厳しく聞こえた。

「〈魔剣〉の力は強大だ。直撃すれば、夜々であっても消滅する。ゆえに、雷真も油断はすまい。一撃で私を行動不能に追い込もうとするだろう。確実に期すなら、心臓をつぶすしかあるまい。殺すか、殺されるかの勝負になる」

魔剣の魔術回路には「ある特性」があり——心臓とは不可分の存在になっている。回路のみを破壊するのは、まず不可能と言っている。

「それに、敵は雷真だけではない。ロキやほかの〈十三人〉は躊躇なく私を破壊するだろう。私を夜会で使うというのは、そういうことだ」

「考えも、しなかった……貴方が、いなくなっちゃうかもしれない……なんて」
ぼろり、と涙がこぼれて、頬ほをすべり落ちる。

想像しただけで胸がつぶれそうだった。シグムントは生まれたときから一緒にいた。死ぬまで一緒にいてくれるものだ、勝手に思い込んでいた。

「……これはすまなかった。楽しい気分にな水を差してしまったな。泣くな、シャル。そうならぬよう、君が私を支配するのだ」

シグムントは慰めるように言って——それから、苦笑した。

「まだまだ子どもだな。これでは私も、おいそれと破壊されるわけにはいかない」

「当たり前よ！ 絶対、死なせないわー」

「そう願おう」

シャルは涙をぬぐい、シグムントをぎゅつと抱きしめて、自室の方に歩き出した。

その背後で、爆発が起こった。

数秒か、あるいは数分か。シャルの記憶は一旦、そこで途切れる。
気がついたときには、廊下に横たわり、煙の中で咳き込んでいた。

「な……に、今の……？ 何が……起きたの……？」

「日輪の部屋だ、シャル！ 何かが炸裂した！」

「え……ヒノワ!?」

シャルは煙をかきわけ、もつれる足を叱咤して、日輪の部屋に駆け戻った。

6

学院の敷地内をうろうろしてみたが、夜々は見つからなかった。

演習場や講堂を見て回り、電話をかけて、さらに搜索。理学部の裏手にさしかかったとき、木立ちの奥に『知っている』魔力を感じた。

（こんな時間まで自主トレかよ……体力も戻ってねえくせに）

雷真は少し迷ったが、話しておきたいこともあったので、そちらに足を向けた。
闇の中、ほんやり青白い光が見える。

真珠色の髪が魔力の光を反射して、幻想的な輝きを放っていた。

月明かりの中、ロキは赤い瞳で雷真を見て、ふふんとせせら笑った。

「一人前に悩んでいるような顔をするな。貴様は猪突猛進だけが取り柄だろう」

「それ誉めてねえよな!? 取り柄ならさつき、もつといういろいろ言ってもらったぞ!」

「何の用だ。……話があるんだらう?」

さすが、察してくれている。雷真は意を決して口を開いた。

「夜会のことなんだ。ロキ、おまえさ——〈魔剣〉の対抗策、あるんだろ?」

「貴様こそ、隠しているんじゃないか?」

「……俺には、ある」

「そうか。オレにもある」

すんなり認める。そうだろうとは思っていたが、肯定されると疑問も生じる。

「じゃあ、なぜ使わないんだ？」

「貴様は、なぜだ？」

「俺は……オルガの言い分もつともだと思う。俺が逆の立場なら、徒党を組んでる連中に挑むのは骨だしな。だが、それだけじゃなくて……都合がいいんだ」

ロキはそつと魔力の集中を解き、無言で続きをうながした。

「今の俺じゃ、マグナスには勝てない。俺には力が必要だ。もつと、圧倒的な力が。実戦で得るものはこちらが多いが……〈十三人〉^{ワイスツン}が夜会を停滞させてくれりゃ」

「魔王グリゼルダの指導を受けられる、か」

それもある。つい先ほどまで、それが最大の理由だった。

だが、今は――

雷真の第六感が、ほとんど確信していた。

日輪の周囲に、不穏な気配が満ちている。

何か致命的なできごとが、日輪を襲う予感がある。

夜会を停滞させている限り、日輪の周辺に気を配れる。迂闊に戦闘状態に突入し、怪我でもしようものなら、日輪を護る余裕がなくなるかもしれない。

見透かしているのか、ロキは厳しい目を雷真に向けた。

「貴様が動かないつもりなら、オレもしばらくは傍観してやる。だが、オルガは危険な女だ。」

「群雄割拠」なんて表向きのイメージは欺瞞ぎまんかもしれない。オレたちをつぶす、上手い策があるのかもしれない。早めに倒した方が利口だ。そもそも——貴様が少しばかり力をつけたところで、この先の数的不利を退けられるか？」

「だから、それはさ」

雷真はちよつと照れながら、そつぽを向いて言った。

「いざとなれば、おまえがいるだろ。フレイも、ラビたちも」

ロキは面食らったようだ。それから、ふんと鼻であしらい、

「何なら貴様がオルガと手を組んでもいいぞ？ オレがねじ伏せてやる。マグナスを倒し、魔王ママンになるのはこのオレだ」

「……へっ、冗談。マグナスとは俺おれがやる」

「銀河級バカが、このオレに勝てるつもりか？」

「ああそうだよ星雲級バカ。おまえは棄権きけんして姉ちゃんとピクニックにでも行け」

「ふざけるな暗黒物質バカ。貴様こそイザナギプリンセスと結婚して極東に帰れ」

「な!? 何で婚約のことまで知ってんだよ亜空間バカ！」

「学院中に聞こえてるんだよ異次元バカ！」

互いに罵り合いながら、別れる。

悪口を言い合ったはずなのに、雷真の心は不思議と軽くなっていた。

（ありがとよ、ロキ）

足取りも軽く、一旦トータス寮にいったん戻ろうとした、そのとき——

雷真の鋭敏な聴覚が爆発音をとらえた。

「この方向——グリフォン女子寮か！」

それこそ爆発しそうなくらい、心臓が暴れている。雷真は恐怖という名の燃料を推進力に変え、全速力でグリフォン女子寮を目指した。

女子寮からは煙が上がっていた。火災……というほどではないが、はや騒ぎが起きている。

雷真は白い壁を蹴り、念動を駆使して樹上に跳び上がった。

念を凝らし、煙の奥を〈霊視〉する。かつてはおぼつかなかったことが、グリゼルダの指導で自然とできるようになっている。

日輪は——無事だ！

気が抜けて、樹から落ちそうになる。部屋は半壊し、クロゼットが焦げ、ドアは完全に吹き飛んでいる。だが、日輪に目立った外傷はない。

シャルが駆け込んできて、泣きながら日輪にしがみついた。どちらかと言えば、日輪の方がしっかりしている。シャルをなだめ、背中をさすってやる。

……これで間違いない。やはり、日輪は誰かに狙われている。

「雷真！ きたよ！」

突然、かさつと頭上の枝が動き、小紫が逆さまに顔を出した。

「……悪いな、呼び出しちまって。実は、日輪の周辺を探って欲しいんだ」

小紫は女子寮を振り向き、「うわあ……」と言った。

「雷真……さすがに感心しないよ。女子寮をのぞいて欲しい、なんて」

「違う！ 探って欲しいのは日輪の（敵）だ！ なるべく気付かれないように頼みたいんだが——できるか？」

「うーん……いざなぎさまが相手だからね……でも、頑張ってみるよ」

ありがたい。雷真は小紫のはつぺたを撫でながら、

「硝子しよこさんに頼んで、日本の方も探らせて欲しい。何かわかるかも知れない」

「いざなぎさまのことだね？ でも、たぶん時間がかかるよ？」

「まあ、地球の反対側だからな。それでも、手遅れになる前に頼む」

「おっけー。お願いしてみる！」

小紫が枝の中に引つ込む。枝が揺れ、枯れ葉が一斉に散った。

小紫と別れると、雷真は女子寮を離れ、林の中を引き返した。

不審な気配を探ってみるが——当然、何も見つからなかった。そもそも、雷真が簡単に見つ

けられるような敵なら、昴すばるや六連むつる、そして日輪が把握しているだろう。

落ち着かない気分をどうにか落ち着け、今夜のところは寮に戻る。

自分の部屋に戻ってみると、先に夜々よよが帰ってきていた。

とつくに寝巻きに着替えて、自分のベッドに潜り込んでいる。どうやら起きているようだが、頑としてこちらを向こうとしない。ふてくされているらしい。

夜々がこんな態度を取るのは久しぶりだ。だが、こうして部屋に戻ってきている以上、仲直りできるのも時間の問題だろう。

雷真は心の中で「おやすみ」を言って、そっと明かりを消した。

だが、雷真が考えていた以上に、日輪の〈敵〉は手強かった。

——何の手がかりも得られないまま、二週間が過ぎてしまうほどに。

一〇月第四週。秋はいよいよ深まり、冬の足音が聞こえ始めた。

肌を切る風は痛いほどで、湿った冷気が市街全域に満ちている。

この二週間、グリゼルダの個人授業を受けるかたわら、雷真は小紫とともに日輪の周辺を探り続けていた。そうしてわかったことは、日輪が誰かの脅迫を受けているということ。日輪は

『夜会を棄権しろ』と脅され続けていた。

いや、脅迫は口ばかりではない。毒針や爆発物など、トラップまで仕掛けられていた。昂の式神が壊すこともあれば、雷真と小紫が撤去することもあった。

敵は日輪が後援を失ったと知って、行動を起こしたと思われる。普通に考えれば、犯人は夜会の参加者——ということになるのだが。

敵は相当の凄腕だ。いざなぎ流の陰陽師が三人、雷真と小紫が総力をあげてなお、正体がつかめない。夜会の参加者ならば、トップランカーと見て間違いない。

雷真の焦りは最高潮に達している。ありきたりのトラップで、あの三人が——日輪が殺されることはないと思うが……それでも、万が一ということがある。

そして、その〈運命の日〉。

ぞっとするような寒気を感じて、雷真はいつもより一時間以上早く目が覚めた。

まだ外は薄暗い。夜明け前の冷え込みが、室内をひんやり湿らせている。

かすかな足音が近付いてきて——雷真の部屋の前で止まった。

雷真は音もなくベッドを抜け出し、ドアの様子をうかがう。夜々^{ヤヤ}を起こそうと、魔力を練つたとき、控えめなノックが響いた。

——敵ではない？

少なくとも、敵意は感じない。雷真は覚悟を決め、ドアを開けた。

うすら寒い廊下に立っていたのは、ひとりの男子学生だった。肌が浅黒く、瞳^{ひとみ}が黒い。四回生らしい大人びた風貌^{ふうぼう}だが、その瞳は理想に燃え、少年のようにまっすぐだ。

「朝早くにすまない。ライシン・アカバネ、君に話がある」

「……あんたは」

知っている。夜会の舞台で毎日顔を合わせている。

高まる警戒心をおもてに出さず、雷真は軽い口調でその名を呼んだ。

「口をきくのは初めてだな。アスラ・オーエン」

夜会〈第二位〉。登録コード〈三千世界天子〉——アスラだった。

Chapter 4 我欲の聖塔

1

早朝、一限の講義が始まる前、オルガは大講堂の執務室にいた。

「辛気臭い顔だな、オルガ」

テーブルの上で赤い仔竜——トールがつぶやく。トールは尾を両手で抱え込み、仔猫のように丸まって、うろこを舐めながら言った。

「すべておまえの目論見通りだろう。なぜそんな顔をする？」

「目論みとは違うからさ」

「どう違う？ おまえの望み通り、夜会は群雄割拠になってきたぜ？」

「意地悪を言うな。あれは〈十三人〉をたきつける口実だ」

雷真はほかの〈十三人〉にとっても脅威のはずだ。オルガが誘導するまでもなく、自然と共同戦線が張られる——そんなシナリオを描いていたのだが。

マグナスと〈下から一番目〉、そしてシャルをのぞき、〈十三人〉の自主降格は済んだ。それなのに、夜会は驚くほど停滞している。アスラもソーネチカも、積極的に戦端を開くつもりはないようだ。

「ソーネチカって女は何をしてるんだ？ 仲間を増やすでもなし」

「形勢を見極めているのさ。ソーネチカは気高く勇猛、激しやすいところもあるが、同時に優れた戦術眼を持っている。女帝と呼ばれる所以だ」

「ほう。だったら、目下の標的はライシンと、インド人の一味だな？」

「アスラか……」

オルガは再びため息をついた。そのアスラこそが頭痛のタネだ。

アスラは〈手袋持ち〉ゴントレットに働きかけ、次々と傘下さんかに組み入れているらしい。

これでは完全な三つ巴みつどもえ。オルガとアスラ、そして雷真——この三つ巴がどう決着するかで、〈円卓戦争〉の趨勢は決まってしまうような気配だ。もちろん、三方ともが疲弊すれば、ソーネチカか、ほかの誰かが横から勝利をかつさう。

ひたいを押さえて考え込む。こんなとき、アリスがいてくれれば、またぞろ小汚い手を思いついてくれると思うのだが。彼女は雲隠れしたままだ。

「……やはり、小細工は苦手だな。天は自ら助くる者を助く、だ」

苦笑。そして、自嘲混じりのはかない微笑み。

「私は魔王になる。ならなければならない。それが唯一、私という人間が生きる意義だ。そのためならば、この手が血に染まることも怖れない。……怖れてはいけない」

「オルガお姉さまーっ！」

ノックもなく、ドロシーが飛び込んでくる。そのまま、意外な身軽さを発揮して、執務机に飛び乗った。逃げるツールを尻目に、べつたりとオルガにしなだれかかる。

「お会いしとうございました、お姉さま！」

「……相変わらずだな、ドロシー」

「僕らもいますよ」

ドアの前から明るい声がかかる。金髪をなびかせ、爽やかに笑っているのはゼカロス弟。その背後に、陰気な空気をまとうゼカロス兄もいる。

「おはよう、二人とも。講義前にすまないな」

「いや、気遣いは無用だぜ——じゃない、『どうぞお気遣いなく学生総代』」

芝居っぽく言い直し、最後の一人が入ってくる。

執行部議長セドリツク。相貌は本人と寸分違わない。しかし、もともと本人とは醸し出す雰囲気、野性味、迫力がまるで違う。ポニーと軍馬くらい違う。

「僕ら夜会参加者は講義の出席を免除されています。そうでしょう？」

「……そうだったな。呼び出したのはほかでもない。君たちに相談したいことがあるんだ。いや——相談というより〈頼みごと〉だな」

執務机を離れ、一同と同じ高さのソファに座る。

「既に聞き及んでいることと思うが、アスラ一派はどんどん数を増やしている。先日、一八位までを傘下に入れたそうだ」

「一八位って、まだ参加前じゃないですか？」

ゼカロス弟があきれたように口を挟む。オルガはうなずいた。

「それはきついですね。一方こちらは、ここにいるので全員ですからね」

「増やせばいいではありませんの？ お姉さまがひと言おっしゃってくださいれば」

「それは下策ですよ、ドロシーさん。何かと悪評が立ってしまします」

「私はお姉さまに話してるの！ 引っ込んで弟！」

「ちょっと、こっちの軍備を〈十三人〉で固めすぎましたかね？」

ゼカルロス弟は肩をすくめ、皮肉めいた笑みを一同に向けた。

「〈十三人〉^{ラウンズ}を出し抜くのは至難の業^{わざ}です。自分が捨て駒^{こま}にされるとわかっていて、僕らに協力したい人はいないでしょうし。アスラさんのご機嫌を取って、〈新機関〉^{ノヴァ・オルガスム}とやらのメンバーにおさまった方が利口です」

「何よ。アスラが邪魔なら、そっちを先につぶせばいいじゃない」

「ドロシーさんって、思ってた以上にバカですね」

「なっ——地獄に墮^おとされたいの!」

「俺^{おれ}たちがアスラに突つかかっていけば」

それまで黙っていたゼカルロス兄が、ぼそりと言った。

びくっと驚くドロシーに冷やかな視線を投げつけ、続きを言う。

「ライシン一派に格好の隙^{すき}を与えることになる」

オルガは感心した。無口で無愛想だが、戦いに関しては冷静な判断ができるようだ。

そう、仮に取り巻きが烏合^{うごう}の衆^{しゅう}だとしても、アスラは本当の実力者だ。戦いはすぐには決着しない。その隙に、側面^{わくめん}を雷^{らい}真^{しん}とロキに突かれでもしたら——

「じゃあ、先にライシンをぶっ倒せばいいじゃない！」

「今度はアスラさんがからんできますよ。それに、たとえ横槍^{よこさや}が入らなかったとしても、確実

にこちらの戦力は殺がれます。頭の弱い人が脱落したり」

「くう~~~~~それが私だって言いたいわけ!?」

「安心してください。皮肉が通じる程度には賢いですよ」

「この……っ!」

「彼の言う通りだ」

「お姉さま!?」がーん!

「……いや、そこじゃない。戦力が殺がれるという話だ」

そう、オルガの悩みもそこにある。

このままずるずるとにらみ合っていれば、アスラの勢力はさらに拡大していくだろう。かと言って、オルガがどちらかに攻撃を加えれば、傍観していた勢力が漁夫の利をさらい———それどころか、割り込んでくる可能性もある。いくらオルガでも、二軍と同時に争うのはさけたいところだ。

動かなければ不利になり、しかし動けば不利になる。

「戦いを起こすとすれば、混戦にならないくらい〈限定的〉な〈殲滅戦〉で、かつ戦力的損耗がゼロでなければならぬ。そこで私は考えたのだが」

オルガは反応をうかがうように、ゆったりと一同を見回した。

セドリツクが不敵な笑みを浮かべ、楽しむような口調で訊く。

「何を考えたんです、学生総代さん?」

「難攻不落の要塞を建造しよう」

そして、オルガは考えを開陳した。

2

「悪いな。あんたの口に合うような、立派な茶っ葉はないんだが……」

とりあえずアスラを室内に入れ、雷真はアスラに茶を淹れた。ちなみに夜々は、寝起きの顔をほかの男に見られたくないとかで、部屋の奥に隠れてしまっている。

アスラは湯氣を立てるカップを口に運び、

「いや、美味い。僕の口には十分合うよ」

真剣な目をして、そう言った。……皮肉を言っている感じはしない。

（そういや、だいぶ前、こいつの生い立ちをシャルに聞いたな。ええと……）
記憶を引っくり返し、情報を引き出す。

「そうだ、あんたは確か、英国インド領——」

あわてて黙る。植民地の出身だ、などと、軽々しく言っているわけがない。

だが、アスラは怒りもせず、しかし笑いもせず、淡々と言った。

「そう、僕は英国インド領の出身だ。貧しい家で生まれ、汚い町で育った」

「だが、今じゃ総督府高官殿のご子息だろ。俺から見れば、雲の上の人だよ」

アスラは黙った。目を閉じ、ゆっくりと呼吸する。

瞑想を始めたようにも見えるが、そんなわけではない。——激情に耐えている？

雷真は油断なく相手を観察する。日輪を狙う者が夜会にまぎれ込んでいるかもしれないのだ。このタイミングでアスラが接触してきたのは、果たして偶然か……？

「僕の同志になってくれ」

いきなり、アスラがそう言った。何の前フリもなかったので、雷真は面食らった。

「はあ？ 同志って……あんたの仲間になれってことか？」

「世界は今、列強の思惑に揺さぶられている」

迂遠な返答。疑問を差し挟む暇を与えず、たたみかけるように言葉を続ける。

「列強の利害は対立している。富める者はその富を維持せんがため、さらに大きな戦いに突き進む。——世界が置かれたこの状況を、君は是とするのか？」

アスラはまっすぐ雷真を見据え、気高さを感じさせる声で言った。

「僕はそれを是としない。争いがひいては人類全体の利益となる？ そんなものは強者の詭弁——強者に都合のいい〈迷信〉だ。涙をのむのは力なき大衆であり、虐げられるのは常に弱者。

他人の犠牲の上に成り立つ繁栄など、そもそも人道に背いている」

呆気にとられる雷真に、情熱的な眼差しを向ける。

「僕はその連鎖を食い止めたい。そのために、君の力を貸して欲しい」

雷真はしばし呆然とアスラを見つめ——そして、返事をした。

「断る」

アスラの瞳に失望の色がにじむ。その失望を隠し、アスラは冷静な声でたずねた。

「それは残念だ。……理由を聞いてもいいか？」

「あんたの考えは立派だ。正直、賛同してると言っている」

「だったら！」

「逸るなよ。はっきり言うが、俺はそんな綺麗な人間じゃないんだ」

「だが君は、これまでも多くの人間を救ってきただろう？」

——調べていたのか。アスラは雷真が経た、これまでの戦いを列挙した。魔術喰い騒動、Dワークスの不法行為、十字架騎士団の不正、黒太子の叛逆などなど。

「違う。それは全部、俺のためだった。俺が何のために夜会に出たか、理由を聞けば幻滅するぜ？ 俺は自分のことしか考えないし、力で道理をねじ曲げる側の人間だ」

「……いや、君は思っていた以上に清廉な人間だよ。僕を利用しない」

説得をあきらめたようだ。アスラは立ち上がり、ドアへと向かった。

「いずれ、夜会でつぶし合おう」

「ああ。オルガにやられてなければな」

アスラはドアを開け、出て行くこうとして、足を止めた。

「……僕も君が思うほど立派な人間じゃない。だから、これは僕の羞恥心が言わせたことだと思ってる」

「羞恥心……？ 何だ？」

「セドリック・グランビルには気をつけろ」

漆黒の瞳に、ほんの一瞬、鈍い光が宿った。

「……ありがたいご忠告だが、とくに気をつけてるつもりだ」

「ならば、いい」

アスラは背を向け、今度は振り返らずに、暗い廊下を歩いて行った。

3

午前中の講義が終わり、昼休み。落ち葉で埋め尽くされた道を、シャルと日輪ひのわが並んで歩いていた。中央食堂へと向かう途中だ。

「——何かしら。あの人ばかり」

通りの向こうを示すシャル。学生が数十人、何やら集まっている。

「演説……でしょうか？ 辻説法つじせっぽうみたいなものが聞こえますけど……」

そちらに近付くと、日輪の言った通り、演説のようなものが聞こえてきた。

「二〇世紀を破滅の世紀にしているのか！ 僕たちは今こそ手を携え、ともに新しい世紀を築かねばならない。そのための力を、どうか僕に貸してくれ！」

輪の中心にいるのは、浅黒い肌の男子学生——アスラだった。

「——シャルロットさま！ この人ばかり、ザントレット〈手袋持ち〉ばかりです！」

日輪が聴衆の手を示す。半数近くがシルクの手袋をはめていた。

アスラは聴衆に向かって、さらに熱弁をふるった。

「君たちにもそれぞれに夢が、あるいは野心があつて夜会やかいに臨むはずだ。その望みを僕は叶かなえたい。僕が——僕たちが築く〈新機関ノヴム・オルガズム〉によって！」

聞き覚えのない単語に、学生たちが顔を見合わせる。

「新機関^{ワイスマン}つてのは、おまえが立ち上げる魔術結社か？ 具体的に何をするんだ？」

「僕は魔王^{ワイスマン}の権威をみんなと共有したいと思う。君が禁忌の研究を望むなら、〈新機関〉において共になそう。名声を求めるなら、〈新機関〉においてそれを為そう。そのための協力を、僕は惜しまない！」

学生たちの空気が変わる。アスラの熱気が伝染したように。

魔術師協会^{ネクター}は〈教父^{フアサークタイム}〉を頂点とするピラミッド型のヒエラルキーを持つ。その上、各国の魔術師を統制し、自由を制限する立場だ。

一方、アスラは魔王^{ワイスマン}の庇護^{ひご}のもと、好きにやらせてくれると言っている。

「僕たちは皆、力を持って生まれた者だ。その力を、平和のために捧げよう^{ささげよう}。さあ、僕に力を貸してくれる者はいないか？」

「俺^{おれ}は手を貸すぜ。面白そうだし！」

一人の男子学生が手をあげる。それが呼び水となって、同調するものが相次いだ。

「詳しい話を聞かせてくれ」「機関の運営プランを具体的に聞かせろ！」

次々と賛同者が出る。シャルは日輪^{ワグネル}の手を引いて、そそくさと輪を離れた。

「アスラのやつ、ついに公然と自分の旗を掲げたってわけね」

日輪は心配そうにシャルを見上げた。

「では、ここからいよいよ〈群雄割拠^{ゴントレゾット}〉に……？」

「そうね、舞台にはもう〈手袋持ち^{ガントレット}〉が大勢いる。ライシンたちから挑戦者^{もくしやう}を護る、っていう、

当初の目的は果たせただけです。ここからはオルガやアスラが庇護者^{ひごしゃ}となつて、自分の軍団を組織するターンだわ。……どう思う、シグムント？」

シャルは帽子の上に視線をやり、相棒の意見を訊いた。

「アスラは侮れん男だな。最初に賛成したのは、おそらくサクラだ」

サクラと聞いて、日輪が目を丸くした。根が清純なので、思案の外だったようだ。

「で、では……密かに同志を募っていたのでしょうか……？」

「そうね。これで勢力図が見えたんじゃない？ オルガと仲がいいのは、ゼカルロス兄弟とセドリック、そして《死者の王》^{ノスフェクト}。《女帝》は単独行動だから——」

「まさか……残りの方は全員、アスラさまの側^{がわ}に!?」

「可能性はあるわね。この先参加する連中も、こぞアスラにつくかも知れないわ」

「いけません！ 早く雷真さまに知らせないと——」

言いかけた言葉をのみ込んで、日輪は意気消沈した。

「ヒノワ、あれからライシンのところには行っていないの？」

「……はい」

「だと思った。貴女たち^{あなた}、何となくごちないもの。先に言っておくけど、あいつは貴女のこゝと、迷惑だなんて思っていないわよ？」

「雷真さまの全部をわかつてるような言い方はしないでください！」

思わず怒鳴ってしまう。日輪ははっとして、真っ青^{まがせ}になった。

「す……すみません！ わたくし、どうかして……っ」

逃げ出そうとする。その手をつかみ、シャルは日輪を引き止めた。

「謝ることないわ。私だって、きつとおんなじことを考えちゃうと思うから」

「おんなじ……それはどういう……まさか、シャルロットさまも、雷真さまを!?」

「ちちち違うわよ!? そうじゃなくって、その、あの……とにかく! 貴女はあいつのつ——妻になりたいんでしょう? だったら、あいつと正面から向き合いなさい!」

その言葉は、日輪の悩みを見事に打ち砕いたようだ。

こしばらく生氣のなかった瞳に、ほつと情熱の炎が燃え上がる。

「……ありがとうございます、シャルロットさま」

「え? 何? えっ?」

「わたくし、己おのれの自分を思い出しました! わたくしは雷真さまの妻——良人おつとから逃げていては、よき妻とは言えません。離縁状を直に突じやきつけられるそのときまで、わたくしはわたくしらしくおります! では、ごきげんよう!」

「あ、ちよ、ヒノワ——」

たたたつと駆け出す日輪。明らかに意気軒昂いきけんこう、すっかり元気を取り戻している。

シャルは急に不安になった。雷真は「親が決めたから」なんていう理由で結婚はしない。だが、日輪が本気で迫れば、ころつと参つてしまう可能性はある。

（私は……このままでいいの?）

シャルは激しくかぶりを振った。

（バカなことを! 私はそんな恋愛なんて、どうでも……どうでもいいの!）

ぶんぶんぶん。振り落とされたシグムントが、ばさばさと羽ばたく。

「どうした、シャル。体温が見る見る上がっていくぞ」

「な、何でもないわよ！ そんなことより——」

じつとシグムントを見つめ、シャルは熱っぽく言った。

「貴方あなたに相談があるの！ とても大事なこと！」

4

午後六時、夜会会場のゲート前にて。

「ライシン……遅いわね」

シャルはいつも通りシグムントを頭に乗せ、日輪ひのわと並んで立っていた。

日没とともに気温が下がり、震えがくるほど寒い。その場で足踏みをしてしまう。

「何モタついとんのや、あのド阿呆あほう！」

日輪の後ろで、昴すばるが吐き捨てるように言った。シャルはムツとして振り向いたが、昴が心配

そうな顔をしているのに気付き、怒るところか笑ってしまった。

昴はたぶん、雷真らいしんがずっと何かしていたことを察している。

「シャルロットさま？ どうかありませんでした？」

「何でもないわ。ただ——あの二人、実はけっこう仲がいいのかと思ってね」

日輪は何のことかわからなかったようで、頭の上に疑問符を浮かべた。

「雷真の阿呆はしゃーないとして、あいつまで何をモタモタしとん——おおつ、ようやくときたわ。六連、ここや！」

ガス灯の下に六連の姿を見つけ、昴が大きく手を振った。

一瞬、おやつと思う。六連は今、林の奥から現れたように見えたが……？

六連はへらつと笑つて、日輪に頭を下げた。

「すみません、お嬢。遅おなりました」

「お嬢にいらん心配さすな！ おまえ、試合に出んのやろ！」

上位組の降格が相次ぎ、なかなか順番が回つてこなかったのだが、昨日ようやく、二八位の六連も降格を果たしていた。

「文句言うてないで、昴も自主降格しはったらええやないですか。一七位やのに」

「阿呆ぬかせ！ 何で俺が雷真の手助けなんぞせなあかんのや！」

「そんなん言うて、ほんまは雷真はんを買おたはるくせに」

「誰がや阿呆！ ああもう、そんなんどうでもええわ。おまえどこ行つとってん？」

「あははー、こないだ知り合つたカワイコちゃんと、デートの約束しててん」

「かーつ、上手いことやつとんなおまえ！」

このこの、と肘で突付く昴。日輪は二人のやり取りには興味がないらしく、じつと林道をにらみ、雷真がやってくるのを待っていた。

そうこうするうちに時間が過ぎ、ようやく待ち人が現れた。

雷真が夜々をともなつて歩いてくる。日輪に気付いて珍しくまごついたが、夜々にどんと背

中を押され、仕方なく近付いてきた。

「よ、よう、日輪」

「は、はい、雷真さま……」

そろって沈黙。ぎこちないにもほどがある。

……無理もない。日輪は先日^{ふいに}の爆発を——式神^{しきがみ}の暴走だと言っていた——雷真には秘密にしているらしい。雷真は雷真で、密かに日輪^{ひのわ}周辺を嗅ぎ回っているようだ。

相談すればいいものを。お互いに気を遣いすぎだ。不器用にもほどがある。

「ドグサレ！」

——と、不意に刺すような言葉が飛んできた。

一同が振り向く。林道から学生の一団——オルガの軍勢がやってきた。

先頭を歩いているのは、一〇歳くらいの幼い少女。

ドクロのついた杖^{つえ}を持ち、喪服のようなドレスを着ている。先ほどの罵声^{ののしり}は彼女のものらしい。その特徴的すぎる容姿に、シャルはもちろん見覚えがあった。

（ドロシー・マクガフィン……〈死者^{ノム・エント}の王〉！）

ドロシーはすたすたと歩いてきて、不良のように雷真を睨^{にら}め上げた。

「あんたのことよ、このドグサレばい菌！」

「……そこまでひでえ言い方されたのは久しぶりだな。俺^{おれ}が何したよ？」

「とほけないで！ 私のオルガお姉さまを汚したくせに——っ！」

「してねえよ！ 夜々^{やや}の前で妙なこと言わないでくれ！」

早速どよどよと、夜々から暗雲が発生する。

「よせ、ドロシー。戦いの前に余計な体力を使うな」

相手の背後から威嚇のある声がかかる。無論、オルガの声だった。

今日も白いコートを身にまとい、赤い仔竜こりゅうを従したがえている。

いつもの調子を取り戻し、雷真はオルガに軽口を叩たたいた。

「よう、学生総代。おそろいでどうした？ 決着をつける気になったのか？」

「そうだ」

軽口に真顔で返されて、空気が一気に緊迫した。

シャルは予感よかんが的中したのを悟った。一同を代表して、たずねる。

「決着をつけるってどういう意味？」

「私たちとゲームをしないか？ 一対一で順に戦い、勝ち星の多い方が勝ち。勝った方は全員

「無傷で」勝ち進み、負けた方は全員が参加資格を失う」

「つまり……〈団体戦〉がしたいわけ!?」

「だが、どうやる？」

冷静な声が割り込む。

いつの間にか、オルガたちのさらに向こう、林道の中にロキとフレイがいた。

「オレたちが事を構えて、アスラが黙って見ているはずもない」

「だとしても、黙って見物させておけばいいさ」

「——何か考えがあるのか？」

「なくは、ない」

「バカな男！ お姉さまが考えもなしにこんな提案すると思ってるの？」

ドロシーが小馬鹿にしたような顔で突っかかっている。ロキは目も合わせず、

「その考えとやらを訊いている。少し黙っている。オレは子どもは好かない」

「こ、子ども!? このドグサレ二号がーっ！」

つかみかかろうとするドロシーを、襟首をつかみ上げてオルガが止めた。

ぶらーん、と仔猫のように吊るされるドロシー。オルガはドロシーをぶらぶら揺らしながら、ばさりとマントをひるがえした。

「方法に関しては見せた方が早いだろうな。舞台の上で説明しよう」

ぞくぞくと寒気がして、シャルは自分自身を抱きしめた。

雷真やロキは感じているのだろうか？ 二人はいつも通り平気そうな顔で、すたすたとオルガの後についていく。夜々とフレイはもちろん二人にならう。日輪も負けじと続くので、仕方なく、シャルもコロセウムの中へ入った。

5

（オルガのやつ、一体何を考えたんだ？）

入場ゲートをくぐりながら、雷真は考えを巡らせた。

もし日輪を脅迫していたのがオルガなら——今日、何か仕掛けてくるのでは？

雷真は油断なく、オルガの動きに神経をとがらせる。日輪周辺は六連が、観客席は昂が見張っているはずだ。それでも用心に越したことはない。

舞台上には既にアスラの軍勢が集まっていた。舞台の隅に椅子だの床机だのを持ち込み、アスラを護るように入り囲んで、好き勝手にくつろいでいる。

ここ二週間ほど動きがなかったため、客席には空席が目立つ。だが、雷真たちがオルガたちと連れ立って入ってくると、客席がざわめき、全体に緊張が走った。

ソーネチカが火のように激しい視線を、アスラが冷淡な視線をオルガに向ける。

二人の視線を意にも介さず、オルガはゼカルロス兄に合図を送った。

「では、頼む」

ゼカルロス兄が魔力を高め、右腕を振りかざす。銀のブレスレットが外れ、見る見る形を変えて、小さな人間の姿になった。

（魔法銀——あれは自動人形だったのか）

以前倒した（黒鉄結晶）アーバインが同じような自動人形を扱っていた。だが、こちらはアーバインのメタルゴーレムよりはるかに小さく、見た目も華奢だ。

小妖精のような金属人形は、ちょこちょこ可愛らしく踊り始めた。

巨大な魔力が地下で炸裂し、舞台の床が激しく波打つ。

「気をつけて！ 四大元素系——（土）の魔術だわ！」

というシャルの警告をかき消して、ずがんと爆音が響き渡った。

舞台が垂直に隆起して、数十メートルもの巨大な塔がそそり立つ。

重要機巧保管施設（ロッカー）にシルエットが似ている。だが、意匠はもっと古めかしい。照明を浴びた外壁は無機質で、岩を積み上げたように見える。バベルの塔——ジググラトを想起させる外観だ。

雷真らいしんはあんぐりと大口を開け、その威容に見入った。

魔術で作り出したのか……これを。アーパインは金属のボディを巧みに変形させていたが、こちらの魔術はそれよりも応用範囲が広いことになる。

魔術の威力を目の当たりにして、客席が静まり返った。

珍しくロキも感嘆したようだ。声を潜め、雷真の耳元でつぶやく。

「四大元素——モチーフとしては一般的だが、桁違けたちがいの能力だ。見ろ、あれだけの魔力を使つて、あいつには全然、疲労の色がない」

ロキの言葉通り、ゼカルロス兄は息も切らしていない。

「あの先輩、すげえ魔力を身に秘めてる……ってことか？」

「今のは人間の限界を超えていた。——もつとも、それはこちらも同じだが」

「だな。化け物なんざ、今まで何度も見てきたぜ」

学院長やマグナス、グリゼルダにライコネン。皆、人間の限界を超越していた。

雷真もまた（紅翼陣こうよくじん）によって、人間の「瞬間最大風速」を超えられる。

敵が桁違いに厄介なのは間違いないが、敗北を認める理由にはならない。

雷真は塔をあごでしゃくり、軽い調子でオルガに問いかけた。

「で？ こんなものを建てて、何をしようってんだ？」

「外部からではわからんが、この塔は五層からなっている」

オルガは塔を振り仰ぎ、淡々と説明した。

「ひとつのフロアはざっと二〇メートル四方。一対一で戦うには十分な広さだ」

「一対一……なるほど、本気で〈団体戦〉がやりたいんだな」

あちらはオルガ、ドロシー、セドリックにゼカルロス兄弟。丁度五人だ。

こちらまた、雷真、日輪、六連に、ロキとフレイで五人になる。

「一対一で五戦やるのか？」

「いや、勝ち抜きでやろう。各階で戦えるのはひとりだけ。階の番人を倒して、上の階にはつていくんだ。私は最上階で待つ。君たちの誰かが私を倒せば、途中で敗れた者も含め、君たち全員が参加資格を維持できる」

「権利喪失は〈団体戦〉が決着するまで保留……ってことだな。じゃあ、途中でこっちが全員やられちゃったら、それまでに何人倒していても——」

「こちらまた、ただの一人も参加資格を失わない」

雷真にもオルガの意図がわかってくる。総力戦でつぶし合えば、犠牲はさけられない。だが、この方式なら、全員が消えるか、全員が残るかのどちらかとなる。勝った側の戦力消耗はゼロだ。アスラ陣営を警戒してのことだろう。

とすると、この大仰な舞台装置は。

「なるほどな。この塔は、あっちの連中にチャチャ入れさせないための……」

「そう、要塞だ。これを破壊するのは容易ではないし、攻撃を受ければすぐに察知できる。こ

れは私たちと君たちの真剣勝負——この塔が外部から攻撃を受けた場合、私たちは一致団結して、部外者に対抗しようじゃないか？」

（上手いな……）

最初から「同盟を組んでアスラを潰そう」と言われたら、雷真は言下に断つただろう。だが、勝負の邪魔をする——そんな連中なら、組んでつぶすことに異議はない。その上、この方式なら、〈団体戦〉決着まで誰一人として〈参加資格〉を失わない。アスラが攻撃してきた場合、一〇人全員でアスラ陣営とやれるのだ。

魅力的な提案だが、果たしてロキが何と言うか……。

雷真は横目でロキを見た。ロキはオルガを見つめ、あつさりこう言った。

「いいだろう。楽ができそうだ」

——どうやら、フレイを護るのに都合がいいと踏んだようだ。

決して口には出さないが、ロキはフレイを最優先に動いている。このやり方なら、途中でフレイが負けても、ロキが失点を挽回できる。

そして、雷真にとつても同じ理由で都合がいい。一対一の戦いゆえに、戦いに参加していない限り、常に日輪をガードすることができる。

もつとも、試合中に日輪の命を狙えば、執行部が黙ってはいない……はずだが。

「面白そうじゃない。受けましょう」

シャルが腕組みをして、無駄に堂々と言った。雷真は半眼になって、

「いや……何でおまえが受けるんだよ？」

「そう、私も先ほどから気になっていたのだが」

オルガもシャルの方を向き、当然の疑問を口にした。

「君はどうして舞台にいる？ 参加者以外は舞台を降りろ」

「い、いいでしょう別に。私だって（十三人）だし。特等席で見たいじゃない？」

「だが――」

ちらりと執行部の審判に視線をやる。

審判たちは平然として突っ立っている。シャルを排除するような動きは見せない。

オルガは何かを察したようで、それ以上の追及はしなかった。

「まあいい。では君も中へどうぞ、シャルロット・プリュー」

「そうさせてもらうわ」

いっそ清々しいほど図々しく、シャルはオルガについていく。

そうして、一人とそれぞれの自動人形が塔へと歩き出したとき、最前列の席から昂（たか）げられた大声

が飛んできた。

「おい雷真！ お嬢に怪我（けが）さしたら、末代まで祟（たた）るえ！」

「わかってるよ！ 日輪（ひのわ）は俺（おれ）がちゃんと護（まも）る！」

「雷真さま――♡」きゅーんっ！

日輪の瞳（ひとみ）にハート形の光が入る。一方、夜々（やや）の瞳からはハイライトが消え、ざわざわと黒髪（くろかみ）がうねり始めた。

雷真はため息をついて、先導するオルガを追いかけた。

塔に踏み込む直前、執行部の学生がどやどやと舞台上上がってきた。

体格のいいゴーレムを連れている。ゴーレムたちは何やら鉄板のようなものを大量に担いでいて、工事現場よろしく、その場で何やら組み立て始めた。

「……何だ、ありゃ？ 塔の外壁でも補強するのか？」

「いえ、あれは〈投影機〉です」

爽やかな笑顔（さわやか）を浮かべ、ゼカルロス弟が説明した。

「技術科から借りた、ちよつと面白い機械装置で。あの板はこんなふう——」

右手を差し向け、魔力を送る。その途端、板の表面に人間の顔が浮かび上がった。

「あ！ 雷真です！」

夜々が指差す。確かにそれは、驚く雷真の——巨大な顔だった。

「ルビー、エメラルド、サファイアの極小魔石をユニットとして、ずらつと大量に並べてあるんですよ。光学的刺激を変換して、あの板に投影することができんです。まあ、巨大な水晶玉（すいりゅう）とお考えください」

「もつとも、水晶玉や霊視に比べれば、荒い画像ではあるがね」

苦笑混じりにオルガが補足する。そのあいだも、ゴーレムたちは板の設置作業を続け、またたく間に巨大なパネルを作ってしまった。

「つまり、俺たちの戦いを外の連中にも見せるってわけだな？」

「その通りだ。正直なところ、アスラ陣営の者には見せたくないのだが——塔内部の状況がわからないのでは、観客が納得しないだろうからな」

夜会やかいは学生のパフォーマンスを見せつける場なのだから、当然の配慮とも言える。だが、おかげで安心材料が増えた。外から見えている以上、日輪を本当に〈暗殺〉するとは考えにくい。せいぜい、試合の進行を妨害する程度だろう。

ぞろぞろと塔の内部に入る。

中は静かで、思っていた以上に堅牢けんろうだった。戦いを妨害するには外壁を壊すしかないが、それには時間と魔力が必要だ。とりあえず、奇襲を受ける心配はない。

広さは十分で、天井までの高さも三メートル以上ある。夜々ややが跳んだり跳ねたりできるだけの、十分なスペースがあった。

フロアを見回しながら、雷真らいしんはオルガにたずねた。

「一対一でやる……のはいいとして、勝敗はどうつける？」

「手袋を奪う必要はない。相手に負けを認めさせればいい」

「だが、相手が強情きやうじやうだったら、なかなか難しいぜ」

「我々は栄えある王立機巧学院ロイヤルアカデミーの学徒、それも夜会やかいに招かれる〈手袋持ちゼントレット〉だ。どちらが勝つかなど、議論にもなるまいと思うが？」

「ま……それもそうか」

「夜会で禁止されている行為はもちろん禁止だ。それからもう二つ、別の敗北条件を加えさせてもらう」

鋭い視線を一同に走らせる。

「誰だれかが手を貸せば、貸された者も、貸した者も、その時点で敗北とする」

「上等だ。一対一の勝負だからな」

「そして、塔を破壊するのも禁止だ。これはアスラ陣営を阻む砦——多少の損壊はやむを得まいが、〈貫通〉する穴をあけた時点で敗北とする」

「それも了解だ。ほかには？」

「それだけだ」

「OK。それじゃ早速、先鋒戦と行こうぜ。オルガは最上階で待つと言ったよな？　じゃ、一階を護るのは誰なんだ？」

「俺だ」

ゼカルロス兄が睥睨するような視線をこちらに投げ、冷たい声で言った。

「今度はこちらが訊こう。最初に脱落したのは、誰だ？」

抜き身の真剣のような、凄み。気の弱いフレイがびくつとする。その愛犬ラビもまた、反射的に尾をまたに挟んだ。

四大元素系の強大な魔術を使う敵。間違いなく、凄腕の魔術師だ。この強敵を相手に、誰が出るか——

ややあって、自ら名乗り出たのは、意外な人物だった。

「オレが行こう」

機械人形ケルビムとともに、〈剣帝〉ロキが前に出た。



Chapter 5 饗宴

1

「それじゃ、ここからは学生総代に代わりまして、僕が案内役を務めます」

ゼカルロス弟がにこやかに挨拶した。あいさつ既にオルガとドロシー、セドリックは上のフロアに行っている。ここにいるオルガ陣営はこの兄弟だけだ。

「案内役と言っても、階段は一本道ですけどね。兄さんは根暗ですけど、迷路を作っちゃうほどの陰険さは持ち合わせていません」

「無駄口を叩くな。たた……相手は〈剣帝〉けんていでいいんだな？」

ゼカルロス兄がロキとにらみ合う。この状況が見えているのか、ぶ厚い壁越しに客席のざわめきが聞こえた。——無理もない。ロキは雷真らいしんより格上、こちらの陣営では〈最強〉の駒こまと言っている。そのロキが一番手出るといふのだ。

雷真はフレイの方をうかがった。フレイは黙っている。止める気はないらしい。

夜々ややが雷真にくつついて、ひそひそとささやいた。

「……大丈夫なんですか？ ロキさんを最初に出しちゃって」

「ま、ここはあいつに任せようぜ」

誰だれもが息を詰めて見守る中、ロキは自然体でケルビムに魔力を送った。

光点のような瞳が金属の小妖精に狙いをつける。翼状のパーツが開き、棘のような短剣が切り離された。

先制の射撃。だが、読まれている。短剣の射線上に土壁が生じた。

文字通り、一瞬で「生じた」。床から飛び出して短剣を阻む。

短剣はたやすく弾き飛ばされ、鼓膜に刺さるような、甲高い音を響かせた。

だが、それはロキが読んでいる。既にケルビムが間合いを詰めていた。

ブレードで土壁に斬りかかる。魔術回路（熱風操作）の効果で、標的表面に数千度の高熱が集中。岩だろうが金属だろうが溶断できる——はずだった。

（——斬れてない！）

刃が止まっている。よく見れば、超高速で土壁の表面が蠢き、刃を押し流している。熱が拡散し、一点に集中しないようだ。

「雷真！ 死角からきます！」

夜々が叫ぶ。言葉通り、ロキの後ろ、壁や天井が鋭い槍に変化し、銃弾を上回る速さでケルビムに降りそそいだ。その射線上には当然、ロキがいる。

ガガガッ、と轟音がして、鍾乳石のような石檜が隙間なく噛み合う。ケルビムは両手のブレードでしのいだが、ロキは石の中にのみ込まれてしまった。

「ロキ！ ロキーっ！」

半狂乱になるフレイ。思わずラビをけしかけそうになるのを、雷真が止めた。

「大丈夫だ。あいつがあれくらいで死ぬかよ」

ばきばきと石の檻に亀裂が走り、砕け落ちる。

ロキはその内部で、折れた石槍にもたれて立っていた。回避できないものだけを精密に砕き、檻の内部に安全地帯を確保したようだ。

反射神経や判断力もさることながら、その緻密な魔術操作には目を見張る。

「ちよつと！ 今のは危険すぎるわ！ 反則よ！」

シャルが抗議の声をあげた。ゼカルロス弟は肩をすくめて、

「——つて言われてますよ、兄さん？」

「すまないな。人形を狩るのに夢中で、使い手を巻き込んでしまったようだ」

「ふざけないで！ そんな白々しい言い訳が——」

「落ち着けよ、シャル。執行部の連中が判断することだ」

雷真は壁の向こうに耳を澄ました。

……何も聞こえない。今の行為が失格なら、違反を知らせるベルが鳴る。

「どうやら、アリみたいだな。相手がロキってことを考えりゃ、当然か」

「バカね、今のわからんのか？ 今のがアリなら、この塔自体が反則的よ！」

「ほう、《暴竜》は《ルール》に気付いたか」

ゼカルロス兄が初めてシャルに視線を向けた。シャルは気圧されたらしく、隠れるように雷真に身を寄せ、夜々と日輪の反感を買った。

「そう、この塔は俺の支配領域——入った時点で、そちらの負けだ」

小妖精がくると踊り出し、塔全体に魔力がみなぎった。

「――伏せろ！」

シャルと日輪の頭を抱え、壁際にしゃがみ込む。その頭上を、機銃掃射のごとき連撃が吹き抜けた。

棘皮動物の体表さながら、無数のトゲトゲが壁から飛び出し、ロキとケルビムを串刺しにしようとする。ケルビムの短剣が縦横無尽に飛び交って、槍を次々にへし折っていく。だが、槍は背後や真下、死角からも襲ってくるのだ。

「壁をあんなに變形させて――ルール違反じゃないの!？」

轟音に負けじと声を張り上げ、シャルがゼカロス弟に言う。同じく声を張り上げて、ゼカロス弟は笑顔で言い返した。

「『穴をあけたら』って話でしょう! 兄さんのアレで穴なんてあいてますか!？」

「ぐ……卑怯者ーっ!」

言い合っているうちに猛烈な粉塵が巻き起こり、視界が急速に悪くなる。

シャルは咳き込みながら、雷真の腕をぐいぐい引っ張った。

「何ぼさつとしてるのよ! このまま傍観してる気!？」

「はあ? つつても、これはロキの戦いだろ」

「悠長なこと言っていないでよ薄情者! この塔全体があいつの胎内――全方位から攻撃がくるんじゃ、かわしょうがないわ!」

「大丈夫だ。その程度のことはロキにもわかってる。そもそも――〈ルール〉を理解してねーのは、相手の方さ」

やがて、あれほど激しかった攻撃がやんだ。

熱が風を生み、立ち込めていた粉塵を吹き飛ばす。その奥で、ロキは何事もなかったかのようになり、涼しい顔で立っていた。

短剣が一二本、鯨の群れのように、ロキの周囲をゆつくり回っている。

「……〈剣の結界〉か」

ゼカルロス兄が短剣をにらみ、忌ま忌ましげにつぶやく。

「なるほど、結界の外からではこちらの攻撃は届かない。かと言って、足もとから狙えば術者を狙ったと非難される。ならば——内側からなら、どうだ？」

小妖精が液体のように姿を変え、そのまま床に潜り込んだ。

溶けて染み込むようなものだ。気配まで完全に消える。この塔全体が、あの自動人形と同じ

もの——ボディの一部——ゆえに、位置がつかめない！

次の瞬間、ロキのすぐ真後ろで、床がわずかに盛り上がった。

音もなく小妖精が這い出して、金属線のようなものを繰り出す。アーバインが見せたのとそっくりの技だ。ロキもろとも、金属線がケルビムを両断——

——することなく、ぶつんと断ち切られて、あさつての方向に飛んで行った。

高速の金属線を断ち切ったのは、短剣の一本だった。

ロキは膨大な魔力をケルビムに向けて放つ。ケルビムはただちに〈熱風操作〉を起動、各短剣の先端から凄まじい熱を噴出させた。

短剣六本が小妖精を取り囲み——

「この円はオレの支配領域。入った時点で、貴様の負けだ」

雷真の目には、強烈な閃光しか見えなかった。

短剣がそれぞれに動いた……のは間違いない。だが、見えているのは熱と金属の閃き、刹那に生み出された幾何学模様だけ。

わずか一秒もかからず、六本の短剣が燃え尽きて消える。

屋内で爆弾を炸裂させたような、途方もない爆音が鼓膜を揺さぶる。

シャルがふらふらと目を回しながら、朦朧とした声でつぶやいた。

「何よ……今の……相手の人形は……どこ？」

「消滅した」

主の疑問に、帽子の上のシグメントが答えた。

「焦げるどころか蒸発した。それほどの熱を生みながら、輻射熱すら感じさせなかった。まさしく〈結界〉——この世から隔絶された、異空間を生み出したに等しい」

その声はいつものように冷静だったが、かすかに、畏怖めいたものを含んでいた。

「あの領域に踏み込めば、さしもの〈金剛力〉も無事では済むまい」

シャルと夜々がそろって冷や汗を垂らす。雷真も同じ気分だった。これが〈剣の結界〉の真の効果——短剣による迎撃は、このための伏線に過ぎなかったのだ。

（やっぱ、やるな……おまえは！）

あれだけの攻撃を繰り出しながら、ロキは規定通り、塔の壁に傷もつけていない。超然とした横顔を憎たらしいと思う一方、なぜだか嬉しくなってくる。

ゼカルロス弟が制服を叩き、ほこりを払った。

「あっさり負けちゃったね、兄さん？」

兄に向かつて笑いかける。ゼカルロス兄はふん、とそっぽを向いた。

「それじゃ、負け犬の兄さんは放っておいて、上の階に行きましようか」

ゼカルロス弟は相変わらぬ笑顔で、フロアのすみ、上に向かう階段を示した。

雷真たちも彼に続き、そろそろと階段を上がる。

長い階段を上がりながら、シャルがひそひそ日輪にささやいた。

「一時はどうなることかと思ったけど、終わってみれば楽勝だったわね」

「……いえ」

日輪は言葉を濁す。こっそり表情を盗み見ると、日輪は遠慮がちに、そして心配そうにロキを見ていた。いざなぎ流は占術や祈禱も行う陰陽師——日輪の感知能力はシャルより優れている。その感覚が、本能が、見抜いているのだろう。

——ゼカルロス兄は本当の実力者だった。

無機物を超高硬度にまで一瞬で高める。思うがままに組成を変質させ、形状変化も自由自在。死角からロキを狙える地の利もあった。相手がフレイなら一瞬で敗北、日輪や六連も（魂籠め）する余裕を与えてもらえなかったかもしれない。

本当の強敵だったから、ロキが出ざるを得なかった。

そのことに気付いている観客が、どのくらいいるだろう？

そして、必ずしも（勝利）とは言えない。

ロキは平然と歩いているが、医務室で寝食をとにした雷真にはわかる。あれは激痛をこらえている顔だ。今の無茶な魔力収束で、フェニックス戦のダメージがぶり返したらしい。本来なら立っているのもやつとのはず——もう戦える状態ではない。

つまり、今のは実質的な〈相討ち〉。ロキという切り札を早くも失ってしまった。嫌な予感をおくびにも出さず、雷真もまた平然として階段を上がった。

2

次のフロアでは、喪服のような格好の、例の少女が待ち受けていた。

腕組みをして仁王立ち。ドクロのついた杖を持ち、雷真に殺気をぶつけてくる。

シャルが手帳を見ながら、張り詰めた声でつぶやいた。

「ドロシー・マクガフィン——侮れない相手よ」

「相変わらずマメな情報収集してるな。なら訊くが、あいつ、いくつだ？」

「私は一六よ！ しつつれーなこと本人の前で話してんじゃないわよドグサレー」

ごもつとも。素直に恐縮する一方、雷真は耳を疑った。

きー、と怒っている少女は顔立ちも体つきも幼く、一〇代半ばにはとても見えない。

ゼカルロス弟がロキを振り向き、確かめるように訊いた。

「自称一六歳のドロシーさんとは、〈剣帝〉さんが戦いますよね？」

「いや、ロキは交代だ」

ロキに代わって横から言う。ゼカルロス弟は意外そうな顔をした。

「選手交代ですか？ これは勝ち抜き戦なんですから、少し休んで後から復帰……なんてことはできませんよ？」

「なら、ロキはここでお役御免だな」

「勝手に決めるな、バカが」

ロキがにらんでくる。雷真らいしんは笑って受け流した。

「おまえばかり目立つなよ。俺たちにも見せ場を譲れ」

「……ふん」

ロキはかすかに苦笑して、案外素直に引き下がった。

「あーら、（剣帝）はもうリタイア？」

ドロシーが小馬鹿こばかにしたように笑った。

「なら丁度いいわ。ドグサレ、私と勝負なさい！」

「俺をご指名かよ。ちょっと待て、今相談して——」

「いいからさっさと前に出る！ 私がぶっ殺してあげるから！」

「それやったら失格だからな!?」

シャルはなぜか『むすっ』として雷真の背中を押した。

「いいじゃない。行きなさいよ。そうすれば、労せずして判定勝ちよ」

「その代わり俺が死ぬよな!？」

やれやれと思いながら、仕方なく雷真は前に出た。

「で、おまえの自動人形はどこだよ？」

「ばーか！ 私が人形なんて使うわけないでしょ。あんたみたいなドグサレを殺すのは、私の可愛い死霊ちゃんたちよ！」

パチンつと指を弾く。刹那、魔力の火花が指先から散った。

ほこぼこつと床が盛り上がり、何かがむつくりと起き上がってくる。

サビの浮いた鉄の甲冑。それを着込んでいるのは変色した骨格——骸骨だ！

鎧をまとった骸の戦士が、続々と床から這い出してくる。

「何だ、ありや……死人……？」

「気をつけて。あの子の得意技は〈死霊術〉よ」

「死霊——つて、マジかよ？ 古戦場ならまだわかるが、こんなところに？ まさかこの塔、

墓地から土を引っ張ってきたとか……？」

あるいは、地下に大量の死体が安置されているとか。遺骸は高度な魔術マテリアルなので、可能性がないわけではない。

「う。あれは、にせもの」

フレイが断言する。珍しく自信ありげな、力強い声だった。

「たぶん、魔法生物。本物の死体じゃなくても、作れる」

フレイは史学部の所属、魔術史や戦術史に通じている。

「魔法生物——式神みたいなもんか？」

「雷真さま！ 式の戦いならば、わたくしにお任せを——」

「う、私が行く」

日輪を制して、フレイが前に出た。普段は眠そうな目を「きりっ」と引き締め、

「これは団体戦だから。弱い人から、行くべき」

フレイは言うほど弱くない。任せても大丈夫だという気もする。しかし――

「ま、あんたからでもいいけどね！肩ならしにつぶしてあげるわ！」

嘲笑うドロシー。再び指を弾くと、骸骨がもう一ダース増産された。

ひしめき合う骸骨兵士たち。フロアの戦場が一気に狭くなった。

カカカ、と骸骨の歯がかち合って、不気味な音を立てている。笑っているのか、泣いている

のか。作り物と聞いた後でも、やはり不気味な光景だ。

だが、フレイは臆さず、ラビを連れて、ずんずん前に進み出る。

「おい、やらせていいのかロキー」

「黙って見ていろ」

ロキがいいと言うのであれば、雷真がどうこう言える立場でもない。

フレイはふところから小さな笛を取り出し、ぶー、と頬を膨らませて吹いた。

音が聞こえない。――犬笛だろうか？

「行つくわよ！押しつぶしちゃえ！」

ドロシーが攻撃を開始した。主の号令を受け、骸骨が一斉に飛びかかってくる。

殺到するスケルトンの群れに、ラビが「がおんっ」と吠える。吠え声は〈音圧操作〉の魔術回路で変質し、衝撃波となってスケルトンを弾き飛ばした。

日輪が感心した様子で、独り言のように言った。

「面白いですね。古来、犬の鳴き声には療氣しやうき、悪霊を払う靈力があると言います。あの姿、まさに屍鬼しかいを祓はらう靈獣のよう……」

「だが、おかしいぜ。威力が全然……普段はあんなものじゃないんだが」

大岩をも砕く〈音の砲弾〉が、スケルトンを一体砕いただけで大幅に減殺されている。一体目を砕いたものの、二体目には盾で阻まれてしまうのだ。

「そりゃそうよ。フレイの言う通りあれが魔法生物なら、魔力に対する抵抗力が無機物の比じゃないわ。それに、これが本当に〈死靈術ネクロマンシー〉なら——」

シャルの声が緊張をはらむ。その理由はすぐにわかった。

「——やつぱり！ 再生してるわ！」

フロアの端を示す。壁際まで吹き飛ばされた破片が、活動写真の逆回し再生のように、見る復元されていき——そしてまた攻め手に加わり、ラビを襲う！

「ふふんっ、どう？ 手も足も出ないでしょ!?」

ドロシーが勝ち誇り、ちっちゃな体でふんぞり返った。

見るからに余裕がある。あれだけの数を動かしながら、まったく消耗していない。

（——そうか、魔法生物の特性！）

講義で聞きかじった話を思い出す。精霊や死霊しるがみ、式神は〈擬似生命〉。あらかじめプログラムされた行動パターンに沿って動いている。リアルタイムで制御する必要がないから、術者にかかる負担が少ない……とか何とか。

魔法生物には魔術効果を減殺する特性もあるという。おまけに、連中には再生能力まである。これが歩兵相手の戦闘なら、ドロシー一人で千単位の軍団に対抗できるのではないか。圧倒的な耐久性と数——なみの魔術師なら相手にもならない。

「ラビ！ 頑張つて！」

フレイの声がわずかに弾む。連射が続いて、息が切れてきたようだ。

押し込まれそうになったとき、がおがおがおんつ、と盛大な吠え声こえがした。

包囲の外から音の砲弾が飛び、スケルトンの群れをなぎ倒す。

「な——っ!? 誰だれよっ、邪魔するのは——」

ドロシーが背伸びして敵を探す。フレイの背後、下のフロアに続く階段から、コリーやグレートデン、シェパード、ダックスフンド——犬種のさまざまな、《ガルド》の一団が飛び出してきた。日輪ひのわがびくつと肩を跳ね上げ、こっそり雷真らいしんにしがみつく。

「う。数の勝負なら、私も負けない！」

堂々と言いつつフレイ。お株を奪われ、ドロシーは地団太を踏んだ。

「つく、あんたみたいなドンくさい子に、その数がさばけるわけないでしょー」

ドクロの杖つえを両手で水平に構え、瞬間的に魔力を練る。何やら怪しげな呪文じゅもんを唱え、杖をくると一回転。その途端、スケルトンの魔力親和性が格段に増し、動きが変わった。妙に「イキがよく」なり、びよんびよん跳ねながら押し寄せてくる。

フレイも負けてはいない。犬たちを一行に並べ、一斉砲撃した。

「——だめよ！ 弾はじかれてる！」

シャルが悲鳴をあげる。スケルトンの強度が上がり、耐久性が増していた。たちまち、形勢があちらに傾いた。

ガラムたちはフレイの意図を十分に汲んでいるし、連携もとれている。禁忌人形だけに、魔力の（予備電源）^{バックアップ}としても機能する。それでも、フレイの支配力には限界がある。自律しているがゆえに、それぞれの判断に迷いや間違ひも生じる。

コリーとシェバードがぶつかり、グレートデンにダックスフンドが踏まれそうになり、犬たちの隊列が乱れ、前線が押し下げられる。このままでは突破される……。

フレイがロキを振り向き——一瞬、姉弟の視線が交差した。

「ラビ！」

フレイが制服のそでをまくって、相棒を呼ぶ。ラビは少しためらった後、後ろ足で立ち上がり、がぶりつ、とフレイの腕を噛んだ。

雷真も夜々も、あっと息をのんだ。

フレイがぎゅつと目を閉じ、痛みに耐える。ラビが耳を伏せ、すまなそうに牙を抜くと、ぶつりあいた犬歯のあとから鮮血がしたり落ちた。

その瞬間、フレイの魔力が跳ね上がった。

真珠色の髪が逆立つ。魔力の発生源は豊かな膨らみのあたり——心臓だ！

ラビをはじめ、ガラム全頭に力が満ち、筋肉が盛り上がる。

雷真は戦慄した。機巧の心臓が暴走している……!?

（——いや、違う！）

以前、ラビの体はヒグマのように膨らんでいた。だが今は筋肉が発達しただけで、巨大化はしていない。瞳に宿る意志も、決して凶暴ではない。

フレイの表情も以前とは違う。凛々しい横顔には気品が漂っている。

流血にどんな意味があったのか、原理はわからないが——とにかく。

フレイは機巧の心臓が吐き出す魔力を完全にコントロールしていた。

十三頭のガルム犬が一斉に動く。強化された脚力を生かし、グレートデンやセントバーナーなど、大型犬が敵の進軍を阻む。小型犬はスケルトンの足もとを駆け抜け、有利な位置取りから鎧の隙間を狙い撃った。

それまでのような、犬同士の衝突や、同士討ち、もたつきがない。それぞれがそれぞれの役割を完全に理解し、あたかも一個の生き物のように、整然と行動していた。

「そうか——夏休みの、あのボールは」

雷真の脳裏に、夏休みの光景がフラッシュバックする。アンリが運んでいた、謎の数字が書かれたテニスボール。念動の訓練に使うのだと察しはついたが、誰のためのものなのか、どういう意味があったのか、今になってようやくわかった。

あれは正確かつ瞬時の魔力操作を磨くための——

ガルム全頭を統率するための訓練だったのだ！

統率できているのなら、ガルムほど厄介な自動人形もない。犬並みに機敏で、主の意を汲むことができる、迫撃砲に劣らない火力を持つ。

冷静に戦況を見極め、犬たちを統率するフレイの姿は、いっそ神々しいほどだ。

その姿はまるで、大勢の猟犬を従えた狩猟の女神アルテミス。

ガラムの砲撃は熾烈を極め、ついにスケルトンの再生能力を上回った。

「くっ……このくらいで勝ったと思わないでよね！」

ドロシーが杖を振り上げ、新手を次々と召喚する。

（……違う。ここまでの砲撃は、スケルトンの数減らしが目的じゃない）

皮肉にも増やしすぎたスケルトンに視界を塞がれ、ドロシーは気付いていない。だが、観戦中の雷真たちには、ガラムの動きが見えている。

主力がスケルトンを圧倒する横で、ガラム数頭が密かに動き、部屋の外周に沿って展開している。彼らは〈おすわり〉の体勢になり、やがて〈遠吠え〉を始めた。ハーモニーはすぐに魔力を帯び、フロア全体に『異変』を生じさせる。

しん、と不自然な静寂が訪れた。

一瞬、自分の耳がバカになったのかと思った。

それは敵も同じらしい。スケルトンたちの動きが止まる。怪訝そうにあたりを見回し、互い**に**ぶつかったり、よろめいたりする。

（連中、敵を探してる……そうか、視えてねえのか！）

眼球のないスケルトンたちは、骨格に伝わる振動——すなわち〈音〉で周囲を感知していたようだ。無音状態となった今、敵味方の位置がつかめないらしい。

雷真は舌を巻いた。フレイはいつ、そのことに気付いた？

あわてた様子で何かを叫ぶドロシー。だが、彼女の声は誰にも届かない。

その横顔を、収束した衝撃波がかすった。

つー、とドロシーの頬に血が垂れる。ドロシーは魔力を高め、棒立ち状態のスケルトン無理やり引き寄せた。だが、〈音の貫通弾〉は容赦なくスケルトンを貫き、ドロシーの腕や足に、どんどんすり傷が増えていく。

ドロシーは泣きそうになりながら、必死にスケルトンをかき集めた。それは木偶を動かすのと大差ない行為で、相当な魔力を使うらしい。再生に回す魔力が途絶え、スケルトンの復元速度が目に見えて鈍る。フレイはその隙を逃さず、小型犬にドロシーを狙撃させながら、大型犬で片っ端からスケルトンを破壊していく。

たちまちドロシーの息が切れ、スケルトンの軍団は壊滅した。

最後の一体が砕かれようとしたとき、不自然な爆風が生じ、スケルトンを守った。

フレイは驚き、犬たちのハーモニーをやめさせた。

再び音が戻ってきた世界で、横槍を入れた者——ゼカロロス弟が口を開く。

「どうやら『勝負あり』ですね。お気の毒ですが、フレイさんの負けです」

「何だって!? おい、なぜだ!」

雷真は思わずゼカロロス弟に詰め寄った。

「実戦なら、そいつはとくに死んでたろ。どう見てもフレイの完全勝利——」

「これは実戦じゃありませんよ。——ほら、聞こえるでしょう?」

苦笑しながら外を示す。壁の向こうで〈規約違反〉を警告するベルが鳴っていた。これ以上攻撃を続けられ失格となり、夜会の〈参加資格〉が剥奪される。

ロキがため息をつき、ぼそりと言った。

「フレイは二つ、敗北要件を満たしている。第一に、術者を狙った。ブロックさせるのが目的だったとは言え、ああまで執拗に連発し、怪我までさせている以上、言い逃れはできない。そして第二に——塔の外壁に穴があいている」

言われて初めて、雷真も気付いた。

対面の壁に小さな穴があいている。徹底的に収束させた〈音の貫通弾〉は、スケルトンを貫いただけでなく、分厚い石壁に穴をうがっていたのだ。

自身の負けを理解して、フレイは見る見る落ち込んだ。先ほどまでの凜々しさはどこへやら、しょんぼりと肩を落とす。ガラム犬たちも、くうん、と鼻を鳴らした。

雷真が慰めを言うより早く、ロキが投げつけるように言った。

「情けない顔をするな。あんたは強くなった。安心して見ていられるほどにな」
フレイは驚き、そして弾けるような笑顔になった。

雷真も何だか嬉しくて——それが照れくさくて、ロキを茶化したくなった。

「何言ってるんだロキ。おまえ、全然安心してなかっただろ。姉ちゃんが心配でたまらな
いって顔してたぞ？」

「黙れ圧倒的バカが！ 殺すぞ！」

「やってみろ驚異的バカ！」

「ケンカは、めっ！」

一方のドロシーは儼然として突っ立っていた。

がこんつ、と足もとの頭骨を蹴つ飛ばし、ドクロの杖を放り出す。

「……あーあ、興醒め。やる気が失せちゃったわ。ちよつと、弟？ 私もう戦わないから、あとはよろしく！」

ゼカルロス弟はあきれ顔でドロシーを眺めた。

「またそんなわがままを……正気ですか、ドロシーさん？」

「うるさい！ 一勝はしたんだから、あんたの兄貴よりは使えたでしょ！」

「言っときますけど、この塔は兄さんが作ったんですよ？」

「土木工事くらいで威張らないで！」

「悪口言つてると死角から狙撃されますよ——なんてね」

びくびくつと怯えるドロシー。強気に見えて、かなりメンタルが弱い。

「ま、明らかにドロシーさんの負けだったのに、お情けで勝ち抜くのは嫌ですよね」

「謙虚に負けを認めたってことでしょ!? どうしていい方に解釈しないの!？」

「——ということらしいので、皆さん、気にせず上の階に行きましょう」

「このドグサレーっ！ あほーっ！」

ドロシーの罵声を背に受けながら、一同はまた階段を上がり始めた。

3

「ようこそ、僕のフロアへ」

三階で待っていたのはセドリックだった。

いかにも育ちがよさそうな、秀才然とした容姿。だが、その内側には、ざらりと不気味な本性が隠れている……ような気がする。

「思った以上に苦戦してますね。ゼカロスさん？」

「善戦ですよ。一勝一敗じゃないですか」

「様子は水晶玉で見てました。マクガフィンさんは実質敗北じゃないですか」

「でも、ここからは議長閣下が三人抜いてくださるでしょう？」

「そう上手くいくかどうか——で、僕とは誰がやってくれるんです？」

人を食べたような笑顔を向けてくる。その感じに、やはり覚えがある。

こいつは得体が知れない。日輪のこともあるし、ここはやはり——

「夜々。こいつとは俺たちが——」

「ほな、次は僕やね」

雷真の言葉にかぶせるように、六連が前に出た。

何か言おうとする雷真に手のひらを向け、やんわりと制する。

「さつき、巨乳のお姉ちゃんが言うたはりましたやろ」

「う……巨乳……」

そういうくくりは不本意なのか、若干悲しそうな顔をするフレイ。

「こういうのは上に行くほど強い人が相場ですやん。僕はお嬢や雷真はんには敵いませんし——
—せやから、ここは僕が責任を持ちます」

言うが早いか、ふところに手を差し入れ、大量の〈鈴〉を取り出した。

それを空中にばらまいて、素早く足先で円を描き、印を結んで祭文を唱える。

ざああ、つと黒い妖気が立ちのぼり、鈴は数十体もの揚羽蝶に変化した。

（こいつ——できる！）

これだけの数を一瞬で召喚するとは。本人は目輪に劣ると言ったが、そう大きな実力差はないのでは……？

「僕にはお嬢ほどの力はあらしまへん。ぎょーさん降ろそー思たら、魔具の〈依り代〉が必要になるゆうわけ」

にへら、とゆるんだ顔で、セドリックに笑いかける。

「この〈極楽蝶〉でお相手しますよ、議長はん」

「面白い魔術ですね。東洋の精霊術ですか？」

お互いが笑顔で向かい合い——一瞬後、同時に動いた。

セドリックが自分のゴーレムを突進させる。着ぶくれたような外観とは裏腹に、極めて俊敏な自動人形だ。

一方、六連は蝶の群れを左右に広げ、押し包むように迎え撃つ。

迫りくる蝶をゴーレムは腕でなぎ払う。風圧で突風が巻き起こり、蝶はたやすく吹き飛ばされた。恐るべき脅力、まるで空間を引き裂くような力だ。

内部の鈴を碎かれ、蝶が墜落していく。それは桜が散るような、美しくもはかない光景だった。しかし……無論、美しいだけではない。

蝶の破片が黒い霧となって、ゴーレムの腕にまとわりつく。

血の染みのように広がる黒。それはたちまち腕を覆い、ゴーレムの全身に広がった。

「何なの、あれ……!?」

シャルが気味悪そうにつぶやく。その問いに、日輪ひのわがそつと答えた。

「式というのは本来、瘴気しょうきの集合体です。従って〈祟るたたな〉ことが——別の物体に憑ついたり、潜ひそったりできるんです。たとえ他人が支配する自動人形オートマントンであつても。そして、〈極楽蝶ごくらくちょう〉の権能けんのうは〈火〉。ゆえに——」

「しまいですよ、議長はん——ひらきま征せい！」

あつと思う間もない。六連は祈るように両手を組み——いわゆる〈外縛印げばくいん〉を結んで、茶目ちめつ気たつぷりに片目をつむった。

瞬間的に魔力を放出。それが引き金だ。

黒い粘着物が爆散し、凄まじい爆音さきが響き渡った。なぎ倒されるフレイをロキが支え、シャルの帽子がシグムントごと吹き飛ばされていく。

凄まじい破壊力だ。しかし——

「……あちゃ」

どす黒い煙の中、六連の引きつった顔が見える。

「必殺技やったのに……全然、効いてへんのとちやいます……?」

「いやあ、大した威力ですね」

セドリツクは軽く咳き込みながら、笑顔で言った。

「ですが、僕の自動人形オートマトンを破壊するには、少しばかり火力不足だったようで」

「はは……かったいカラダしたはるわ」

二人の言葉通り、セドリツクのゴーレムは健在だった。

外装が部分的にはがれ、蒼いフレームカハがのぞいている。だが、構造にダメージは受けていないようだ。作動音にも異常がなく、平然としている。

一方、六連の蝶は一匹も飛んでいない。今の一撃にすべて使ってしまったようだ。

見るからにまずい状況だが、雷真らいしんは別のことに気を取られていた。

（あの人形……！ あいつは、まさか……！）

雷真の視線に気付いているのか、いないのか。

人を食ったような薄笑いで、セドリツクがゼカルロス弟に訊いた。

「ねえ、ゼカルロスさん。相手は自動人形オートマトンを一体も連れてないみたいですけど、この場合、僕はどこを狙えねらばいいんですかね？」

「……そうですね、通常の夜会やかいなら、手袋を取ってしまえばいいんですが」

「腕うでごともぎ取るってのはどうです？」

「降参！」

六連が両手を上げ、あっさり敗北を認めた。

日輪ひのわの前まで歩いてきて、律儀りぎぎに頭を下げる。

「えらいすんまへん、お嬢。負けました」

「いえ、気にすることはないです。相手が悪かったんです。わたくしも、六連がここまで弱い

とは思っていませんでしたし」

「はは……きつつ」

「『しまいですよ』なんてカッコつけて、このていたらく」

「雷真はーん！ このドS女に何か言うたってください！」

「な——!? えげつないことせんといて！ 雷真さまにチクリ入れよるなん——」

まくし立てようとした日輪が、びくりと硬直する。

それから、冷や汗を垂らしつつ、強張った笑顔（こわば）を雷真に向けた。

「……うち、なまってへんよ？」

「バッチリなまってはるよ」

日輪は耳まで赤くなり、肩をすぼめて小さくなった。

「何も恥ずかしがることねーだろ。故郷（こくに）の言葉でいいじゃねえか」

「だめです。日輪は東に——雷真さまのもとに嫁ぐと決めておりますから。そうなれば、ご近

所とのお付き合いもありますし」

もじもじと膝（ひざ）をすり合わせ、恥じらう日輪。夜々（やや）の瞳孔（どうこう）が急速に開いていく。

またこの展開か……と震える雷真を救ったのは、ゼカルロス弟の言葉だった。

「それじゃ、セドリック議長の勝利ということですね。残るはライシンさんとプリンセスだけ

ですが、どちらが出ます？」

「ではいいよ、わたくしの出番ですね」

腕まくりして張り切る日輪の前で、今度はセドリックが両手をあげた。

「降参します」

「えっ!？」

ゼカルロス弟と日輪ひのわの声が重なる。セドリックは無邪気に笑って、

「僕は降参。どうぞ上のフロアへ進んでください」

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ!」

ゼカルロス弟が食い下がる。しかし、セドリックは涼しい顔だ。

「いやあ、さっきの爆発、思った以上にダメージがあつたみたいで。僕の自動人形オートマドンにこれ以上の無茶むちゃをさせたくありませんからね」

ゼカルロス弟が渋い顔で引き下がる。これは一時的な同盟、セドリックも捨て石になるつもりはないのだろう。一勝した以上、義理は果たせたという判断だ。

「……仕方ないですね。それじゃ皆さん、上のフロアに行きましょう」

ゼカルロス弟が先に立って階段を上がる。

「次は四階。この僕がお相手しますよ」

階段を上るとき、ほんの一瞬、セドリックと視線が合った。

セドリックは笑っていた。雷真らいしんを見る目は、不思議と楽しげだった。

大きな蜘蛛くもが、巣にかかった獲物を見るような、そんな目だった。

五層あるという塔も、ついに四階までたどり着いた。時刻はそろそろ午後八時になるうかというところ。ここまでは、日輪に目立った危険はなかった。

（日輪への脅迫は、オルガの仕業じゃない……のか？）

もしあちらにその気があるなら、もつと早くに仕掛けてきたはず。ゼカルロス兄の魔術はフロア全体を攻撃できた。だが、日輪は狙われていない。

それとも——日輪の実力を知っていて、機会をうかがっているのか。

いずれにせよ、油断は禁物だ。雷真は気を引き締め、注意深くあたりを探った。

ロキはまだ力が戻らないのか、いつにも増して口数が少ない。フレイはもう落ち着いて、いつも通りの表情で犬たちをあやしている。日輪も夜々も気合十分だが、一番戦意に満ちあふれているのは、どういうわけかシャルだった。

「それじゃ、お手柔らかに頼みますよ。プリンセス」

ゼカルロス弟がぴんつとイヤリングを弾く。兄のときと同じように、装飾品がぐにやりと変形して、金属の小妖精になった。

なりは小さいが侮れない。兄のそれと同型機——だとすれば、こちらも《四大元素》系の強力な魔術回路を搭載している可能性が高い。先ほどドロシーをかばった技は、爆発的な《風力》に見えたが……？

日輪がすると寄ってきて、至近距離から雷真を見上げた。

まっすぐな瞳がむずがゆい。照れくさくて、そして気まずい。

「この戦いに日輪は命を懸けます。ですから、わたくしが勝った暁には——」

ぎくつとしてしまう。その動揺を見透かしたように、日輪はくすつと笑った。

「なんてことは申しません。ですが、日輪は雷真さまのために戦います。そのことだけは、どうかお心の隅にお留め置きくださいませ」

きつ、と唇を引き結び、ゼカルロス弟に向き直る。

歩きながら十数枚もの呪符を飛ばし、印を結んで式神を召喚した——が、反応したのはわずかに五、六枚で、残りの呪符はそのまま床に落ちた。

日輪が驚いたような顔をする。まさか——何かされたのか？

「おい日輪、どうかしたのか？」

「……いいえ。雷真さま、開始の合図をくださいませ」

雷真は躊躇した。だが、まずは様子を見ることにして、手を振り下ろした。

「始め！」

両者が戦闘を開始する。先に動いたのは日輪だった。

日輪は〈猿〉の式神を小妖精に突進させた。と同時に、新たな呪符で〈鴉〉に似た式神を生み出し、猿に続いて攻撃させる。

鴉の勢いは凄まじい。敏捷な猿を一瞬で追い越し、空気を裂いて小妖精を狙う。

小妖精はくると回って鴉をかわし、踊るようにステップを踏んだ。

小妖精の正面で空気が不自然に圧縮され——そして、解放される。

追撃しようとしていた猿が真つ二つに裂け、一瞬で消え失せた。

はらり、と切断された呪符が落ちる。鋭利な切断力を見て、シャルが叫んだ。

「シルフ！ 今度は〔風〕の魔術だわ！」

「いい目をしてますね、〔暴竜〕さん！」

ゼカルロス弟が笑顔で肯定する。その瞬間、爆風が生じた。

「日輪！」

思わず飛び出しそうになる雷真を、夜々がしがみついて止める。

「だめです雷真！ 日輪さんを助けたら——」

「そう、失格ですよ！」

ゼカルロス弟が嬉しそうに言う。雷真は齒噛みしたい気分だった。

刃物のごとき爆風は、なおも日輪を襲っている。もちろん、日輪ではなく式神を狙っているのだらう。それは間違いないが、とても平静ではられない。

爆風は次々と式神を切断し、ついに最後の一体を吹き飛ばした。

勢いあまった風の刃が、日輪にぶつかる——寸前。

黒い壁が床から突き立ち、日輪をかばった。

それは異様な怪物だった。壁から脚が生えたような式神。（ぬりかべ）とかいう妖怪に似て

いるか。見た目は奇怪だが、風の刃に耐えるほどの強靱な式神だった。

やはり日輪は優れた魔術師だ。あれだけ攻撃を受けながら、既に次の手段を講じていたらし

い。雷真はほっとすると同時に、自分自身の態度を反省した。

（あいつはガキの頃から、俺よりはるかに優れた魔術師だった）

雷真が過保護になって、必要以上に心配するのは、日輪への侮辱になる。

壁の妖怪は想像以上に堅固で、ゼカルロス弟が風力を上げても、切ることも砕くこともできなかった。

「やりますね。これならどうです？」

烈風を正面に放ち、同時にもう一発、てんで見当違いの方向に放つ。

敵も凄腕だ。風は生き物のように大きく軌道を変え、側面から日輪を狙った。

だが、日輪も読んでいたのだろう。もう一体、壁を召喚して対抗する。

「……また壁だわ」

シャルが不思議そうに、そして不安そうにつぶやく。

雷真もまた不安を覚えている。日輪は先ほどから、まったく攻撃していない。

「六連。日輪のやつ、体調でも悪いのか？」

六連は「わからない」というふうにかぶりを振った。

——おかしい。

日輪はいざなぎ流総本山、土門家の姫。生まれながらに大魔力を持って生まれた存在だ。それが今、試合開始早々、魔力切れを起こしたように追いつまれている。

まさか、《敵》が仕掛けてきた……!?

「大変だよ、雷真！」

びよこんつと下のフロアから、見知った乙女が頭を突き出した。

「小紫！」

「え、小紫っ？」

夜々ややがきよろきよろとあたりを見回す。どうやら、夜々には見えていない。周囲の仲間たちにも、もちろんゼカルロス弟にも見えていないようだ。誰も小紫こむらに注目して
いない。(八重霞やえがすみ)の魔術で身を隠し、忍び込んだきたようだ。

小紫は階段から飛び出し、雷真に向かって叫んだ。

「硝子しよからの伝言！ あのお姉さん、このままだと殺されちゃうかも！」

絶句する雷真の前で、荒れ狂う風の刃が、なおも日輪を襲い続けていた。

Chapter 6 封ずること能わず

1

日輪ひのわが殺される——思わず叫びそうになったが、雷真らいしんは自制した。小紫こむらさきがこっそり舞台に入り込んでいるとバレたら、ややこしい事態を招くかもしれない。

幸い、シャルやフレイは日輪の試合に夢中だし、ゼカルロス弟も気付いていない。不安げな夜々ややに目配せめくばをして、忍び足で壁際に下がる。

夜々は雷真の意図をすぐに理解し、素知そしらぬ顔で観戦に戻った。その背中に隠れ、風の爆音にまぎらせつつ、小声で小紫に訊く。

「日輪が殺されるって、どういう意味だ？ 敵の正体がつかめたのか？」

「ううん、つかめたのは手がかりだけ。あのね、要点は二つあるの。一つは、たった今、日本で騒ぎが起こって……お館やうたってひとが襲われたんだって！」

お館。それは日輪の祖母——いざなぎ流の最大権力者だ。

「それを頭に入れた上で聞いてね。日輪さんの魔術、邪魔されてるみたいなの」

日輪は必死に魔力をしほり、壁妖怪ようかいを維持している。試合が始まったときには、式神しきがみの召喚にも失敗した。本来の実力を発揮できていない。

「硝子しょう子が言うにはね、この近く……たぶん学院のどこかに、〈まいちん〉でも仕掛けられてる

んじゃないかって」

「まいちん——埋鎖呪法か！」

思わず声が高くなる。その言葉にシャルがびくつと反応した。

「ちよつと、何の話？ 貴方、誰と話して——」

「今、埋鎖言わりましたよね？」

六連が耳ざとく聞きつけ、らしくないほど真剣な顔を向けた。

「ほな、これはいざなぎ流の結界術……あかん！ 獅子身中の虫や！」

「ちよつと！ 私にもわかるように説明して！」

シャルが雷真を揺さぶる。だが、説明してやるだけの余裕がない。

いざなぎ流の魔術のみを封じる封印術——その秘術を知っているのは、いざなぎ流の者だけ

だ。それも、本家にごく近い者しか知らないはず。

日本ではお館が狙われたと言う。これが同じ一味の仕業なら、単に日輪を敗退させるのが目

的とは限らない。たとえば……そう、これがお家騒動なら？

日輪は次期お館——権力の座を狙う輩には、もつとも邪魔な存在だ！

雷真は自分自身を殴り飛ばしたくなった。

俺はどこまでバカなんだ。敵の要求を額面通りに受け取って、日輪を棄権させることだと思

い込んでいた。だが、そうとは限らない。目に見える嫌がらせが欺瞞にすぎず、本当の目的か

ら注意をそらすための策だったとしたら？

いざなぎ一門の誰かが、学生の仕業に見せかけて、日輪を暗殺しよう——

ゼカルロス弟をにらむ。雷真の殺気を感じたのか、ごく短い時間、ゼカルロス弟が視線を寄越した。その口元に、ふっ、と意味深長な笑みが浮かぶ。

（あいつ……何か知ってるのか！）

頭に血がのぼる。飛び出そうとするのを、六連が羽交い絞めにして止めた。

「あきまへん、雷真はん！」

「離せ、六連！」

「後生や！ お嬢の頑張りは雷真はんのためやで！」

雷真ははっとして立ち止まった。

「相手の不正を訴えて、ひとまず試合を中断させる——それでええなら、お嬢かてとつくにそうしてます。けど……」

不正の証拠がない。

試合を中断すれば、相手はすぐに証拠を回収、痕跡も残さないだろう。それに、「いざなぎ流にのみ伝わる秘術」を、ゼカルロス弟の仕業と決めつけるのは無理がある。

「ともかく、昂と合流しまひよ」

そうした方がいい。だが——ここを離れているあいだに、日輪に何かあったら？

雷真は日輪を振り向いた。猛攻にさらされている許婚を。

やはり試合を止めた方がいいのでは？ もし証拠が見つからず、言いがかりとのそしりを受けても、日輪を失うよりははるかにマシだ。

しかし、それでは日輪の意志を無視することに……。

堂々巡り。煩悶する雷真に、意外なところから救いの手が差し伸べられた。

「行け」

まるで雷真の心を読んだかのように、ロキが振り向きもせずと言う。

「ロキ……日輪を守ってくれるのか？」

「戦力が欠ければこちらも困る。それに、目の前で女に死なれるのは気分が悪い」

「——ありがとよ！ 夜々、フレイ！ 一緒にきてくれ！」

「え!? ちょ……私は!?」

「シャルはここにいろ！」

一方的に叫んで、雷真は階段を駆け降りた。その後、小紫と夜々が続き、少し遅れて、戸惑った様子のフレイが続いた。

三階ではセドリツク、二階ではドロシーの奇異の視線を浴びながら、さらに下へ。一階にいるはずのゼカルロス兄は姿が見えず——はつきり嫌な予感がした。雷真は焦燥に衝き動かされるまま、塔を飛び出し、観客席に飛び込んだ。

「コラお嬢！ 何手エ抜いとんのや！ いてもうたれ！」

昂は最前列の席で、塔の外壁、大型スクリーンに向かって怒鳴っていた。画像は荒く、お世辞にも見やすいとは言えないが、苦戦する日輪の姿が映っている。

「昂！」

「雷真!? おまえ何しとん——お嬢ほっぽってきたんかい!?」

「今まさにおまえのお嬢さまが大変なんだよ！ だから手を貸せ！」

昂の顔色が変わる。ただならぬ状況だと察したようだ。

小紫から伝え聞いたことを、雷真は早口で説明した。

「お館さまが襲われたやと……ほんで、お館さまは!? お館さまは無事なんか!?」

「まだわからないよ! 硝子が調べてる!」

小紫が〈八重霞〉を解除して叫ぶ。唐突に出現した乙女に、近くの観客たちはもちろん、昂もぎよっとした。

「……途方もない話や。式を封じる埋鎖ゆうたら、そら、つまり」

「一門の仕業ゆうことですわ」

六連が珍しく早口になって言った。

「門外不出なんはもちろん、一門のもんでも詳しくゆうない。他の魔術師……まして、機巧に頼る西洋人が使う呪やないですよ。式にしか効果ないですし」

二人には思い当たるフシがあるらしい。雷真はやりきれない気分になった。

「いざなぎの連中、お家騒動なんか抱えてたのかよ!」

「でかい組織には必ず不満分子がおる! おまえんとこかて抱えてたやろが!」

「ともかく、日輪はまだ戦ってんだ! どうすりや助けられる?」

昂と六連は視線を交わし、うなずき合った。

「ここは魔術世界の最高学府、大掛かりな儀式は無理や。やのに、お嬢には効果てき面。たぶん六道角張無尽結界呪——いわゆる六角法陣結界やろ」

「僕もそう思う。ほんなら、お嬢の式は十分の一も力出とらんのとちやいますか」

十分の一！

夜々が目を丸くする。恋敵の才能を知って驚いた様子だ。

雷真もまた、改めて日輪の技量を思い知った。そんな程度の力しか出せていないのに、日輪の式神にはあの強度、剛性、耐久力があるのか……。

「それで、その結界はどうすりや破れるんだ」

「ちゃんとした結界なら、とっ蔵うにも儀式せなあかん。けど、おまえも魔術師なら知っとるやろ。効果が強おてインスタント——そういう『便利な』術は概して脆い」

昂は雷真、フレイ、六連と視線を巡らせ、鋭く言った。

「あれが六角法陣結界なら、陣を崩せば——〈蠱物〉を壊せば弱まる。ほしたら、お嬢の式で中から破壊できるやろ。手分けして、さっさと壊すえ！」

「あの！」

夜々が手を挙げ、近くの六連に質問した。

「まじもん——まじものというのは土中に埋められてるんですよね？ 学院の広い敷地の中から、どうやって探せばいいんですかっ？」

「安心しはりー、夜々ちゃん。まじもんの目星は簡単につくんやよ」

「せや！ 結界点から正確に六六間の円周上にある！」

「う。六六けん？」

戸惑うフレイ。雷真は素早く暗算して、駆け出しながら教えた。

「こっちの単位だと——約一二〇メートルだ！」

舞台を飛び出して行く雷真。夜々と小紫、晶と六連もそれにならう。フレイもラビの背中に飛び乗って、一行の後を追いかけた。

一同の騒々しい出発を、観客たちは啞然として見送った。

2

暗い林の中を晶はがむしやらに走る。

木の根につまずき、石を蹴飛ばし、枝に頬を引っかける。道なき道だが、幸い、方向は見失っていない。フレイのコリー犬が先導してくれている。

雷真、夜々、六連も手分けして蠱物破壊に駆け回っている。それぞれがガラム犬を連れていて、術者のフレイは〈合流地点〉から犬たちを指揮していた。

コリーが急に立ち止まり、ふんふんと地面の匂いをかく。

近付いてランプで照らすと、そこだけ土が湿っていた。

「おう、掘った痕や！ 神鬼照覧、虫の舞、虫の舞、きたりま征！」

呪符で式神を降ろす。呪符は黒い炎を上げ、甲虫に変化して地面にぶち当たった。

爆発。樹木を根元からなぎ倒し、深さ一メートルもの大穴をうがつ。

ばきんつ、と陶器の碎ける音がして、つば形の蠱物が壊れた。

「お兄さん、やったのっ？」

頭上から声が降ってくる。見上げると、大樹の枝に乙女が立っていた。

雷真が連れていた自動人形、〈雪月花〉シリーズのひとつ——小紫だ。

「おう、壊した。小紫ちゃんゆうたな、ほかはどうなっとる？」

「——あ、この感じ！」

小紫が目を閉じ、耳に手を当てる。ずん……、と地響きが伝わってきた。

「夜々姉さまが一個壊したみたい！」

「よっしゃ。ほな、合流地点に一旦戻ろ！」

昂はコリー犬を招き寄せ、〈合流地点〉に向けて走り出した。

小紫もまた、樹上をびよんびよん飛んでついてくる。

帰りの方が格段に速い。数分と経たず、合流地点に到着した。

ストリート^{ひつろ}の曲がり角。見晴らしがよく、万一の襲撃にも対応できる位置だ。

既に六連が戻ってきていて、フレイと二人、屋外灯の下で待機している。

「六連！ やったんか？」

「ええ、壊しました。フレイはんは二つも壊さはったんよ。わんちゃん使おてね」

「ほー、式でもないのに遠隔操作とは、大したもんや！」

フレイは少し頬を染め、はにかんだような顔をした。

「色ボケ雷真の女たらし癖が役に立ちよったわ。ひのふのみのよ……夜々ちゃんもやっただけ

うし、あとはボケ雷真——」

「こっちも壊したぞ！ これで全部か？」

噂をすれば何とやら。雷真が夜々と一緒に戻ってきた。

「おう、全部や！」

「小紫！ 日輪ひのわの様子はどうか？」

雷真が小紫を振り仰ぐ。小紫は屋外灯の上に立ち、コロセウムをにらんでいた。

ライトに照らされ、煌々こうこうと浮かび上がる塔。その内側を透視して――

「だめ！ お姉さんの力、全然増えてない！」

「何だつて……!? おい、どうなつてんだ昴！」

「知るかボケ！ 俺おれが聞きたいわ！」

雷真のこめかみには冷や汗が光っている。相当に焦っているようだ。だが、焦り具合では昴もまったく負けてはいない。

「くそつ、何でや！ まじもんは六個割った。結界は破れとるはずなのに……！」

――いや、待て。逆に言えば。

（まさか……あり得へん……そんな……こと……！）

恐るべき考えが浮かび上がる。自分の想像に昴は震えた。

だが、そう考えれば……つじつまが合う。すべての筋が通る。

「もう一度確認しよう！」

雷真の声で我に返る。雷真は切羽詰まった様子で、一同に訴えかけた。

「埋鎖まいしんが六個とは限らないだろ。誰だれかがダミーをつかまされたのかもしれない。それぞれの場所に戻って、もう一度周辺を探るんだ！」

一同はうなずき、フレイを残して、すぐさま散会した。

昂^{すげ}も先ほどの場所に戻る——ふりをして、林の中で足を止めた。

ざわめく気持ちを鎮めるように、深呼吸をする。

六角法陣結界は対式神用の秘術。いざなぎ流にとつては「弱点」となる術だ。それだけに秘中の秘とされ、原則的には宗家^{そうけ}周辺にしか手順が知らされない。

つまり——

コリーが戻ってきて、ふんふん鼻を鳴らした。「行かないの？」とたずねる顔だ。

「……すまんな、わんころ。俺^{おれ}はそっちには行かん。……どこ行くかて？ 決まっとる。おとしまえをつけに行くんや」

こぶしを硬く握りしめ、逆方向に走り出す。

駆けて、駆けて、駆け抜ける。茂みを蹴散^{けち}らし、幹にぶつかりながら。

不意に林が切れ、開けた草むらに出る。

草むらの中央、大きな切り株に腰掛けて、六連^{むつ}が座っていた。

「——えっ、昂^{すげ}!？」

地面を掘り返すような素振りもなく、既に掘り返した様子もない。くつろいだ姿勢で、フレイのダックスフンドにお菓子を与えている。

「ど、どうしたん？ そんな、息せき切って」

「どうもこうもない。まじもんを壊しにきた。——どけ！ そこにあるんやろ！」

六連は冷や汗を垂らしつつ、なおもはぐらかそうとした。

「まあま、そんな青筋立てんと……。僕のぶんは壊しましたよ」

「嘘^{うそ}こけ！ 全員が壊したはずなのに結界は壊れてへん。誰^{だれ}かが壊してへんのや。犯人は結界の手順を知っとる人間——つまり、俺かおまえや！」

「……さすが昴。賢いわ」

ふー、とため息をつく。そして、開き直ったような笑顔を浮かべた。

「でも、それが僕やゆう証拠はありますのん？」

「あの血文字……俺らの式は犯人の手がかりさえ見つけられなかった。それら簡単な話や。お互いの手の内も、網の目も、みんなわかっとるさかいな。それに——夜会^{やかい}が始まる前、おまえ遅刻したやろ。おまえは大概^{たいがい}女好きで、浮気者気どっとるけどな、お嬢^{お嬢}ほっぽってよその娘さんとイチヤコラしたりせえへんわ。……今日まではな」

言いながら、自分の口調に自分で驚く。どこまでも六連を信じきった声——

それが今、無性に悲しい。

六連も同じ気持ちだったのか。瞳^{ひとみ}を翳^{かげ}らせ、切なそうに笑った。

「雷真^{らいしん}はんだけやのうて、僕^このことも買^かおてくれてたんやね」

「当たり前や。何年一緒におると思おてん」

「……かなんわ、昴^{すばる}には」

かぶりを振る。声が小さくなるのと反比例して、二人の魔力が徐々に大きくなっていく。ただならぬ気配を察し、コリーとダックスフンドが小さく吠^ほえた。

魔力をみなぎらせながら、昴は一步、間合いを詰めた。

「あのオルガって姉ちゃんと組んだんか？」

「はいな。まあ、僕が話したんはセドリック坊ちゃんだけですけど」

「何でや？ 何でお嬢を裏切った？」

「さあ、何でやろなあ……まあ、ありていに言うて、利害の一致ゆうやつどす」

おどけた調子で言う。だが、顔はもう笑っていない。

「僕はお嬢が夜会でぶざまに負けてくらはつたらええねん。そして、あちらはんはお嬢が退場してくらはれば満足——」

「こん勝負はただの勝負ちゃうやろ！ お嬢の夢が叶うかどうかの瀬戸際や！ お嬢は命懸けで戦つとる！ 子どもの遊びちゃうわ！」

「ええ、遊びちゃいます。オルガはんも言うてはつたやないですか。これは〈戦争〉——せやから、騙し討ちや埋伏、寝返りも立派な戦術ですわ」

六連はふところに手を差し入れ、大量の鈴を引っ張り出した。

「堪忍なあ、昴。これも僕の仕事やさかい——ここのまじものは壊させへんよ」

「こんの…………ド阿呆があああああ！」

昴の髪が逆立ち、魔力が噴き上がった。コリーとダックスフンドがびくつと飛び退き、そろって茂みに逃げ込む。昴と六連は同時に印を結び、

「きたりま征！」

同時に式神を召喚した。

六連の鈴は蝶となり、昴の呪符は鴉に変化する。

蝶と鴉が空中で交差、互いに位置を変えながら、激しくぶつかり合った。

蝶が燃え上がり、爆風で鴉を叩き落とす。鴉の生み出す烈風が、蝶の羽をむしり取る。蝶がひととき大きく爆散し、六連の視界を塞いだ瞬間、甲虫が突っ込んできた。

大きな角が六連の眉間を狙っている。六連は自ら後ろに倒れ、そのままとんぼを切って、きわどくやり過ぎた。

「わっとなー！ 危ない、危ない——」

空中で顔が引きつる。跳んだ先に、巨大な蜘蛛の巣が張っていた。

蜘蛛の巣にはもちろん巣の主がいる。象ほどもある巨大な女郎蜘蛛だ。

六連はとっさに印を結び、別の式神を召喚した。

大型犬ほどの鈴虫が足もとに生まれ、羽をふるわせて突風を巻き起こす。突風が六連の体を真上に運び、どうにか蜘蛛の巣から遠ざけた。

六連は冷や汗をしたたらせながら、ぞっとした様子で苦笑した。

「ほんま危ないわ。本気やね、昴……〈土蜘蛛〉まで使うやなんて」

「堪忍袋の緒がプチ切れとんのや！」

「……まさかとは思いますが、本気で僕を殺すつもりやない……ですよな？」

返事の代わりに、昴は上着の中から小刀を取り出した。

白木の鞘を見た瞬間、六連の顔が引きつった。

「ちょ、昴……それは洒落になってへん！」

「洒落ちゃうわ阿呆！ 俺が〈おひいさん〉を降ろす前に言え！ 誰の差し金や！」

苦しげに眉をゆがめ、六連が口をつくむ。

——言えないのだ。

「……そら、まあ、いろいろあるわな。俺もおまえもいざなぎの宿命からは逃げられん。けど、そうまで思い詰める前に、何で俺に言わなかった！」

「……言えへんよ。反対されるの、目に見えてますやん」

「当然や！」

ミもフタもない返答。六連はずるつと足をすべらせた。

毒気を抜かれてしまったのか、はあ、と観念したように嘆息する。

「ならバラしますけど、全部、お館さまの命令ですよ」

昂は棒立ちになった。何を言われたのか。すぐには理解できない。

「何でや!? 何でお館さまが……お嬢を殺さなあかんのや！」

「——えっ、殺し!?」

今度は六連が驚愕する番だった。ばくばくと金魚のように口を開け閉めして——

重大な秘密に気付いたように、あわてて両手を振った。

「誤解や! 僕もお館さまも、お嬢を殺したいわけあらへんわ！」

「はあ!? せやったら何で——」

「僕が仰せつかりましたんは、お嬢を負けさすことだけや。あの強情なお嬢のこと、雷真はんに大見得切^{おおみえきり}って負けたら、日本に帰るーてなりますやろ。せやから、脅しかけてやる気殺^{きころ}ぎつつ、「勝負に負けたらあきらめます」ゆう方向に持ってって」

「待て待て待て待て! せやったら、何でお館さまが襲われた……? おまえかて、何で学生

総代に寝返りなんぞ……」

「そら、あつちの了承も取り付けとかんと、お嬢に怪我でもさしたらどやされますやん。お館さまが襲われたーゆうんは、お嬢を揺さぶるためのデマでっしやろ」

昂はもう、何も言えなかった。

どうやら誤解が解けたらしいと察して、六連はふー、と息をついた。

「早とちりがすぎますよ昂。大体、夜会の舞台で殺しなんてあるはずないやん」

「そ、そらまあ、そやな……。かーっ、まぎらわしーことしよってからに！」

全身の筋肉が弛緩して、その場にしゃがみ込んでしまう。

「ほんなら、どのみちお嬢は怪我もせんゆうわけ——」

「いや、あいつは死ぬね」

背後の木立ちから、突然、第三者の声が割り込んできた。

ぞくっ、と猛烈な悪寒が二人を襲う。

おかしい。今の今まで、まるで気配を感じさせなかった。

いつから見ていた？ いつからそこにいた？

やがて、木立ちの奥から一人の男子学生が姿を見せる。

貴族めいた容貌の、金髪の美少年。ゴーレムのような自動人形を連れている。

「お館が襲われたのは事実さ。これは確かな情報だよ。何せ、俺の仲間がやったんだからな。」

今頃極東は楽しいパーティーの真っ最中だぜ」

「セドリツクはん……ですよね？」

先ほど戦った相手だというのに、六連は確かめるように訊いた。それはど雰囲気が違う。先ほどまでの優等生ぶったところは微塵もない。それどころか、凶悪犯が醸し出すような、荒んだ妖気を漂わせている。

にやつと笑ったかと思うと、紙が破れるように、セドリツクの姿が崩れた。

魔術で擬装していたのか。化けの皮の下から、黒髪の青年が現れる。

美青年と言っているだろうか。細身の体は引き締まり、妖しい色気さえ感じさせる。自信に満ちた顔立ちは野性的で、しかし同時に高貴でもあった。

「見た顔や……どこかで……せや、新聞——」

ぎくつ、と肩が勝手に跳ねる。そうだ、この男の正体は。

「叛逆の王子！ 黒太子エドマンド！」

「『陛下』をつけろよ。無礼な東洋人だな」

エドマンドは苦笑した。しかし、言うほど気分を害したふうもなく、

「さて、見事に正体もバレちゃったことだし——口封じと洒落込むか」

にやりと愉悅の笑みを見せ、自分のゴーレムに手をかざした。

昂の背筋にどろりとして落ち着かない、嫌な感覚がまとわりついた。

それは幼少時、野犬の群れに襲われたとき以来の——

死の予感、というやつだった。

同じ頃、雷真はフレイのグレートデンと一緒に土を掘り返していた。

埋鎖を探して、手当たり次第に大地を砕く。夜々の金剛力を自分の体に適用し、こぶしを叩きつけた瞬間、ドーン、と爆発が起こった。

——ここではない。もっと遠くで、魔術の爆発を感じた。

だが、おかしい。音もしなければ、光も見えず、臭いさえ感じない。そうこうするうちに魔力すら感じなくなり、林は元通りの静けさを取り戻した。

気のせいだったのか。雷真は息を殺し、あたりの様子をうかがった。

「雷真！」

夜々の警告。雷真はとっさに身を投げ出し、地面に転がった。

直前まで雷真が立っていた場所に、金属的な光沢を放つ槍が飛び出した。

槍はただちに土中に戻り、見えなくなる。

「こいつは……土属性の魔術！」

「次がきます！」

土中の鉱物を練ったのか。金属の槍が、刃が、剣山となって雷真と夜々を狙う。雷真は敢えて受けず、夜々とともに跳んでかわした。

「——そこだ！」

空中で石を投げつける。金剛力を使った投擲——石は銃弾のような速度で飛び、樹木をたやすくへし折って、金属板にぶち当たった。

地面からせり出した鉄板が瞬間的に敵を守ったのだ。鉄板の後ろには――

「ゼカルロス兄弟の……兄貴の方だな」

敵は無言でこちらを見据えている。冷たい視線、そして殺意。なるほど、暗殺者向きの性格だ。余計なことはしゃべらない。

「……どうしますか雷真？」

「あちらさんには悪いが――叩きのめす！」

夜々に魔力を送り込む。夜々は雷真の意を受け、稲妻いなずまのように駆けた。

夜々の進路上に無数の槍が立つ。あたかも地獄の〈針の山〉。しかし、夜々はまったく速度をゆるめない。槍をかわし、跳躍し、樹きを蹴けり、立体的な動きで敵に迫る。

回転しながら力を高め、こぶしを一気に叩きつける。

標的はゼカルロス兄の肩、ちょこちょこ踊る小妖精だ。鉄板が次々と生まれ、こぶしを阻もうとしたが、夜々の鉄拳てつけんはそのすべてを打ち砕いた。

砕けた鉄板がゼカルロス兄を直撃する。鉄板は上半身にめり込み、引きちぎった。

殺してしまった――わけではない。吹っ飛んでいく上半身は、空中で土くれに変わる。術者本人ではなく、土の魔術で精巧に作られたダミーだった。

「これは泥人形――雷真！ 後ろです！」

夜々ややがまたも警告を発する。雷真らいしんの背後の土中から、ゼカルロス兄が飛び出してきた。土に潜っていたらしい。

気付いたときにはもう遅い。雷真の背後に巨大な〈兵器〉が出現している。

金属の棒がしなっている。その先端には凶悪な鋭さの楔。くさび〈茲〉代わりの金属棒を引き絞り、楔を撃ち出す仕組みらしい。

楔は既に発射態勢。雷真はまだ振り向きかけで、重心移動もままならない。到底、かわせるタイミングではなかった。

ゼカルロス兄の唇が三日月を描き——発射。至近距離で撃ち出された楔は、音速をはるかに超え、衝撃波を生み出しながら雷真に襲いかかった。

勢いあまって地面を貫き、岩盤を砕くほどの大穴をうがつ。

噴き上がる土砂。土、草、岩、樹木——その中に、雷真の姿もあった。

「!?」

ゼカルロス兄が瞠目する。どうもかわした！ あの一撃を！ あの体勢から！

雷真の蹴りが空気を切り裂く。ゼカルロス兄はとっさにかわしたが、弾みで小妖精が肩から離れた。小妖精に蹴りがめり込み、あっけなくスクラップになる。

ゼカルロス兄は両手をあげ、投降の意を示した。

相手の意図がわからず、雷真が動きを止めた瞬間、ゼカルロス兄が笑った。

「——噂通り甘いな。うわさ（下から二番目）」

気がつけば、雷真の頭上、枝の上で別の小妖精が踊っている！

「一体きりだと思ったか？」

「いいや？」

平然と答える雷真。その頭上を一陣の風——夜々が吹き抜けた。

ブーツのかかとで小妖精を砕く。ゼカロス兄が驚愕し――
その表情のまま、ぱたりと倒れた。

いつの間にか、雷真の蹴りが首筋に決まっている。折れてはいないが、気絶した。

ゼカロス兄が意識を失うと、かさかさつと茂みが揺れた。

「雷真、これ！ こつちにも、そつちにも自動人形が……！」

「死角から狙い撃ちにされてたらと思うと、ぞつとするな……。とにかく、急いで戻ろう。ほかの連中が心配だ」

「はい！」

腰が引けているグレートデンを連れ、合流地点に駆け戻る。

そちらには小紫も一緒にいた。ガラム犬もそろっている。だが、六連と昴がいらない。

「フレイ！ 昴たちはどこに行った？ あいつらについてた犬は？」

「う。この子たちだけ、逃げ帰ってきた……」

フレイはダックスフンドとコリーをあやしている。二頭は怯えた様子で、ぶるぶると小刻みに震えていた。

「でも、異変ってほどのものは、感じない……」

「私も感じないよ。絶対、何かがおかしいのに……耳栓されてるみたい」

小紫が青ざめた顔で言う。嫌な予感がするらしい。

「それに、変なの。目が回るっていうか、上手く言えないけど」

「フレイはここにいてくれ。いざつてとき、執行部にすぐ連絡したい」

「雷真——行く気!? 応援を呼んだ方がいいよ! 絶対、危ない魔術だよ!」

「援軍要請はフレイに任せる。小紫、フレイを頼むぞ!」

「わ……わかった……けど、雷真のバカ! 単細胞!」

不安げな小紫とフレイを残し、雷真は夜々と二人で林の中に飛び込んだ。

4

「ヒノワ! 頑張つて! 負けないで!」

絶え間なく打ち込まれる烈風。その衝撃音に交じつて、シャルの応援が聞こえた。

折れそうになる心を、その声が支えてくれる。日輪は印を結び、祭文を唱え、ガンガンに魔力を高める——のだが、式神はまるで応えてくれない。

「いやあ……あきれたしぶとさですわね」

不意に暴風がやみ、ゼカルロス弟が辟易した声で言った。

「もう抵抗をあきらめてはいかがです? 調子が出ないんでしょう?」

「……嫌です」

「意固地なプリンセスだ。まあ、僕は好きですけどね、そういう人」

「このような卑怯な手段に屈するなど……いざなぎ流の名が泣きます!」

きつ、とにらみつける。ゼカルロス弟は肩をすくめた。

「……困りましたね。粘られて、万が一にも負けたりしたら、僕が叱られちゃいますし。じゃ

あちよつと、「卑怯な」戦術に訴えますか」

日輪は警戒して、自分の壁妖怪——《婦守磨》を引き寄せた。

「……何をしようと言うのです？」

「いやね、内緒でちよつと、面白いものを聞かせてあげますよ」

「内緒？ 聞かせる？ 一体、何を言つて……」

「——すな！ 死ぬぞ、六連！」

「昂こそ、血まみれですやん」

二人の声^{すばる}が耳元で聞こえ、日輪は背後を振り返った。

「昂!? 六連——どこです!？」

婦守磨たちの隙間^{すきま}から、あたりをうかがう。だが、フロアにいるのは、びっくりした顔のシヤルと難しい顔のロキだけ。昂と六連は見当たらない。

（敵の幻術……!?）

いや、違う。魔術をかけられた感じはしない。

ゼカルロス弟が指を唇に当て、「静かに」のジェスチャーをした。

「僕の《風》に乗つて、遠くの音が聞こえるでしょう？ もっと魔力を集中してみてください。

感度が上がります——そう」

言われるまま耳を澄ます。やがて、日輪の耳^{ひのわ}に戦闘音が聞こえてきた。

激しい爆発。草を蹴^けつて駆ける音。風が裂け、土が巻き上がる。

「あかん！ これも無効や!」

「はは……いよいよ、手がのうなってきましたわ」

「笑うな！ 知恵しはれ——ぬおっ！」

繊維が裂けるような音がする。いや、繊維ではなく——肉！

「ビノワ!? どうしたの!? 大丈夫!?」

「大丈夫です！ お静かに！」

シャルがびくつとして口をつぐむ。申し訳ないが、それどころではない。

しかし、耳を澄ましても、もう続きは聞こえてこなかった。

……相手が魔術を解いたのだ。ゼカルロス弟が意地悪な微笑を浮かべている。

「そうめい聡明なプリンセスのこと、状況は読み取れましたよね？」

日輪は奥歯を噛んだ。カ焦りを隠し、考える。

二人はどこで、誰と戦っているのだろう。木々のざわめきや、草が擦れ合う音がした。森の中だ。おそらくは学院のどこか。助けるとすれば、どうやって……。

「彼らはこのフロアの《ルール》に気付いたようだ。貴女を救うべく飛び出して行っただんです。結果的には足を引っ張る格好になってしまいました。——おっと、悪く思わないでくださいね。これは《戦争》ですのですね。」

……オルガが言った《戦争》とは意味が違う。

ゼカルロス兄弟は本気で《戦争》をやっている。一階での戦い、敵はあわよくばロキを殺そうとしていた。そして今、日輪を卑劣な手段で追い詰めている。

彼らの言う《戦争》は、世界大戦と同じ意味の《戦争》なのだ。

日輪はいざなぎ流の次期当主。言ってみれば日本の要人だ。少なくとも、政治的な利用価値がある。だとすると、これは日輪を狙ったものの……!?」

「……わたくしに、どうしろと言うのです?」

「式神を全部引つ込めて、武装解除してください。それで、二人は助かります」

利那、日輪の胸に込み上げたのは、敵への怒りではなく、途方もない無力感だった。

昂と六連が敵に攻撃されている。それなのに、どうすることもできない。

ここは英国。援軍がくるあてはない。そもそも、日輪にはもう一門の後援がない。

日輪が頼れるのは、ほかでもない、昂と六連だけなのだ。

この戦いには、雷真はもちろん、フレイやロキの参加資格もかかっている。こんな私的な事

情で降参するなど、信頼して任せてくれた彼らに申し訳ない。

それでも、事情を知れば、雷真は許してくれるだろう。

その上、このまま日輪が敗北しても、まだ雷真がいる。

(雷真さまはお強い方。この男にも、学生総代にも、勝ってください……!)

負けました、という言葉が喉まで出かかった。

だが、我慢する。理性を総動員して、その言葉をのみ下す。

何の役にも立てないまま、七年前と同じようにただ助けられるだけ——

そんなわたくしは——わたくし自身が許せそうにない。

それは昂と六連も同じだ。日輪が二人のために負けたと知ったら——自分たちが日輪の足手

まといになったと知れば、自分自身を絶対に許さない。

なあんだ、と思った。

わたくしたち三人の気持ちは、初めから一致している。

だから、日輪は気丈に顔を上げた。

「かような不正が許されるとでも？ わたくしは泣き寝入りする女ではありません。出るところに出れば、貴方あなたにいかなる後ろ盾があるうとも——」

「バラしますか？ 二人の命を犠牲にして？」

決まったはずの覚悟が、たちまち揺らいだ。

「ひ、日輪は雷真さまのために戦うと申しました！ 絶対に降参など……っ」

「おや、誤解してますね。僕は貴女あなたに降参しろと言っているわけではありません」

「え……？」

「死んでください、と言ってるんです」

穏やかだった瞳ひとみに明確な殺意が宿る。

この敵は——無抵抗で殺されろ、と言っているのだ！

日輪は暗闇くらやみに取り残されたような気がした。

正体のわからない敵に命を狙われ、今まさに死ねと迫られている。物心ついたときから一緒にいて、ずっと尽くしてくれた二人が、殺されそうになっている。

頼れる者は誰もいない。魔力を封じられ、ろくな抵抗もできない。

自分自身の弱さに。この身の無力に。負けてしまいそうになる。

ゼカルロス弟は再び風を操り、遠くの音を引き寄せた。昴のうめきが、六連の悲鳴が、激し

い戦鬨音が聞こえてきて、日輪の心をかき乱す。

「ははっ、頑張るなあ、おまえら！」

敵らしき男の、嘲るような笑い声が響く。

「だが、足りないね。もっと頑張らないと、姫君の方が先に死んじまうぜ？」

「……阿呆ぬかせ。お嬢はそない貧弱なタマちゃう」

べっ、と血を吐き、昂が言った。

「あいつは、いざなぎ一門を背負って立つ女や！」

じわつと涙がにじみ、日輪はとつさに目頭を押さえた。

そうだ。二人はずつと、わたくしの側にいてくれた。

ずっとそうだった。四六時中、雷真さま雷真さまとうるさいわたくしを、いつも笑って、た

まに怒って、けれど優しく見守ってくれたのだ。

(……ごめんなさい、雷真さま)

わたくしは……二人を見殺しには、できません……。

「わたくしの、負け——」

「あきらめちゃダメよ！」

「——!?」

日輪の敗北宣言をさえぎったのは、シャルだった。



「貴女あなたがあきらめちゃだめ！ 貴女はあいつの婚約者なんでしょう？ だったら、あいつがあきらめるまで、あきらめないで！」

シャルにも、おおよその事情は理解できているはずだ。日輪ひのわが降伏を迫られ、すんなり降伏しようとしているのだから、人質の存在も察しているはず。

わかつていながら、『あきらめるな』と言う。

——信じているんだ、このひとは。

雷真らいしんさまを。おなかの底から信じている。

日輪の脳裏に、黒髪オイトマツの自動人形が思い浮かんだ。

あの自動人形——夜々ヤヤさんも、雷真らいしんさまを信じている。だから、いささかも主あるじを疑わず、当

たり前のように死地こいじへ向かう。

ならば、せめて彼女たちの恋敵であるために。

「……わたくしが先に音おとを上げるわけには参りませんね」

日輪は目を閉じ、着物の袖そでで涙をぬぐった。

びりっ、と黒い雷電が日輪の肩から生じる。

「……え？」

ゼカルロスが問の抜けた声を出す。次の瞬間、猛烈な魔力がフロアを支配した。

日輪の魔力が大地を揺さぶり、塔全体がぐらぐら揺れた。

「お話はわかりました、ゼカルロスさま。わたくしの供の者にご配慮いただき、まことにありがとうございます。でも、要は簡単なお話でございましょう？」

堂々と、泰然と、そして凛として告げる。

「さつさと貴方を倒して、二人の救援に参ります！」

言葉にまで魔力が宿る。それはびりびりと空気を震わせ、ゼカルロス弟を圧倒した。

吹き寄せる魔力に煽られながら、ゼカルロス弟ははやくように言った。

「聞いてませんよ、陛下……。彼女、まだこんな力が出せるなんて……」

「この世には、いかなる結界でも封じられないものがあるのです。とくとご覧あそばせ。これがいざなぎ流——」

日輪は足で魔法円を描き、びしつと構えを決めた。

「〈女の意地〉です！」

5

「くそつたれ！　どうなってんだ！」

雷真は樹を殴った。かさかさとした枯れ葉が落ちてきた……が、それだけだ。

「走っても走っても、全然進んでる気がしねえ！」

合流地点から一二〇メートル——そこに六連はいたはずなのに。

かれこれ二キロは走っているが、戦闘の気配も、彼らの魔力すら感じない。

「雷真、この樹……さつき夜々が折った枝です！」

夜々が大きな枝を掲げ、雷真に見せた。走っている途中でぶつかり、へし折ったものだ。か

なりの大きさがあるので、見間違ひとも思えない。

「じゃあ、何だ。俺たちはずっと……同じところを走ってる……のか？」

ぞつとする。それでは怪談だ。

だが、魔術を用いれば——不可能ではない。

先ほど小紫が言っていた。「耳栓されてる」、『目が回る』感じがすると。

おそらくは敵が、雷真の道を阻んでいる。

焦燥感で神経が焼ける。こうしているあいだにも、昂や六連、そして日輪が……。

「くそ！ もういつそ、ここいら一帯を更地にしちまうか……!?」

「実に愚かな思考ですね」

冷やかな言葉が頭上からかかる。

雷真と夜々は瞬時に飛び退き、臨戦態勢で声の方を見上げた。

「おまえはマスターの（敵）——とも呼べぬ小物です」

そこに、黒いドレスをまとった乙女型自動人形——火垂がいた。

感覚が鈍っていたせいだ。彼女の存在に、雷真も夜々も気付かなかった。

ヴェール越しなので表情が読めない。が、どうやら、雷真を蔑んでいるらしい。

「撫子……」

「この程度の遮蔽結界も突破できず、まして感知もできない。おまえがマスターに仇なす存在

とは、私には考えられません」

「遮蔽結界だって？ そんなものが——」

講義で習った……気がする。だが、詳細が思い出せない。

真面目に〈学生〉していなかったことを、今初めて後悔した。

懊悩する雷真を嘲笑うように、火垂が声のトーンを変えた。

「結界の内側に入りたいですか？」

すうと闇から染み出すように、雷真の背後に別の乙女が現れる。

鎌切——空間転移の魔術回路を搭載した自動人形だ。

夜々が驚き、身構える。雷真は夜々を手で制し、火垂を見上げて問いかけた。

「思わせぶりだな？ 俺たちを連れてってくれるのか？」

「おまえがそれを望むならば」

あっさり肯定され、雷真は面食らった。

「……俺を手伝って、あいつに何の得がある？ 学院長の命令か？」

土門日輪の生死など、マスターには無関係です。マスターはただ、おまえの〈紅翼陣〉が成

長したのか、その一点にのみ興味をお持ちです。無益な興味です」

はつきりと言う。それゆえに、雷真は信じる気になった。

「……やってくれ」

「雷真！ 正気ですか!?」

夜々の声が裏返る。夜々の恐怖、そして非難はもつともだ。

鎌切の魔術に身を委ねるのは、雷真にとっても恐怖以外の何ものでもない。火山の中や、深

海に放り込まれるかもしれない。

だが——冷静に考えてみる。

もしも雷真を殺したいだけなら、こんな回りくどいことはしない。マグナスにその気があるなら、正面からそうできるだけの力がある。

マグナスは——兄は雷真など齒牙しがにもかけていない。こちらが一方的に憎んでいるだけだ。兄にとってこの世は、自分の役に立つか、立たないかの二分法……。

だから、雷真は言った。

「さあ！ 俺おれと夜々を（敵）の前に連れて行け！」

火垂はたるはじつと雷真を見つめ——そっと手をあげ、鎌切に合図を送った。



Chapter 7 正義を謳う神姫

1

「やれやれ、その怪我でまだ動くか……日本人つてのは丈夫にできてるのか？」

エドマンドがあきれたように、だが感心したように笑う。

視線の先には、血まみれの昴と六連がいた。息も絶え絶えといった様子で、背中合わせに立っている。昴はわきばらの肉をえぐられ、六連は腕と足に傷を負っていた。ざっくり裂けた制服から、おびただしい血があふれている。

「何や、あいつ……かったいにもほどがあるわ！ 何もかんも効かんやないか！」

昴が腹に据えかねたように叫ぶ。途端に傷が広がり、怒声はうめき声に変わった。

昴が言っているのは、エドマンドの自動人形——イカロスのことだ。

イカロスはまったくダメージを受けていなかった。黒い外装ははがれたものの、内部の着いた装甲には傷一つない。爆破攻撃は無効。射撃は表面をつるとすべり、はるか後方へ流れてしまふ。接近戦を挑んだところで、謎の〈切断〉能力で迎撃される。

正直、打つ手がない。

「そっち、どんな按配や、六連」

「あかんね……もう魔力がスッカスカですわ」

「根性ないな……こつちもや！」

二人の魔力が尽きれば、式神も力を発揮できない。下手をすれば暴走だ。

「こら……いよいよ覚悟決めとかなあかんのとちやいます？」

「阿呆ぬかせ。そんなもん、とつくに決まっとる」

「そうどしたなあ、はは」

絶体絶命の窮地で笑い合う二人。エドマンドは興味深そうに二人を眺め、

「死をも辞さないその忠義、気に入った。おまえらみたいな〈烈士〉には言うだけ無駄だが、

一応は訊いておこう。俺のものになる気はないか？」

「……あ？ 何やて？」

「悪いようにはしない。俺はいずれこの世界を手にする男だ。おまえらの主も救ってやるし――

――そうだな、極東の島国をくれてやる」

あまりと言えばあまりの大言壮語。昴は思わず、六連と顔を見合わせた。

「……こいつ、本気か？」

「本気だとも。さあ、どうする？ パカでもわかる問題だろう？ ここで俺に殺されるか、主

のために国を盗ってやるか」

芝居がかった仕草で二人に指を突きつけ、次いで自分の胸を親指で示す。

「俺についてくるのが正解だ。なぜなら、俺こそが唯一無二の正解だから」

鼻で笑おうとした昴だが、迷いがかすめた。

こいつに従えば――お嬢は助かるかもわからん。

それに、従うフリでも意味がある。少なくとも、時間稼ぎにはなる。

「主ともども俺のものになれ。なに、俺はライシンも手に入れる。俺のもとで仲良く世界大戦の駒こまになれよ。きつと楽しいぜ。……そうだな、おまえらの主、いつそ俺が娶めとるのも面白い。おまえらの一門、相当に使えるんだろう？」

その瞬間、昴の迷いは晴れた。清々しいほどあつさりと。

「顔つきが変わったな？ 腹が決まったのか？」

「おかげさんでな。おまえみたいなんとお嬢がくつつくやと？」

虫唾むしずが走るわ！ あいつが惚ほ

れとる男はな、おまえと同じくらいのア呆あほうやけど——」

燃えるような殺気を込め、怒りに任せて言い放つ。

「おまえに比べりゃ、千倍マシや！」

王子は怒るでもなく、楽しげに笑った。

「小気味いい返事だ。俺が認めてやるよ——おまえら、いい死しに様さまだった！」

イカロスがこちらに突進してくる。かまいたちか、それとも魔力の刃か。いずれにせよ、イカロスの手刀は必殺の威力を秘めている。イカロスの一撃が、二人の上半身と下半身をわかれわかれにしようとした——まさに、そのとき。

びたり、とイカロスの動きが止まった。

「……やるな。一体、どうやった？」

エドマンドが硬い声で問う。そのすぐ後ろに、六連むつらが出現していた。

今の今まで確かに昴のとなりになっていたのに。六連はエドマンドを羽交はがい絞じめにして、動きを封

じていた。その足もとには、黒い絨毯じゅうたんのようなものが広がっている。

「(問土里) ゆう式です。雌雄しゆう一対いったいでしてね、雄おすから雌めすに転移てんしが可能です」

「なるほどな……油断したのは認めるし、後ろを取ったのは誉めてやる。だが、ここからどうする？ この体勢ていせいじゃ印いんを結ぶこともできないぜ？」

「でもほら、僕の式ならもう、ここにおりますし」

そこで、昴も気付いた。六連の腕が真っ黒に染まっている。

極楽蝶の憑依ひょうい！ 最後の一羽が六連の腕に染み込み、溶けるように消えた。

「人形はノーダメでしたけど——操者あんたはどうですかね、王子はん？」

「……俺と心中するつもりか？」

汗が一筋、エドマンドのこめかみを伝う。昴もまた、焦って叫んだ。

「ド阿呆あほう、六連むつら！ 阿呆あほうな真似まねすな！」

「こうなっただんは全部、僕のせいですやん。六角法陣結界をこさえたんは僕ですし……。こんなお人にまんま利用されて、お嬢をいらん危険にさらして……こうでもせんと申し訳立たんわ。でもなあ、僕はやつぱり、雷真らいしんはんやのうて……」

ふっ、とやわらかく微笑ほほえんで、六連は言った。

「昴に、お嬢とくつついて欲しかった」

昴の視界がぼやけた。

戦闘中だというのに——泣けてきた。

そんな……そんなくだらんことのために、おまえは。

俺おれなんかのために……！

「大した覚悟だ。だが、甘えよ！」

エドマンドが右手を閃ひらめかせる。袖そでの中からダガーが飛び出し、見事、右手に収まった。エドマンドは六連の集中を乱すべく、ダガーを眼球に突き立てようと――

その腕を、昂きようが押さえた。

エドマンドが驚愕きょうがくに目を見張る。十数メートルの距離を一瞬で詰めた！

昂の足もとにも、六連と同じように、〈間土里まどろ〉が出現していた。

「昂、あかん！ 爆破に巻き込まれますよ！」

「言うところの場合か。……大体なあ、おまえだけ逝いかすわけないわ」

六連は表情をゆがめ――そして、笑った。

「こら、お嬢に叱しかられますね」

「いつもと逆やな」

くくつと笑い合う。エドマンドがもがき、イカロスと呼び寄せる――

だが、遅い。六連はもう、魔力の集中を終えている。

（お嬢。幸せになり……！）

昂は目を閉じ、死の訪れを待った。

――だが、一向に爆発する気配がない。

不審に思っ、薄目を開けると、六連が苦しげに身をよじっていた。

いざなぎ一門の眼力が異変を見抜く。六連の魔力循環系が乱されている！

敵はその隙を逃さない。昴の背後にイカロスが迫る——やられる！

がこつ、と鋭い衝撃音が響き、猛烈な風圧が昴の後頭部を打ちすえた。

隙が生じた一瞬に、エドモンドが暴れ、昴と六連を振りほどく。際どくダガーをかわし、あわてて振り向くと、背後に迫っていたはずのイカロスがいない。

めきめきと音を立て、林の中で樹が倒れる。

イカロスが上下逆さまになって、幹をへし折っていた。

何が起こったのかわからず、驚く昴の眼前に、ふわりと黒髪が広がる。

二つの影が着地する。それは可憐な乙女型自動人形と——

「つたく、水臭いんだよ、おまえら。俺に黙ってバカやりやがって」

七年前に見たのと同じ、やんちゃ坊主の背中だった。

込み上げる笑いをこらえ、昴は吐き捨てるように言った。

「上から言うな！ おまえかてコソコソ嗅ぎ回ったやないか！」

「じゃあ、言い直す。バカをやるなら、一緒にやろうぜ」

雷真がエドモンドに向き直る。エドモンドは嬉々として両手を広げた。

「会いたかったぜ、ライシン。おまえに命を救われるのは二度目だな？」

「よう、バカ王子。議長さんの物真似なんかして、どうしたよ？」

「ちよいと学生気分を味わいたくてね。おまえが現れたってことは、ゼカルロス——兄貴の方はやられちゃったようだ」

からめとるような視線を雷真の体に這わせる。

「あいつは相当の腕前だったし、一級品の自動人形が支給されていたはずだが？」

「あいにく、俺の相棒は世界一の自動人形だ」

「ふふ……俺が認めてやるよ、ライシン。今のおまえは」

両者の魔力が膨れ上がり、あたり一帯を覆い尽くす。

「その相棒に相応しい、一級品の魔術師だ」

イカロスの装甲が月光を弾き、次の瞬間、蒼い閃光が闇を裂いた。

2

祭文を唱えながら、日輪はふところから短刀を抜き、天に掲げた。

左手のみで〈刀印〉を結び、大音声で呼ぶ。

「三万三千式の王、式大権現式王子、きたりませ、きたりませ——きたりませ——きたりませ征！」

真正正銘、全開の魔力。自滅しないための自発的なミッターまで解除した。文字通り渾身の魔力を放出して、魔性の短剣を振り下ろす。

白銀の刀身は一瞬で漆黒に染まった。どす黒い妖気がほとばしり、それは紅蓮の火炎を噴き上げ、巨大な式神となる。

黒鉄甲冑を身にまとう、炎を帯びた鎧武者。

日輪は今、式王子の腕に抱かれている。あるいは胎内にいると言うべきか。それとも、一体化して、化身となったと言うべきか。

日輪を胎内に抱え、うずくまる魔神。四つん這いになっているのに、その巨体は天井に届き、フロア全体を埋め尽くしている。だが、それでも本来の姿にはほど遠い。例の結界のせいで、式王子はかなり弱体化していた。

シャルが日輪——式王子に近付こうとして、凄まじい熱気にあぶられた。

「ヒノワ——ああっ！」

「下がれ、シャル！ 死ぬぞ！」

シグムントが警告する。さすがのロキも目をむいていた。シャルとロキにとっては炎熱地獄だが、あの二人なら耐えてくれるはず……。

「これはまた、とんでもない化け物ですね……」

対戦相手のゼカルロス弟が、あきれたようにつぶやいた。迫りくる炎を〈風〉でしのぎながら、呆然と式王子の巨軀を見上げている。

「これって……攻撃、効くんですか？」

ものは試し。ぐっと魔力を練り上げて、巨大な〈風の刃〉を繰り出した。

黒鉄甲冑が受け止める。内部の日輪には、蚊に刺されたほどにも感じなかった。

「ですよねえ……」

もはや笑うしかない、という顔で、ゼカルロス弟は苦笑した。

「でも、黙って見ているわけにはいきませんよね。こんな見え透いた時間稼ぎ……貴女の魔力を消耗させるには、攻撃するのが手っ取り早い！」

言うが早いか、矢継ぎ早の烈風攻撃を加えてくる。

(……侮れない相手ですね)

日輪の攻撃宣言がハツタリで、この召喚が時間稼ぎだと、瞬時に見抜いた。

そう——日輪にはもう、式王子に攻撃を命じるだけの魔力ちからがない。

戦艦の主砲をピストルの火力で撃ち出すことはできない。そして、たとえ魔力が潤沢だとしても、攻撃させるわけにはいかない。この閉鎖空間で攻撃を命じれば、敵は確実に死ぬ。戦艦の主砲は、煙草たばこに火をつけるのに適さない。

だから、これは攻撃用ではない。これは相手の攻撃を百パーセント無効化するための鎧よろい、そして、相手の目を欺く隠れみのだ。

日輪は式王子の中でさらに印いんを結んだ。式王子の外、フロアの片隅に落とした呪符が、日輪の呼びかけで式神しきごみとなる。

それは小さな小さな、〈てんとう虫〉だった。

てんとう虫は壁際を飛んで、そろそろと塔を抜け出す。

向かう先は、もちろん昴すばると六連むつるのもと。二人の状況を見極めなければならない。場合によっては救援を呼ぶ。学院には優秀な魔術師がたくさんいるのだ。

無力感を味わった今、ようやく、他人を頼ろうという気持ちが生えていた。

日輪はてんとう虫をコロセウムの外まで飛ばし、自分の五感を同調させた。

あたりを探してみるが、おかしいことに、戦闘の気配をまるで感じなかった。

昴と六連はまだ生きている。二人の魔力をほのかに感じる。だが、居場所がつかめない。先ほどゼカルロス弟が聞かせてくれた戦闘音も、全然聞こえない。

（これは遮蔽結界……!? これほどの精度で……厄介な!）

これでは通常の魔力探知が働かない。……が、いざなぎ流は占術も一流だ。日輪は感覚を研ぎ澄まし、直感的に方向を選んで、すぎるような気持ちで飛んだ。

日輪の勘は、日輪を裏切らなかった。

ばふっ、と網に飛び込むような感覚があつて、遮蔽結界の中に飛び込む。

内部に入った途端、昴と六連、そして愛しい人の魔力を感じた。

——昴! 六連!

見つけた。二人とも、まだ生きている!

二人は戦っていない。茂みの中にうずくまり、樹にもたれて休んでいる。

日輪は瞬時に二人の容態を見極める。二人とも裂傷を負っている。すっぱり切れた切り口は、

刃物による傷ではない。かまいたちか、何か……。

そして、傷ついた二人の前に、彼らをかばうように立つ背中があつた。

（雷真さま……!）

雷真と夜々だった。たった今駆けつけたところなのか、昴が鋭い注意を飛ばす。

「氣イつけや、雷真! そいつの自動人形、かったい上にスパスパ切れる」

「ああ、わかつてる。自動人形イカロス——知った顔だよ」

雷真の瞳が蒼い装甲を見据えている。イカロス……という名前か。

イカロスのとなりには、数か月前にメディアを沸かせた貴公子が立っていた。

（あれは、叛逆の王子!）

シャルに聞いた話では、エドマンドのリヴァプール占拠を妨害したのが雷真だ。怨敵と言っ
てもいはずだが、エドマンドの顔には親しげな微笑があった。

「元氣そうでよかったぜ。ま、おまえに限ってくだばるわけもないがね。俺のマブダチと一戦
やって、まだ生きてるような奴だ」

「……〈焼却の〉魔王、ライコネンのことか？」

「そうそう。おまえのおかげであいつはミツシヨン失敗だ。結社のババアどもにこつてりしは
られちまつて、あれは傑作——もとい、気の毒だった」

「……何なんだ、おまえら」

雷真の声が震える。らしくないほど、いら立っている。

「俺に何の用がある！ なぜ首を突っ込んでくるんだ！」

「おっと、それは自意識過剰だな。ババアどもにしてみりや、おまえは『ついで』の観察対象
にすぎない。俺にとっては本命だがね」

「回りにくい言い方はやめろ！ こいつらを——日輪をどうするつもりだ？」

「始末するさ。もつとも、始末したことにして、俺の女にしてもいいんだが」

その瞬間、雷真の瞳に怒りが燃え上がるのを日輪は見た。

沸点を超えたいしい。怒髪天をつく憤激。激情が雷真の全身を駆け回り——

あるいはその熱量ゆえに、冷静さを取り戻す。

雷真は深く息を吸い、ゆっくりと吐いた。

挑発が不発に終わったのを悟り、エドマンドはむしろ喜色を浮かべた。

「そう、それでこそおまえだよ。褒美に教えてやろう。姫君の死体は神性機巧の鍵となるのさ。タマゴメ——つったか？ あの秘術を解析すりゃ、〈イブの心臓〉なしに〈靈魂〉を与えることができる。その上、次期当主を殺しちまえば、イザナギの連中に痛撃を加えられるだろ？」

「いざなぎ一門に、痛撃……だと？」

「もう聞いてるんじゃないか？ 世界大戦が起きようつてときに、イザナギのバカどもは家督争いの真っ最中でね。ババアどもが既に仕掛けを打ってある」

日輪のてんとう虫がびくりと跳ねた。

仕掛け。家督争い。まさか、お婆さまに何かあったのでは……!?

ときどき、ときどきと心臓が暴れて、集中が乱れそうになる。

雷真はエドマンドから目を離さず、おし殺した声で訊いた。

「……おまえが言う結社ってのは何だ？ どここの魔術結社だ？」

「断りなしに〈結社〉と言えば、一つしかない。老害どもの万魔殿、狂信者の巢窟、異端と変態の楽園——俺が言うのも滑稽だがね」

雷真は理解できなかったようだ。すつと、となりの夜々に右手を向けて、

「つまり、教えるつもりはないんだな？」

「じっくり語ってやってもいいぜ。おまえが俺のものになるなら」

「じっくり語ってもらうとするさ。てめえをぶっ飛ばしてな！」

雷真が魔力を放つ。それは夜々の五体に流れ込み、一瞬で瞬発力に変換された。

夜々がイカロスに突っ込み、ぐにやりとゆがんで、反対側に突き抜ける。

「すり抜けよった！」

昴が驚愕の声をあげる。その残響が消える前に、イカロスが振り向き、鋭い手刀を繰り出した。空気が――空間そのものが裂け、夜々の袖を切り飛ばす。

金剛力が貫かれ、夜々の肌に赤い線が走った。

斬られた。鋭利すぎる切断能力――昴たちの傷とも一致する。

相手の攻撃をすり抜け、万物を切り裂く魔術。これは――

（いけません、雷真さま！ その自動人形に、夜々さんでは勝てません！）

いなざぎ流次期当主の慧眼が、相手の本質を見抜いた。

イカロスには攻撃が通用しない。だが、それは決して〈硬い〉からではない。

空間歪曲。空間をゆがめて、爆破も打撃もやり過すことができる。

その一方、空間のつながりを断ち切ることで、夜々のボディさえ切断できる。

攻防一体の恐るべき魔術だ。夜々の〈金剛力〉は物理防御と物理攻撃を徹底的に高めるが、

あいにく直接攻撃しかできない。これでは相性が悪すぎる！

日輪は雷真が逃げてくれることを願った。

だが、雷真が絶対にそうしないことも、日輪にはわかっていた。

夜々の着地際を狙い、イカロスが地を蹴って飛ぶ。鉤爪のように開いた指が、それぞれ空間

を引き裂きながら、夜々に迫った。

（あぶない！ 夜々さん――！）

血圧が下がり、気を失いそうになる。そんな日輪の視野から、ふっと夜々が消えた。

——違う！ 消えたと錯覚するくらい、速い！

標的を見失うエドマンド。その背後に、もう夜々が回り込んでいた。

エドマンドも驚いたようだが、日輪も驚いた。いざなぎ流次期当主の第六感を、一瞬、夜々の速さが凌駕した。単に筋力を増強しただけでは、こうはならない。相手の予測の裏をかき、認識の死角を突いたのだ。

後方に一回転しながら、夜々が蹴りを放つ。必殺の一撃だったが、敵も素人ではない。エドマンドはとっさに身を反らしてかわした。

反転した夜々が再び突っ込む。だが、今度はイカロスが間に合っている。

エドマンドをかばうように前に出て、鋭く手刀を一閃させた。

それはあたかも伝説の聖剣のように大地を割る。夜々の髪が切られて舞い、きらきらと月光を弾いた。夜々は手刀をかわしざま、独楽のように回転した。

イカロスに蹴りを見舞う。ぎんつ、と金属が鳴り、イカロスの胸当てが砕けた。

「当てよかった!? 効いとるやないか!」

驚愕する昴。割れた胸当てが飛んできて、昴と六連はあわてて逃げた。

エドマンドは薄笑いを浮かべ、皮肉っぽい視線を雷真に向けた。

「教えて欲しいもんだな。今のは俺の油断か? それとも、神の気まぐれか?」

「どっちも否だ。単に、タネが割れたのさ」

そう言った雷真の右腕には、複雑怪奇な紋様が浮かび上がっていた。

制服越しに魔力の流れが浮き出して見える。迷宮のように入り組んだ、見たこともない呪式

だ。その経路を通じて魔力は加速し、収斂し、雷真の指から魔力の糸——こちらは知っている

——〈紅翼陣〉の糸が走る。

糸が夜々に触れた瞬間、夜々の力は数倍に跳ね上がった。

紫電のように動き、イカロスに肉迫。至近距離で真上に跳躍、虚を突いて頭上から蹴りを放つ。イカロスは空間をゆがめて後方へそらす。夜々の蹴りをすり抜けた直後、反撃の貫き手を繰り出してくる——それが、雷真の読み通りだ。

夜々は空中で身をそらし、貫き手をかわしざま、かかとを落とした。

がこんつ、と直撃。兜の角飾りが折れ、地面に刺さる。

「機能的には可能なかもしれないが——あんたは〈歪曲〉と〈切断〉を同時には使えない。あるいは、『ひとつの対象にしか』適用できない」

雷真は勝ち誇るでもなく、冷ややかに言った。

「効果範囲を見切っちゃまえば、こっちの攻撃も当たるって寸法だ」

日輪の背筋に震えがきた。確かに、簡単な理屈だ。攻防の切り替え不全——その弱点は多くの魔術が抱えている。だが、イカロスの動きは俊敏で、夜々を一撃で倒せる攻撃能力がある。

この状況でカウンターを当てるなど、言うほど簡単なことではない。

夜々の柔軟性や瞬発力、たぐいまれな魔力親和性——そして、その性能を目一杯に引き出す

〈紅翼陣〉があつて初めてできることだろう。

追い詰められたはずのエドマンドは、屈託なく笑い出した。

「さすがに成長が速い！ イカロスを使っても、もう俺では敵わんね！」

先ほどとは別の意味で、日輪に震えがくる。この男は……気味が悪い。何を考えているのか、全然わからない。理解できない……。

雷真も同じことを考えているのだろうか。わずかに身を退きながら、

「投降しろ。俺は英国には義理も恩義もない。大人しく投降するってんなら」

「そうあわてるな。ここは天下の王立機巧学院、俺を叩きのめせるくらいの奴はゴロゴロいるんだ。なのに、何の準備もなく侵入すると思うか？」

「何……だと？」

「当然、チートアイテムを持ち込んでる」

ポケットから小さなビンを取り出す。

その中に、宝石のように美しい、エメラルド色の液体が入っていた。

見た瞬間に、悪寒を感じた。いや、畏れかもしれない。即身仏や聖骸と対峙したときの、あの畏怖に似ている。

「神酒アストライア——カクテルとして名付けらるなら〈Lady Justice〉ってところか。おまえにもわかるように言うと、〈無限連鎖反応〉の霊薬だ」

アルファサイクル……とは何だろう？

日輪には理解できない単語だったが、雷真と夜々にはわかったようだ。

「イオが研究してた……アレか！」

「おっと、勘違いするなよ。イオは確かに天才だったが、あいつが実現したのは基礎理論まで。機巧ではなく化学でこれをやったのは、結社の天才たちだぜ？」

にやりと笑い、親指でコルクの栓を抜く。

「口で説明するより、見せた方が早いだろ。おまえみたいな奴にはさ」

あつと思う間もない。エドマンドは顔を上げ、舌の上に液体をぶちまけた。

飲み込んだ瞬間、爆風が生じた。昴と六連がなぎ倒され、転がる。日輪のてんとう虫も激しく揺さぶられ、あわや破壊されるところだった。

爆風の原因はエドマンドの魔力だった。

魔術でも何でもなし。圧倒的な魔力、みなぎる気力、噴き上がる精神の波動が、物理的な衝撃を生み、周辺の空気を吹き飛ばしたのだ。

木々がざわめく。敵の遮蔽結界さえ、悲鳴をあげている。人間の限界を超えている……なんて言葉が白々しく聞こえるほど、途方もない出力だった。

「何や、これ……ケタ違いやないか……!」

「こら、あかん……息が……詰まる……!」

暴風にあおられ、昴と六連が苦しげにうめく。体内の魔力循環に悪影響が出ているのだろう。傷に響くのか、二人とも苦悶の表情だ。ここには危険だが、これはもう魔力の乱気流――

この中を走って逃げるだけの体力がない。

無論、雷真は逃げる素振りを見せなかった。

あのとさと同じだ。昴と六連、そして日輪に背を向け、敵と向き合っている。

(ああ、雷真さま……!)

こんな怪物が相手でも。貴方は……。

「夜々！ 光焰四八結！」

「はい！」

紅翼陣の糸を受け、夜々が走る。こぶしを繰り出し、蹴りを放ち、手刀をかわし、イカロスに追いつがる。先ほどと同じように見えて、決定的に違う点があった。

エドマンドが操る魔術は、その効果範囲、起動速度を大幅に向上させていた。〈切断〉と〈歪曲〉を同時に行っている。つまり——夜々の攻撃が当たらない！

激しい攻防のさなか、エドマンドを照らす月光が、不意にさえぎられた。

雷真が頭上を取っている。強烈な回し蹴りを首筋に叩き込む——が、エドマンドはかわそうともせず、にやりと笑った。

がきーんっ、と甲高い音がして、雷真の脚が虚空に止まる。鉄鋼板を蹴ったような衝撃だ。金剛力を使っていなければ、脚が砕けていただろう。

苦痛に顔をゆがめながら、雷真がはね飛ばされて戻ってくる。

エドマンドは楽しげに笑って、虚空を撫でるような仕草をした。

「空間歪曲つてのは何も飛び道具をそらすだけじゃないんだ。そら、こうして地下の鉱床と接続することもできる。——魔力があれば、だがね」

イカロスが腕を振る。地面が大きく波打って、いきなり断層が生じた。

不意を突かれ、雷真がバランスを崩す。そこに、イカロスの手刀が襲いかかった。

逃げる雷真を断層が邪魔する。ついに空間の歪曲につかまり、胴体をねじ切られそうになるのを、夜々が横っ飛びでかつさった。

「……悪い。助かったぜ、夜々」

「夜々は雷真の妻ですから！」

戦闘中であることも忘れ、日輪は「むっ」とした。

「どうだ、ライシン。この力は素晴らしいだろ？」

エドマンドは両手を広げ、酔ったような声で言った。

「俺みたいな二流の魔術師にこれだけのことができる。感じるだろ？ 今の俺には、あのラザ

フォードを超える魔力がある！」

雷真はじつとエドマンドを見据え、ため息をついた。

「……らしいな。だが、学院長の方が百倍怖いぜ」

「それは同感だがね。この不利をどう覆す？ おまえの相棒はうっとりするほど優秀だが、イ

カロスの〈空間歪曲〉に、もう太刀打ちできない」

「学院の劣等生がお偉い王子さまに教えを垂れてやるぜ。魔術の有用性を決めるのは性能の優

劣じゃない。使い方と使いどころ——なんだとよ」

「面白い。実践して見せろ！」

視線でイカロスに魔力を送る。一瞥しただけで、雷真の紅翼陣に匹敵するほどの魔力が流れ

込んだ。イカロスの魔術回路が即座に起動、絶大な魔術効果を発揮する。

大地が裂け、一部は塔のように高く、一部は穴のように深くなる。空間の連続性が失われ、

上下左右のつながりがバラバラになる。抽象画の世界のような光景だ。どっちが下で、どっち

が前かもわからない。敵との距離もつかめない。雷真は崖に直立し、夜々は上下逆さまに立つ

ている。これではイカロスの攻撃に対応できない！

だが、雷真の声は徹頭徹尾、落ち着いていた。

「森閑絶衝、〈神機御雷〉」

夜々が腰を落とす。歪んだ空間を跳躍し、一瞬で肉迫するイカロス。その攻撃をかわしざま、

夜々はイカロスの手刀をつかみ——触れた！

イカロスの腕をひねり、足もとに叩きつける。夜々は全身の筋力を爆発させ、無防備なイカ

ロスにこぶしを撃ち込んだ。

——いや、今度は当たっていない。イカロスは夜々の一撃をすり抜けた。

大地が砕け、火山の噴火のように、土砂が大量に噴き上がる。

「イカロスの腕をつかんだところまでは誉めてやろう。今の俺にはありあまる魔力があるが、

さすがに判断力までは上がっちゃいない。虚を突かれれば——」

エドマンドの言葉が止まる。

土砂の動きが、ひどくゆっくりに見えた。

舞い上がる土砂と、地形変動のせいで視界が悪い。その中をどう動いたものか、最初に雷真

が姿を消し、そのことに気付いた瞬間、夜々の姿も消えていた。

日輪も。昴も。六連も。そしてエドマンドも。全員が二人を見失った。

「——やっぱ、そうか」

舞い上がる土砂の中、雷真の声は不思議とはっきり聞こえた。

「どんなに魔力を底上げしても、〈第六感〉は上がってねえのな？」

雷真はエドマンズの真後ろにいた。

エドマンズが弾かれたように振り向く。だが、声をかけたのは陽動だ。

岩盤を叩き割り、夜々がイカロスの背後に出現する。エドマンズは〈空間歪曲〉を起動したようだが、ばこんっ、と爽快な音とともにイカロスが吹っ飛ばされた。

岩盤に叩きつけられ、ヘルメット状の頭部が半壊する。

（当たった！）

日輪は思わず息をのむ。目の前で起こったことが信じられない。

だって、理屈に合わない。敵の魔術は発動したはずだ。それなのに――

エドマンズの顔から笑みが消えた。

「面白い手品だな。……今度は一体、どうやった？」

「手品師がタネをバラすと思うか？」

「……報告書にあったな。〈迷宮の〉魔王直伝の裏技――さっき俺の命を救ってくれたのもそれだろう？」

雷真は答えない。だが、その沈黙は肯定と同義だ。エドマンズは再び笑って、

「だったら理屈は簡単だな。どっちの支配力が勝るかって話だ」

「ごっ、と魔力の炎が噴き上がる。またも爆風が生じ、あたり一帯にエドマンズの魔力が満ちた。空間全体が青白く染まるほどの、莫大な魔力！」

「夜々！」

「イカロス！」

二人が同時に指示を出し、二体の自動人形が同時に地を蹴った。

意外にも、夜々はイカロスと五分の死闘を演じた。魔力の総量、魔術の相性ではあちらに分があるはずなのに、夜々は的確に攻撃をさばき、いなし、相手に隙を与えない。そのくせ逃げる一方でもなく、執拗に攻撃を仕掛けてくる。

夜々の攻撃は当たる。ちゃんと、イカロスにダメージを与えている！

「……こらあかんわ、昂」

隆起した岩盤にへばりついて、六連がおかしそうに笑った。

「雷真はん——僕らとはもう、完全に別次元やん」

「ふん……それでこそ、いざなぎ宗家の婿や！」

昂もまた、痛快そうに笑っていた。

竜巻と竜巻がぶつかるような、五分の格闘はいつ果てるともなく続いた。

そうして、どのくらいの時間が過ぎたのだろうか？ 五分？ 一〇分？

今や、雷真と夜々の肌には無数の切り傷ができ、呼吸が乱れて苦しげだ。相当に消耗している。もう魔力切れが近い。

「どうした、ライシン。がっかりさせるなよ？」

エドモンドは不満げに声をとがらせた。

「わかてるのか？ 俺にはアストライアの恩恵が——無尽蔵の魔力があるんだ。もっと知恵をしほれ！ 利口な戦術を使え！ そのままじゃ、じり貧だぞ！」

「どっちの応援してんだよ、あんた……」

雷真はあきれ顔で吐き捨てた。そして、うつすら微笑んだ。

「心配ご無用だ。俺の策は、もう成っている」

「何だと？ ブラフにしても、それは興味深……い？」

がくんと力が抜け、エドマンドがいきなり膝をついた。

「どうだ、王子さま。そろそろ燃料切れだろ？」

「……俺は王宮育ちでね。おまえに比べりゃ運動不足なんだよ」

「イオのアルファサイクルは魔力を無限に増幅する——って話だった。つまり、増幅する対象がなくなっちゃえば、どうしたって止まる」

そうか——掛け算！

片方の数字がゼロなら、増幅のしようがない。

「あんたの戦い方には無駄が多すぎるのさ。木偶を操るとき、全部のパーツに念動をかけるようなやり方だ。本当は関節のごく一部、ごく一点で済むものにな」

雷真は自嘲っぽく笑う。

「常時、全開で魔力を浪費する——そんな戦い方じゃ、すぐにバテるぜ」

「……そうなるように仕向けたんだろう？ それに、浪費癖はおまえも同じだ」

「ああ、俺もそうだった。ほんの二週間前までな。だが、俺は魔王の個人授業を受けてんだ。

ちつとは伸びねーと、魔王陛下にぶっ飛ばされるぜ」

紅翼陣の糸が伸びる。夜々の五体に力がみなぎり——

「光焰絶衝——〈月影紅蓮〉」

利那、日輪は見た。雷真が指を突きつけたのは夜々ではなく——
イカロスだった。

雷真の背中から赤い霧が噴き出し、翼のように広がる。指先から伸びる魔力が呪縛の鎖となり、イカロスの体内で暴れ回った。

（魔術の妨害!? 雷真さまはずっと……これをやっていた……!?）

夜々の攻撃が命中する直前に、わずかながら相手の魔術を妨害していたのか。何という支配力！ 他人が支配する自動人形に、外部から干渉するなんて！

それは術者と人形の絆——鉄の鎖を素手で引きちぎろうとする行為に等しい。儀式でも機巧でもなく、生身でそれができる。そんな魔術師が存在するとは……。

（やっぱり……雷真さまは……お強い！）

イカロスの魔術効果が失われた、その一瞬に、夜々がイカロスの背後に出現した。あたりの空気が灼熱し、赤く輝いて見えるほどの、猛烈な蹴りを放つ。

エドモンドはイカロスの透過をあきらめたようだ。爆風が生じるほどの魔力を注ぎ込み、念動の〈盾〉を生み出す。……実に分厚い。強度は数百ミリの鉄鋼にも相当するだろう。だが、夜々の蹴りを止めるには、それでもなお足りなかった。

念動の〈盾〉を貫いて、イカロスの上半身が吹き飛ぶ。

右肩から上が砕け、はるか彼方へと消えた。

イカロスがよるめく。瞬間的に身を退いて、ぎりぎり〈イブの心臓〉を死守したようだ。賞賛すべき好判断だが、頭部を失った今、稼働レベルはガタ落ちだ。

「やりやがったな、ライシン……やっぱ、おまえは最高だ！」

エドマンドは声をあげて笑った。場違いなほど明るい笑い声が林に響く。

「だが、どうする？ おまえも今ので魔力切れだ。見ろよ、おまえの相棒を。可哀相に、もう完全にへばっちまつてるぜ？」

「や……夜々はへばつてません！」

へたり込んだまま、夜々は気丈に叫んだ。

しかし、立てない。腰を抜かしたように、その場に座り込んでいる。

雷真は慈しむような目で夜々を見て、そしてあっさりこう言った。

「いいんだよ、俺とおんたは相打ちで」

「……何だと？」

「あんたが言ったことだぜ。ここは魔術界の最高学府。すげえ奴らがゴロゴロいるんだ。俺があんたを弱らせりゃ、そいつらが必ずとどめを刺す」

「……なるほど。最初からそれも策のうちってか」

エドマンドはもう笑わなかった。その代わり、満足しきった顔でうなずいた。

「俺はもう、ほとほとおまえに惚れ込んだ」

最後の力を振りしほり、イカロスに魔力を送り込む。

まさか、最後の特技を繰り出すつもりか……!?

おののく日輪、昴、六連の前で、エドマンドはくるるときびすを返した。

「それじゃ、ここらで俺はおいとましよう」

「な——んだと!? どういうつもりだ!」

さすがの雷真らいしんも愕然がくぜんとする。日輪ひのわの胸にも不安の影が広がった。まさか、エドマンドの行動は時間稼ぎか何かで、本来の目的は既に達成している……?

肩越しに雷真を振り返り、エドマンドは軽く言った。

「おまえさつき、『何が目的だ』と訊いたよな? 教えてやるよ。俺は——あの老害どもも——
神性機巧マシンドールが欲しいのさ」

「……なぜだ」

「神の力だから」

憤怒とも悲哀ともつかない表情で、雷真が齒を食いしばった。

エドマンドがイカロスの肩につかまり、ふわりと浮き上がる。

「もっとも、俺の興味は〈兵器〉としてのそれだ。神性機巧は人機和合——伝説級と魔王レジェンズ ウィズマンが組んだに等しい。そいつらを俺好みにオーダーメイドして、戦力として扱えば、天下も近付こうつてもんだろ?」

「……俗物だな。あきれるほどに」

「そうとも。そして帝王とは、俗物を超えた先にある」

悪びれもせずに言い切る。意外にも、それは覚悟を秘めた言葉だった。

エドマンドが遠ざかる。雷真は我に返り、追いかけようとした。

「雷真! 無理しないでください!」

夜々ややが腰にしがみつく。それだけのことで、雷真は地面に手を突いた。

「——おいクソ王子！ おまえの目的はわかった。だが今夜は何しにきたんだ！」

「もちろん、おまえの顔を見にきたのさ」

「ふざけるな！ それだけのことで……日輪を殺すつてのか!?」

「そっちはババアどもの事情だと言ったろ。俺はおまえと遊んでりゃよかったんだが……強い
て言えば、見せたかったんだよ、おまえに」

「……何を？」

「おまえ、復讐ふくしゅうがしたいんだつてな？」

雷真の表情が凍りつく。冷たく、容赦のない——日輪の知らない顔だった。

エドマンドはにやりとして、

「いいねえ。好きだぜ、そういうの。で、その復讐は果たせそうか？」

「……………」

「だろうな。何せ相手は、この学院が持て余すほどの超天才——マグナスだ」

「……それがどうした！」

「力が足りないと思うなら、俺のもとにこい」

そうか、と思った。そうだ。エドマンドが「見せたかった」ものは——

「……さっきの薬を俺おれにくれるつてか？ そりゃ気前のいいことだ！」

吐き捨て、地面を殴る雷真らいしん。心の底から相手を軽蔑けいべつしている。

エドマンドは構わず、雷真に向かって何かを投げた。

めくれた土の上に転がったのは、薔薇ばらの意匠いしょうが施された、金の指輪だった。

「やるよ。おまえが力を欲するとき、〈メルクリウス〉の導きがある」

「メルクリウス……？」

「近々、使いを送ってやる。返事はそのときに聞かせろ」

じゃあな、と手を振って、エドマンドはイカロスを飛ばした。

イカロスが一瞬で加速、結界を突き破って飛翔する。そうして、エドマンドは消えた。勝手に戦いを起こして、勝手に納得して、勝手に立ち去った。

戦いが終わり、緊張の糸が切れる。

夜々が目を回し、こてん、と倒れ込んだ。

そんな相棒を優しく抱き起こし、雷真は昂、六連の方をうかがった。

「動けるか、二人とも」

昂は砕けた岩盤にもたれ、苦しげに怒鳴った。

「無理に決まっとるやろ阿呆！ こっちは大怪我しとんのや！」

「じゃあ、止血して休んでろ。俺は日輪のところに行く——」

「阿呆ぬかせ！ 俺かてお嬢んとこ行くわ！」

「動けないんじゃないのか!? どっちだよ！」

「あはは……元気やなあ、二人とも」

言い合いながら、全員がゆっくりと起き上がり、歩き出し、やがて駆け足になって、林の中を急ぐ。向かう先はコロセウム——日輪がいる、この塔だ。

日輪の胸に熱いものが込み上げた。

激しく、優しい、よくわからない感情が胸をいっぱいにする。泉のように湧き出して、胸を満たし、あふれ、日輪の体をあたたく包み込む。

あんなにほろほろになって、それでも、わたくしのもとに急いでくれる。彼らの気持ちが嬉しい。嬉しくて嬉しくて、どうしようもないくらい。

（雷真さま……日輪はもう……このまま死んでもいいくらいです）

日輪は幸せな気分で微笑み――

そっと、てんとう虫の目を閉じた。

Epilogue 罪過の自覚 # 2

林の中を駆けるうち、突然、まがましい気配が襲ってきた。

濃密な妖気。靈感の強い者なら、当てられて霊障が出るかもしれない。

「お嬢、まさか……！」

昂が足を速める。もちろん雷真も続く。

一行がコロセウムに突っ込んだとき、観客たちは静まり返っていた。

そびえ立つ塔の外壁、オルガが設置したパネルを見上げる。映し出されていた映像は、黒い

——巨人のようなものだった。

昂は口を半開きにして、かすれ声で言った。

「式王子……！ なんちゅう無茶を……結界中であれを降ろしたんか！」

「雷真！ 画面に日輪さんの姿が見えません！」

夜々の悲鳴を聞くより早く、雷真はもう駆け出していた。

もつれる足を無理やり動かし、塔に飛び込む。無論、夜々と六連もそれに続いた。我慢できなくなったのか、参戦前の昂さえ、執行部の制止を振り切ってついてくる。

階段を二段飛ばして駆け上がり、四階へ。フロアに飛び出した瞬間、妖気とともに熱風が吹きつけ、肺が焼けた。呼吸をするのもひと苦労だ。

黒い巨人は、フロアの大部分を占拠して、うずくまっていた。

爆発寸前の巨大爆弾を見ているような畏怖を覚える。手の出しようがない。先に戻っていた

フレイと、シャル、ロキも、遠巻きに眺めているだけだ。

対戦相手のゼカルロス弟はまだ生きていた。巨人の向こう側で、押し寄せる熱波を必死に（風）で押し返している。美しい金髪が汗でよれよれだった。

「お嬢！ 式王子の機嫌が悪い！ ちゃんと制御せえ！」

「ちよつと、どういうこと!? ヒノワはどうなってるの!？」

シャルが昴と六連に詰め寄る。二人は顔を見合わせ、苦しげに答えた。

「式は便利やけど、ひとつ、そこらの自動人形とは違うリスクがある……」

「精霊使い、ゆうのんと同じです。式は（神鬼）—— 本来は人間がどうこうでけるたぐいのものやない。それを魔力^{ちからず}尽くで従わせとるだけや。せやから……魔力が尽きれば、支配が解かれ

—— 好き勝手に暴れ出す」

「そんな……!」

「おいコラお嬢！ 結界は壊したで！ はよ王子を帰せ!」

—— 反応がない。雷真はらしくもなく取り乱し、昴につかみかかった。

「何で返事がないんだ！ 結界は壊れたんだろ!？」

「やめなさい、バカ！ 貴方^{あなた}たちみたいな体力バカと一緒にしないで！ ヒノワは女の子なのよ？ もう力が残ってないんだわ!」

する、と雷真^{らいしん}の手から力が抜けた。魔力の総量で言えば日輪^{ひのわ}の方が上だが、魔力が尽きたのだとすれば—— 雷真にはもう、どうしようもない。

「……なら、どうすればいい?」

するような気持ちで、昴と六連を見つめる。

「日輪を救う方法はあるんだろ？ この化け物をブツ殺せばいいのか？」

「……無茶言うな。王子は生き物ちゃう。殺せるわけない」

「じゃあどうする！」

「落ち着け！」

一喝されて、冷静になる。雷真はこぶしを握って自分を抑え、昴の言葉待った。

「お嬢ほどのモンでも、呪符であれを降ろすんは無理や。もっとゴツイ依り代を使おてるはず。

たぶん、刀剣か何か……それを」

「壊せばいいんだな？ そういうことなら、俺がやる！」

「待ちたまえ」

決して怒鳴ったわけではないが、その声には有無を言わせぬ凄みがあった。

ロキが階段の上に視線を投げる。雷真もその視線を追って、彼女に気付いた。

化け物の向こう、階段の中腹に（金色のオルガ）が立っていた。

「約束を忘れたわけではないだろう？ 君が彼女を助けるのは自由だが、いかなる理由があろ

うとも、手を出した時点で君たちの負けだ」

言葉に詰まる雷真の前で、ゼカロス弟が疲れきった声で笑った。

「そうしていただければ、僕はとても助かりますけどね……僕はもう、ここで完全にリタイアですし……」

殴り飛ばしたい衝動に駆られる。思わずそちらをにらんだ瞬間、ごうつ、と化け物から火炎

が噴き上がった。ガルド犬が驚き、「ひいんっ」と情けない声を出す。

燃え盛る火炎を見ているうちに、雷真の全身を狂おしいほどの恐怖が支配した。

これは……そう、妹を失くしたときの、あの恐怖と同じだ。

炎を前にして、なす術もない……あの絶望と。

シヤルやフレイはもちろん、ロキやオルガでさえ、火炎から距離を取った。いくら魔力の炎と言えど、このままでは窒息してしまう。

ごうごうとやかましい轟音の中、昂のつぶやきは、やけにはっきりと聞こえた。

「おい、このド阿呆。ボケ雷真」

「何だよ！」

「お嬢のこと、よろしゅう頼むわ」

そう言った昂は——笑っていた。

いきなり火炎に突っ込む。一瞬で制服が引火して、火だるまになる。

それでも昂は止まらない。火炎をものともせずに突っ込んでいく。

「ぐ……おとおおお！」

魔力を振りしぼり、火炎に抵抗。そのまま化け物にとりついて、強引に甲冑をずらし、わず

かな隙間を作った。

そうか——魔力で構成された魔法生物には、魔力で対抗できるのだ。

理屈を理解したときにはもう、体が動いていた。

「ら……雷真——っ!」

夜々の悲鳴ははるか後方で聞こえ、火炎にまぎれて聞こえなくなった。となりにも出現した雷真に、昴が驚愕の表情を向ける。

「な……何しとんのや阿呆！ すっこんどけ！」

「うるせえ！ あれを引っこ抜けばいいんだろう!？」

昴が開けた隙間から、化け物の体内が見える。

心臓に相当するあたりに、ひとふりの短刀がきらめいていた。

短刀を握っているのは日輪だ。ぐったりとして動かない。胎児のように丸まって、虚空に浮いている。日輪に近付くことさえできれば――

「日輪！ しっかりしろ！ 今行く！」

雷真は呼吸を整え――最後の力を振りしほり、紅翼陣を展開した。

右腕からほとばしる魔力の糸を鋼線のように操り、火炎を切り裂く。

血液が大量に失われ、びりびりと手足に痺れがきた。体温が下がり、感覚が鈍る。眠い。それでも強引に、無理やりに、力任せに炎を祓う。

「昴！」

「わーっとる！」

炎の中を泳ぎ、昴が短刀に飛びついた。そのまま床に叩きつける。

ぎいんつ、と耳障りな音がして、刀身が折れた。嘘のように火炎が消える。瘴気はまだ停滞していたが、雷真と昴を焼いていた炎も一瞬で鎮火した。

「雷真！ 無事ですか、雷真！」

夜々が泣きながら駆けてくる。雷真は朦朧としながら、それでも笑って応えた。

「ああ……とりあえず、生きてるぜ……」

「雷真は馬鹿です！ ああいうときは、先に夜々を突っ込ませてください！」

「はは……悪い。でも、馬鹿はねーだろ。とっさに体が動いちゃっ——」

「こんの……大馬鹿野郎がああああああ！」

背中を思い切り蹴飛ばされ、床に転がる。雷真は受け身も取れずに転倒した。

「いってーな昂！ 何しやがる！」

「ほんつつつまのド阿呆やおまえは！ おまえが死んだら、お嬢が悲しむやろが！」

「溜めて言うな！ つつか、ド阿呆はてめえだ！」

つかみかかってくる昂の手を払いのけ、逆に胸ぐらをつかみ返す。

「おまえが死んだら、日輪が悲しむだろうが！」

昂ははつとしたように振り返った。六連に抱きかかえられて、日輪がさめざめと泣いている。

綺麗な顔が、もうぐしゃぐしゃのべしよべしよだ。

「昂……六連……よかつ……かんにん……よかつ……うあああん！」

声をあげて泣く。華族の姫が、ひと目ははばかりずに。

日輪は無事だ。昂は苦笑して、ほうーっと大きなため息をついた。

「……阿呆。泣くか、謝るか、どっちかにせえ」

「お嬢は無事です。これでめでたしめでたし、といきたいんですけど……」

六連がおっかなびっくり、階段上のオルガを見上げる。

雷真は奥歯を噛み、ロキとフレイに頭を下げた。

「……すまない、ロキ、フレイ。俺のわがままで……おまえらまで」

「薄気味の悪いことを言うな、バカが」

ロキはさばさばとした口調で、拍子抜けするくらいあつさりと言った。

「貴様のバカさ加減はよくわかつている。こうなることは折り込み済みだ」

「だが……俺が失格になった以上、もう俺たちの負け……」

「所詮は口約束だ。ここからはルール無用でやればいい。そうだろう？」

「待ってくださいよ……本気ですか、〈剣帝〉さん？」

わずかに狼狽した様子で、ゼカルロス弟が塔の外壁を示す。

「この戦いは魔術界の名士がこぞって注目してますよ？ そんな不正に訴えれば、貴方の将来

にどんな瑕がつくか——」

「オレには誰の後援も必要ない。必要なのは魔王の座だ」

「おまえがそうするつもりなら、俺も黙って見てるわけにはいかねーよな。夜々、疲れてると

こ悪いが、もうひと暴れ——」

「待ちなさい！ この野蛮人ども！」

張り詰めた空気を引き裂いて、シャルがびしやりと言いつつ放った。

「どいつもこいつも血の気の多い連中ね。ここは紳士の国なのよ？ 堂々と約束を反故にするなんて許されないわ。ゲームを続けるには参加者が足りない、ですって？ バカね、まだ私が

残ってるじゃない」

一同が「は？」という顔になる。

シャルは腕組みをして、偽物の胸をそらして宣言した。

「私がこのチーム最後のひとりとして、オルガとやってやるわよ！」

「待てよ、シャル。そうは言っても、おまえはまだ夜会ヤカイに出てない……」

「やはり、そういうことか」

納得した様子で、オルガが首を上下させた。

「審判がシャルロットを舞台から追い出さなかった理由がそれだ。シャルロットは今夜、自主降格していたんだな」

ようやく雷真らいしんにも合点がいく。シャルは前もって執行部に〈自主降格〉を申請していたのだ。だから、平然と舞台上にいられた……。

「相手チームの人数を確認しなかったのはそっちの不手際よ？　今さらフェアじゃない、なんて言わないわよね？」

シャルは不敵に笑って、挑発的にオルガを見た。細い体から魔力が漏れ、シャルの周囲に小さなつむじ風が生じる。

「私のヒノワをこんな目に遭あわせて、ただで済むと思わないで」

「……何のことかわからんが、そちらの数が増えることに文句はないよ。君一人が増えたところで、私とトールの相手ではないからな」

「……言ったわね。シグメント、この高慢女に吠え面はかせてやるわよ！」

「心得た。……だが、高慢はむしろ君の代名詞だな」

「まぜ返さないで！ お昼のチキンをエビ天のしっぽにするわよ！」

ばさり、と翼を広げ、シャルの腕にとまるシグムント。

二人の少女と二体の仔竜のあいだに、壮絶な火花が散った。

オルガは白いコートを翻し、上の段に足をかけた。余裕ありげに振り返り、

「上がってきたまえ〈暴竜〉。〈魔剣〉同士の戦い——これはギャラリ——にとっても最高の見せ物になるだろう」

「ええ、なるでしょうね。学生総代が無様に負けるところは！」

麗しい微笑みを残し、オルガは先に上がって行った。

雷真の脈が急に速くなる。夜々が気付いて、心配そうに雷真を振り向く。

「雷真？ どうかしましたか？」

「いや……何でもねえ」

——嘘だ。心臓が暴れている。何かを訴えかけるように。

のちに雷真は述懐する。

なぜこのとき、日輪を救っただけで『終わった』ような気になっていたのか。

真に〈運命〉の残酷さを知るのは、これからだったというのに——

「やっぱ面白いなあ、あいつは！」

夜のリヴァプール市街。運河から少し離れた、うらぶれた通り。

一軒の古びたバーで、黒衣の貴公子がグラスの酒を煽っていた。

黒太子エドモンド。見るからにご満悦で、対面の客に話しかけている。

「ダイダロスを墜としてくれてから、まだ半年も経っていない。それが、どうだ？ 一〇年、二〇年ではきかないくらいの成長ぶりだ。冬が終わる頃には、君を超えているかもしれないぜ、魔王くん？」

テーブルの向こうに悪戯っぽい視線を投げる。同席していたのは見るからに上流階級の男。仕立てのいいスーツを着こなし、無表情でグラスをつかんでいる。

男——ライコネンは鷹を思わせる双眸を向け、くさすように言った。

「小僧が生き残ったのは成長のためではない。対決したのが《神酒》を用いてなお二流の魔術師だった——それだけの話だろう」

エドモンドの背後で、お付きの黒服たちがぎよつとする。王族相手に何と無礼な！

だが、エドモンドは一層機嫌をよくして、楽しげに笑った。

「違う。俺ではなく君が《神酒》を使つてりや、あいつは今頃消し炭だ」

「……訂正してもらおう。使わずとも、消し炭だ」

「そいつはどうか。悪いが、賛同しかねるね」

黒服たちが再度ぎよつとする。魔王、それも軍の中将を相手に、何と無礼な……！

だが、ライコネンもまた、怒り出したりはしなかった。ただ冷ややかに、

「大きなことを言っていたわりに、《暗殺》には失敗したようだな」

「プランに裁可を下したのはババアどもだよ。俺はプラン通りに実行し、目立ったヘマもせず、そしてしくじった。これは俺の責任か？」

「まさか……こうなることを予期していて、なお手立てを講じなかったのか？」

「講じなかったのは俺じゃない。ババアどもがライシンを過小評価していたのさ」

ライコネンの双眸——鷹の眼に鋭い眼光が宿った。

「……たかが学生ひとりを試すために、薔薇の方々に遮蔽結界まで用意させたというのか。遊んでいる場合ではあるまい」

「遊んでいたのは俺だけで、ババアどもにはちゃんと実益があった。よくわかったはずだぜ、俺のライシンにどれだけ価値があるかってな。教父の〈予見〉は君も知ってるだろ。神性機巧の鍵を握ってるのはマグナスじゃない。ライシンの方さ」

「まさか……あの小僧を手に入れてはみたく言うのか」

「さて……ね。一応、コナをかけてはみたんだが」

「……フラれたようだな。貴方が相手では、当然だ」

エドマンドは苦笑した。ぽんつとテールに足を投げ出し、

「だが、俺たちは本質的に同じもの——いずれ同じ道を歩む。そんな予感はある」

「貴方と……彼が？ 同じだと？」

常に冷徹な表情のライコネンが、このときばかりは意外そうな顔をした。

エドマンドは面白がるようにその顔を眺め、大仰にうなずいた。

「同じだとも。俺も、あいつも、取り戻せないものを取り戻したくて、甲斐のない戦いを繰り返すのさ——未来永劫ね」

ライコネンはエドマンドを見つめ、そして、飽きたように嘆息した。

「貴方はこの俺を魔術名で呼びつけた。火急の事態かとも思ったが……こんな世間話が用件だったとはな。そもそも貴方は、本国を離れていたのではなかったか？」

「離れていたさ。そして、きちんと身柄を抑えた——俺の部下が、だがね」

さっと手を上げ、背後の黒服に合図する。やがて店の奥、暗がりの中から、黒服たちが一人の男を連れてきた。

無精ひげは伸ばし放題、頬はこけ、目は落ち窪み、見るからに憔悴しきっている。

だが、やつれていても、どこか気品が漂っている。もともとは高貴な身分だったのか、知的な眼差しや、意志の強そうな眉、凛々しい口元に特徴があった。

ライコネンの顔色が変わる。——見覚えがあるのだろう。

エドマンドは気さくな調子で、自ら席を立て男を迎えた。

「これはこれは、遠いところをようこそのお運び！」

優雅に一礼、王子の身分には似合わない、慇懃な口調で挨拶する。

「しばらく見ないうちに、ずいぶん人相が変わられましたね。プリュー伯爵」

男は言葉もなく、ただ険しい目をして、エドマンドをにらんでいた。

「それじゃ、役者がそろったところで本題に入ろう。この天才演出家が、夜会のキャストを華麗に踊らせてやるよ」

エドマンドはやはり屈託なく、どこまでも楽しげに笑っていた。

オルガが去ると、日輪はふらふらと立ち上がった。

雷真が少しあわてて、珍しく優しい声を出す。

「無理するな日輪。寝てていいぞ」

「そういうわけには……。あの、それで、お婆さまは……？」

「確認してるところだ。だが、婆さまはまだご存命らしいぜ」

ほっと脱力。せっかく立ち上がったのに、またも倒れそうになる。シャルが飛んできて、日輪の腰を支えてくれた。

「シャルロットさま……すみません……その、試合のことも……」

「謝らないで。貴女は頑張ったんだから、後は仲間任せなさい」

日輪の目尻に涙の玉が盛り上がった。遠い異国の地で、仲間だと言ってくれる人がいる——そのことが日輪の心を動かし、そしてあたためている。

日輪はうつむき、嘔みしめるように目を閉じた。そして——

「雷真さま。わたくしたちの婚約……破談にいたしましたよう」

一同が絶句する。真っ先に反応したのはシャルだった。

「どうして!? このバカのことを嫌いになったの? 確かにこいつはバカ界の殿堂入りで、考えなしで、女心を微塵も理解しない野蛮人だけど!」

「俺を罵倒したいだけか!? 少し黙ってるシャル!」

黙れですって!? と色めき立つシャルを押しつけ、雷真は前に出た。

「理由を聞かせてくれるか、日輪」

「……日輪は……皆さまに大変なご迷惑をおかけしました」

消え入りそうな声で、想いの丈を打ち明ける。

「わたくしは、不遜にも……勝ちに貢献できると思っていたんです。それなのに……足を引って……シャルロットさまがいなければ、雷真さまや、皆さまを敗退させるところでした……。こんな女は、雷真さまの足手まといになります……。わたくし、雷真さまの重荷にだけになりたくありません……。ですから」

「そうだな。確かに、おまえは泣き虫で、ヘタレで、重たい女だ」

「ちょ——雷真！ 何てこと言うんですか！」

なぜだか夜々が怒り出し、雷真の背中にぶつかってきた。雷真はその頭を押し返ししながら、日輪に向かって言葉を続ける。

「今のおまえはシャルにもフレイにも勝てない。そんな臆抜けじゃあな」

「……………」

「だから、いつものおまえに戻れ。そして——」

につ、と笑って続きを言う。

「力尽くで俺を奪えばいいさ。それがいざなぎ流だろ？」

日輪は目を見張り、大粒の涙をこぼした。熱いものがあふれて、もう止まらない。そんな日輪とは対照的に、ほかの少女たちの反応は極めて冷やかだった。

「何よ今の発言……最低だ最低だと思ってたけど……」

「雷真……逆レイ○願望……!?」

「う。雷真……猥欲のかたまり……」

「何で蔑む!? 一番効果的なやり方で励ましたよな!? そうだろ、ロキ!?」

付き合いきれない、という顔でロキが階段を上がって行く。

ロキに見捨てられ、女子たちによいように小突かれる雷真は、先ほどの戦いぶりが嘘のよう
な、情けない姿だった。

「……ふん、阿呆が。あれは死んでも治らんわ」

日輪のとなりで昴が苦笑する。

「なあ、昴。うち……ほんま悪い子や。言うたこと、何べんも何べんもひるがえして……雷真
さまのこと……あきらめよお思ったのに……できひん」

涙をぬぐいながら、駄々をこねるように言う。

「……あかんの。うち、やつぱり……あん人が好きやの……。せやから、その……昴には、ご
めんなさ——はひ!?」

ぴしっと昴の手刀が日輪の頭を叩く。

突然のことで対応できない。頭を押さえ、涙目で見上げる日輪に、

「阿呆。そんな、最初からわかつとるがな」

昴は満面の笑みで応えてくれた。

「気張りや。ほんで、嬢ちゃんたちに勝て。おまえはいざなぎ一門を背負って立つ女や」

「……ありがとお、昴」

「あ、阿呆! 礼なんぞいらんわ!」

「ははっ、ダルマはんみたいに赤いですよ昴」

「やつかまし！　しばくぞ六連！」

言い合う二人に背を押され、日輪は雷真の方に歩き出した。

夜々に首を絞められていた雷真がこちらに気付く。夜々がさっと手を離し、対抗心むき出しの目を向けてくる。……今は、その視線すらくすぐりたい。

ひとまず夜々の視線には気付かないふりをして、日輪は雷真に宣言した。

「雷真さま。わたくし、負けませんから」

「おう。頑張ろうぜ」

「雷真さま!?　ま、まさか、わたくしの勝利を願っていらっしやる……?」

「そりゃまあ……だって、俺たちは一連托生いちれんたくしやうだろ？」

「一連托生——っ！　きゅーんっ！」

恍惚とする日輪。多幸福感に包まれ、酔っ払ったみたいになっている。

日輪がほかの少女に勝つことを願うだけでなく、ともに戦ってくださる——

それはもう、わたくしが本命ということでは……!?

夜々は冷め切った目で雷真を見て、あきれ果てたようにつぶやいた。

「雷真……また甘い言葉で乙女心を弄もてあそんで……」

「そんなことしてないよな!?　夜会やかいを一緒に勝ち進もうぜって話だろ!?」

「ち……違います雷真さま！」

日輪の声が震える。喜びが大きかったぶん、失望も大きい。

「え?　違うの……か?」

「……知りません！」

「あ、おい……。夜々、何で日輪が怒ったかわかるか？」

「教えてあげません！ 雷真は馬鹿ですー！」

夜々までふてくされ、日輪と並んで階段に向かう。

立ち尽くす雷真のわき腹を、シャルが思い切り肘で突いた。

「貴方あなたって本当の本当にバカね！ バカの歴史を塗り替えるバカ銀河の超新星ね！」

「そんな称号はいらねえ！ つつか、何でおまえまでキレてんだ！」

怒っていたと思ったが、シャルはいきなり噴き出した。

くすくす、くすくすと楽しげに笑っている。

雷真はげんなりして——それから、シャルに釣られたように笑った。

「……ま、いいけどよ」

一同は連れ立って、そろそろと階段を上がる。

今宵、夜会よかいの幕はまだ下りず——

戦いの舞台には、冷たい熱気が満ちていた。



あとがき

こんにちは、海冬レイジです。

おかげさまで第8巻！ 8冊目にして、ようやく夜会がメインです。

……ど、どんな按配でしょうか？（びくびく）

今回はこれまでで一番ラブコメです。一方で、今までで一番バトルもので——計算が合わない！ 理屈に合わないこの無茶を、海冬レイジがどうやって実現したのか、ぜひぜひ貴方の目でお確かめくださいね。

今回、いよいよあの娘さんがメイン張っております。

彼女はかなり初期から頭がありまして、当初は3巻くらいで登場させたいなーと考えていたのですが、そうすると日本人比率高すぎ！ せっかく海外なのに！

そんなわけで、満を持してこのタイミングでの登場となりました。結果的に「ここしかない！」というタイミングで——結果オーライ。

（余談ですが、雷真のお蕎麦ネタ&思い出場面も3巻くらいの予定でした。海冬レイジ、行き当たりばったりにもほどがある……）

今回もたくさんの方のお力添えをいただきました。

るろおさん、日輪のデザインが素敵すぎです！ 着物の着方が超カッコエー！ そして犬まゆがラブリー♡ いつもありがとうございます！

近畿っばい言葉遣いは関西圏にお住まいの瑞智士記さん（『星刻の竜騎士』絶好調！）にアドバイスをいただきました。お忙しいところありがとうございます！

激務の中、ダメな子の海冬レイジを支えてくださる担当庄司さん（しょうじ）に大☆感謝！ 激務をさらに加速させてすみません……！

そして本書を手にくださった貴方に最大の感謝を！

次巻はあの娘さんと彼女の相棒がメインです。8巻は日常たっぷりでお送りしましたが、9巻は別ベクトルに加速いたしますので、どうか楽しみにお待ちくださいませ。

ではまた次回、機巧少女9でお会いできますように！

2012年3月 海冬レイジ

追伸。ファミ通文庫さまにて新シリーズ『も女会の不適切な日常』（アイドール）が始まっております。こちらもぜひぜひよろしく願います！

こんにちは。絵の人です。
ついに許嫁様が登場の8巻です。

ところで、許嫁ってどうすれば手に入るんでしょ。
AMAZONでは扱ってなかったので
今はヤフオクをヲチして出品待ちしています。

ともあれ、9巻の展開はどうなるのかなー。
今からドキドキワクワクですぜ。

